

松本市笛賀くまのかわ遺跡

—緊急発掘調査報告書—



1982.3

松本市教育委員会



A・B地点（西より）



A地点中央より東側部分
(南より)

カラー図版1 発掘地点全景



第1号住居址
遺物出土状況



カマド部分
遺物出土状況



カマド部分
掘り上げ状況

カラー図版2 第1、2号住居址



第1号墓址
(上面、木炭化物出土状況)



第1号墓址
(掘りあげ後)



鉄器出土状況



カラー図版4 I-2 織文後期土器出土状況

松本市 笹賀くまのかわ遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1982.3

松本市教育委員会

序

くまのかわ遺跡は神戸遺跡より続く奈良井川左岸の小段丘にあり、昭和55年度より継続している県営は場整備事業の工事区域内にあります。そのため、長野県中信土地改良事務所では事前に発掘調査を行い、記録保存をはかるために、松本市に調査の委託をなされ、市教育委員会では前年に引き続いて、日本考古学協会員の大久保知巳氏を調査団長に、地元研究者の方々を調査員にお願いして、調査団を編成いたしました。

調査は水田の取り入れの終った10月末より12月のはじめにかけて行われ、奈良・平安時代の住居址を主として、縄文時代から江戸時代まで住居址7軒と墓址3基を検出しました。特に河川に近い低地に縄文時代の生活跡が検出されたのは、昭和55年秋に行われた同地区牛の川遺跡に続くものとして、笠賀の地が広範囲にわたって、早くからひらけていたことを伺わせるものであり、その詳細は本文に記されたとおりであります。

この報告書が本地域の歴史の解明になにがしかのお役に立てば幸甚に存じますとともに、本調査がいささかなりとも埋蔵文化財保護の気運醸成に寄与するところがあれば、望外の喜びとするところであります。

終りにあたり本調査にご理解、ご協力下さいました調査団の先生方をはじめ、地元土地改良区の方々、また作業に献身的にご協力いただいた地元の方々、あがた考古会の方々など関係各位に深甚の謝意を表します。

昭和57年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例　　言

- 1 本書は昭和56年10月28日より12月10日にわたって行われた松本市^{笠賀}・^{神戸}遺跡群くまのかわ遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、更に神戸遺跡群調査会（会長 大久保知巳）に再委託をして行ったものである。
- 3 本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。また執筆にあたり次の者の援助を得た。高桑俊雄・直井雅尚
- 4 本書の編集は事務局が行った。
- 5 揭載した図類の縮尺は、次の通りである。例外となるものはその都度示した。

| | | | |
|-----------|--------|------------|-------|
| 住居址実測図 | 1 : 60 | 石器（小形品）実測図 | 1 : 2 |
| 縄文土器実測図 | 1 : 6 | 石器（大形品）実測図 | 1 : 4 |
| 縄文土器拓影 | 1 : 3 | 鉄器・鉄製品 | 1 : 3 |
| 歴史時代土器実測図 | 1 : 4 | 土製品 | 1 : 3 |

- 6 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調 査

| | |
|---------------|---|
| 第1節 発掘調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 1 |
| 第3節 調査日誌 | 2 |

第2章 遺跡周辺の環境

| | |
|----------|----|
| 第1節 自然環境 | 6 |
| 第2節 周辺遺跡 | 13 |

第3章 遺 構

| | |
|------------|----|
| 第1節 調査の概要 | 17 |
| 第2節 A地区 | 17 |
| 1. 第1号住居址 | 17 |
| 2. 第2号住居址 | 18 |
| 3. 第3号住居址 | 20 |
| 4. 第4号住居址 | 21 |
| 5. 第5号住居址 | 23 |
| 6. 第6号住居址 | 24 |
| 7. 第7号住居址 | 25 |
| 8. 第8号住居址 | 26 |
| 9. 墓 址 | 26 |
| 10. その他の遺構 | 28 |
| 第3節 B・C地区 | 30 |

第4章 遺 物

| | |
|------------|----|
| 第1節 遺物出土状況 | 32 |
| 第2節 土器・土製品 | 40 |
| 第3節 石器・石製品 | 45 |
| 第4節 鉄器・鉄製品 | 46 |
| 第5節 人骨 | 47 |
| 第6節 その他 | 47 |

第5章 結 語

付 芳川小6年生 発掘見学記

挿 図 目 次

| | | | | | |
|------|------------------|----|------|----------------|----|
| 第1図 | B地区土層柱状図・断面概念図 | 8 | 第25図 | 鉄器詳細図 | 46 |
| 第2図 | A地区土層柱状図・断面概念図 | 9 | 第26図 | 第5号住居址出土土器(1) | 48 |
| 第3図 | くまのかわ遺跡とその周辺遺跡 | 12 | 第27図 | 第5号住居址出土土器(2) | 49 |
| 第4図 | 発掘調査区 | 14 | 第28図 | 遺構外出土の縄文土器(1) | 50 |
| 第5図 | A地区グリット設定及び遺構分布 | 15 | 第29図 | 遺構外出土の縄文土器(2) | 51 |
| 第6図 | 第1号住居址 | 16 | 第30図 | 遺構外出土の縄文土器(3) | 52 |
| 第7図 | 第2号住居址 | 18 | 第31図 | 遺構外出土の縄文土器(4) | 53 |
| 第8図 | 第3号住居址 | 20 | 第32図 | 遺構外出土の縄文土器(5) | 54 |
| 第9図 | 第4号住居址 | 21 | 第33図 | 遺構外出土の縄文土器(6) | 55 |
| 第10図 | 第5・8号住居址 | 22 | 第34図 | 遺構外出土の縄文土器(7) | 56 |
| 第11図 | 第5号住居址黒曜石出土分布図 | 23 | 第35図 | 遺構外出土の縄文土器(8) | 57 |
| 第12図 | 第6号住居址 | 24 | 第36図 | 遺構外出土の縄文土器(9) | 58 |
| 第13図 | 第7号住居址 | 25 | 第37図 | 遺構外出土の土器・土製品 | 59 |
| 第14図 | 墓 址 | 27 | 第38図 | 第2号住居址出土土器 | 60 |
| 第15図 | 縄文後期初頭土器出土状況図 | 27 | 第39図 | 第1号住居址出土土器 | 61 |
| 第16図 | K～M-3～5グリット周辺ピット | 28 | 第40図 | 第1・4・7号住居址出土土器 | 62 |
| 第17図 | B地区グリット設定図 | 29 | 第41図 | 第6号住居址出土土器 | 63 |
| 第18図 | C地区全体図 | 31 | 第42図 | 遺構外出土の歴史時代土器 | 64 |
| 第19図 | A地区縄文土器出土分布図 | 34 | 第43図 | 出土石器(1)・石製品 | 65 |
| 第20図 | A地区須恵器出土分布図 | 35 | 第44図 | 出土石器(2) | 66 |
| 第21図 | A地区土師器出土分布図 | 36 | 第45図 | 出土石器(3) | 67 |
| 第22図 | A地区土師器(内黒)出土分布図 | 37 | 第46図 | 出土石器(4) | 68 |
| 第23図 | A地区灰釉陶器出土分布図 | 38 | 第47図 | 出土石器(5) | 69 |
| 第24図 | A地区中世陶磁器出土分布図 | 39 | 第48図 | 出土鐵製品 | 70 |

表 目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1表 種別出土分布量一覧表..... | 71 |
| 第2表 器種別出土分布量一覧表..... | 74 |
| 第3表 歴史時代土器一覧表..... | 80 |
| 第4表 石器・石製品一覧表..... | 82 |
| 第5表 鉄器・鉄製品一覧表..... | 83 |

図 版 目 次

| | |
|---------------------------------|----|
| カラー図版 1 発掘地点全景..... | 口絵 |
| カラー図版 2 第1・2号住居址..... | 口絵 |
| カラー図版 3 第1号墓址・第6号住居址鉄器出土状況..... | 口絵 |
| カラー図版 4 I-2縄文後期土器出土状況 | 口絵 |

| | |
|---------------------|-----|
| 図版 1 発掘調査地遠景..... | 91 |
| 図版 2 第1・2号住居址..... | 92 |
| 図版 3 第3～5号住居址..... | 93 |
| 図版 4 第6～8号住居址..... | 94 |
| 図版 5 第1～3号墓址..... | 95 |
| 図版 6 その他の遺構..... | 96 |
| 図版 7 土器(1)..... | 97 |
| 図版 8 土器(2)..... | 98 |
| 図版 9 土器(3)..... | 99 |
| 図版10 石器(1)..... | 100 |
| 図版11 石器(2)..... | 101 |
| 図版12 石器(3)・黒曜石..... | 102 |
| 図版13 土偶・鉄器・齒..... | 103 |
| 図版14 記念撮影..... | 104 |

第1章 調査

第1節 発掘調査に至る経過

昭和55年9月6日（金）晴 県文化課臼田指導主事、中信土地改良事務所花岡主事、市教育委員会神沢らにより現地協議の県営は場整備事業に伴う事前の発掘調査の必要性と調査箇所の設定をする。中二子橋を渡って上二子部落の入り口北側に水田と比高差60cmあまりの段があり、この段上有遺跡のある可能性を強く感じる。そのため小水路にそって北側水田をみて歩き、墓地北西端を中心として調査を行うこととする。

昭和56年5月22日（金）晴 中信土地改良事務所関連事業課丸山太一主査と市教委神沢が打合せ。今回調査については笹賀神戸遺跡群として書類の提出をしてあるので、"神戸遺跡群・上二子遺跡・中二子遺跡"として今後は扱うこととする。調査は夏場施工分については今迄も遺物の出土をみていないので立合い調査程度とし、秋冬施工部分で発掘調査することとする。

笹賀地区については54年度牛の川遺跡、55年度神戸遺跡と発掘調査を続けており、本年度は三年目にあたり、は場整備計画にあらかじめ埋蔵文化財発掘調査を入れてあるため、事務的にはスムーズに行われた。

第2節 調査体制

中信土地改良事務所と市では調査の委託契約を結んだが、市独自での調査体制がとれないため、日本考古学協会員の大久保知巳氏を会長とする神戸遺跡群調査会に再委託をし、下記調査団の編成を行った。

| | | |
|-----|-------|----------------|
| 団長 | 大久保知巳 | 松本市島内5207-3 |
| 調査員 | 太田 守夫 | 松本市芳川小屋 |
| " | 山越 正義 | 南安曇郡明科町南陸郷2528 |
| " | 西沢 寿晃 | 松本市惣社434-3 |
| " | 横田 作重 | 松本市大村312 |
| " | 三村 雄 | 松本市里山辺1646-4 |
| " | 倉科 明正 | 松本市原115 |

〃 熊谷 康治 塩尻市洗馬2241
〃 降旗 俊行 南安曇郡三郷村明盛

事務局

市教委社会教育課長 田堂 明
〃 文化係長 神沢昌二郎
〃 文化係主事 百瀬 清

協力者

瀬川長広、吉沢西己、大出六郎、三沢元太郎、滝沢智恵子、直井雅尚、伊藤やすよ、米山茂登吉、原 ゆき、鈴木長雄、原 静子、水口栄三、赤羽宏子、土屋孝幸、水口千里、平林いく子、荻沢千史、宮沢和江、村上美保子、山田佳朗、石曾根好子、田川明子、百瀬丙午、水口栄美子、水口治子、大島志げみ、赤羽きみ、小松みつ子、鈴木ながみ、米山艶子、伊藤ときわ、伊藤わき、百瀬茂子、古林登美子、原 卍子、岩垂陸彰、田口すむ子、米山東穂、伊藤千代美、小沢けさ子、塩原きく、平林あや、古林久雄、牛丸おと江、古林雄三郎、多々地善子、古林幸子、開嶋八重子、伊藤たず子、平林 健、古町澄子、花村久子、鳴田とみ子、高野健介、赤羽千鶴、百瀬洗三、開島律子、上条国雄、百瀬功一、伊藤勇治、伊藤真治、高山三千彦、莊 秀也、風間 宏、交告富美子、石田千恵子、大村由香、上野正春

第 3 節 調 査 日 誌

昭和56年10月1日（木） 松本市教育委員会と調査会大久保知巳氏と業務委託契約を結ぶ。

10月9日（金）小雨 中信土地改良区花岡主事、笹賀土地改良区丸山隆男理事、水口栄三委員長と共に現地調査を行う。上二子4630番地水口静雄氏宅前庭にて茶碗片表採。

10月23日（金）晴 笹賀土地改良区大槻氏、犀川興産丸山氏、市教委神沢らによって、中二子遺跡の調査箇所決定。

10月28日（水）晴 ブルドーザーにより表土はぎ開始。神沢立合。中央水路の東側をA地区、西側をB地区とし、A地区より開始。表土は南よりが浅く、北に行くほど深くなる。中央東寄りの一60cmあまりで縄文土器片出土。

10月29日（木）雨 雨天ではあるが表土除去作業継続。縄文土器片のほか土師器片、天目茶碗片等出土。

10月30日（金）晴 B地点とした水路西側畑の表土除去。-90~100cmで深い疊層になりその下限は極められない。部分的に層が変るが-80~90cmの黒色砂層より縄文中期深鉢型土器片出土。

本地点の北600mあまりの中二子遺跡も11時より表土除土。耕土は浅く30cm位で中世陶器の小破片が數片検出されたのみである。

- 10月31日（土）晴 B地点北側水田の表土はぎを行うが遺物の検出なし。
- 11月1日（日）晴 作業員が入る。ブルドーザー除土後を助農により削平する。
- 11月2日（月）雨 定休日、業者によりプレハブ小屋設置。
- 11月3日（火）曇 雨水排除。グリット設定。北西端を基点として東西はA～N、北から南に1～15区として各4×4mのグリットを設定する。
- 11月4日（水）曇 E-11周辺、D-11・12、K-6、G・H-16等の掘り下げ。E-11、K-6より灰釉陶器片出土。
- 11月5日（木）薄曇 前日に引き続きD・E-11周辺を掘る。太田先生により地形・地質調査を行う。
- 11月6日（金）雨 雨天休日、大久保團長、神沢とにより遺跡名などについて打合せ。
- 11月7日（土）薄曇 D～G-13～15、E・F-11～13等を掘り下げる。ほとんどが縄文土器片と土師器、灰釉陶器片の出土を見る。
- 11月8日（日）晴寒し 前日の継続。G～I-11～13等を掘る。E-12より炉石状のもの検出。周辺より炭、骨片、土師内黒出土。
- 11月10日（火）晴 朝寒し。E～G-11～13、J～L-5・6を掘る。一方測量班により測図、遺物とりあげ。F-13で完形石錐検出。J・K 6あたりに落込みがあるらしい。K 6中央で須恵四耳壺か段つき部分破片出土。
- 11月11日（水）薄曇 J～L-3～5、E～G-12掘り下げ。K-5の須恵器出土土地周辺が僅かに落込む感じであるが、住居址かはっきりしない。G-12では縄文中期土器と須恵器がほぼ同レベルで混在。南西側では縄文式土器が伏った形で出土。南より中央部に土偶脚部など3点あり、これが同一土偶となる。他にF・G-12測図・遺物とりあげ。
- 11月12日（木）晴 D～I-12～15、J～M-4～6、墓塙1・2掘り下げ。J～M-4～6測図、土器上げ。縄文・土師・須恵等同一レベルで検出。墓塙1（B-9）では骨片、寛永通宝2枚、北側より出土。ムシロ状の炭化物あり。掘り込みは長さ（南北）約2m、巾80cm、深さ20cm。墓塙2（C-3）は骨片出土。F・G-1・2、赤褐色土で礫が多い。遺物は少ない。G-1は北壁-80cmまで掘る。黒青色の砂礫層となる。
- 11月13日（金）晴 D-13、F-13・14、G-12測図後更に掘り下げ。F-13で破壊されているカマドらしいものを検出。I・J-6・7、B-6、F-1～3、G-1～3等を掘る。G-3では縄文中期土器片が多い。墓塙3（M-3）たち切り。部分的に木質部残存。
- 11月14日（土）晴 H-6、K-7、G-3、E～G-13・14等掘り下げ、B地区グリット杭打ち。H-6より土師环検出。

11月15日（日）晴 B・C-5・6より縄文中期、後期初頭遺物出土。石剣状石器出土。遺構の確認は疎中で不可能。墓壙2・3精査。G・H-5中心に第1号住居址となる。

11月17日（火）曇午後寒し 第1号住居址プラン追求。東西3.5×南北2.5m位の方形の竪穴になるらしい。東壁に焼土があるので煙道があるのであるのかも知れない。全体に大疊が散乱している。H・I-8・9で落込みを感じる。D-6、F-3等掘る。M-9に第4番目の土壙があるかさがす。

11月18日（水）晴 H・I-9は住居址となり第2号住居址とする。F-13は疊の下約70cmを掘り下げたところ炭化物を検出。その分布状態を測図する。G-13の集石はカマドになるらしい。D～F-15の東西に深さ70cmのトレンチを掘り土層をみる。K～M-9のうちL-9で住居址の一部が検出される。他に第1号住居址測図を行う。

11月19日（木）快晴 第1・2号住居址を掘り下げる。L-9にかかる住居址を第3号住居址とする。東側にまっすぐに延びる煙道を検出。第2号住居址周辺グリット掘り下げ。他にF・G-13土層調査。

11月20日（金）晴 F・G-1～3測図、土器片取り上げ。J-4～6、K-M-3～5を平滑に下げて落ち込みをさがすが判然としない。J-10に煙道をもつ第4号住居址を検出。第2号住居址測図、土器取り上げ。第1号住居址測図、東壁とりはずし。D～F-15断面地層図とる。

11月21日（土）小雨、曇 午前中雨天のため土器洗い。註記作業を行う。午後I-5をあける。第1号住居址東壁を追うが焼土不明。第2号住居址覆土中の土器とりあげ。その後更に掘り込むが土器片多く検出。

11月22日（日）快晴 第1号住居址東西土手の断面図をとり、その後土手はずしを行い、疊の洗い出しを行う。右の間より須恵器の横瓶が出土。上部で出たものと接合される。このことにより本住居址内に石が投げ込まれ破壊したのではないかと思われる。第2号住居址東北側の遺物地点測図とりあげ。J・K-7・8を5cm程掘り下げる。柱穴あり。M-9も掘り広げたが住居址か落込みの線があるのみで判然としない。A-5東側に落込みあり、縄文後期初頭の土器片は出土しても遺構は確認できない。B地区南側9グリットをブルドーザーの歯あとを削る。

11月24日（火）晴 第1号住居址の床面の範囲を確認するために壁周辺を精査する。第2号住居址の遺物とりあげ。床面、壁の精査にうつる。M-6・7を掘り下げ。黒曜石が多数検出される。第3号住居址掘り下げ中に、鉄製品及び土偶片出土。他にI・J-9・10の掘り下げ等も行う。

11月25日（水）曇 第1号住居址の集石測図。第2号住居址ベルトはずし。M-6・7周辺を第5号住居址とし、東側を整理して掘り下げにかかる。

11月26日（木）小雨、曇 第1号住居址内疊の取りあげ、その下部の遺物の検出にかかる。第2号住居址床面精査。焼土および床面上の土器の洗い出しを行う。第4号住居址については切り合ひ状況をつかむために更に掘り下げを行う。第5号住居址の黒曜石の出土範囲を追求。

11月27日（金）雨 雨天のため図面整理、土器洗い、註記作業を行う。

- 11月28日（土）晴 第4・5号住居址掘り下げを行う。
- 11月29日（日）晴 第4号住居址上部遺物出土状況測図、とりあげ。第5号住居址北側拡張。
土師器大破片のレベルより下で縄文中期土器片及び石器検出。
- 12月1日（火）晴 B地区たち切り。断面図・平面図をとる。A地区J～M-3・4周辺掘り込み。他に第2・4号住居址精査。L-2で住居址出かかる。第6号住居址とする。
- 12月2日（水）小雪、曇 A地区造方測量準備。L-2を中心第6号住居址が排土の下に統くため、男性全員で除土。墓壙2・3作図。第3号住居址遺物出土状況測図。中二子遺跡実測図とする。
- 12月3日（木）晴 造方測量杭打ち。第1号住居址測図。K・L-7・8に後期土器検出。J-6落込み中より玉（欠品）出土。
- 12月4日（金）晴 第1号住居址南壁出す。第2号住居址測図。第5号住居址遺物とりあげ。第6号住居址南に深い落込みあり。その中間-60cmで縄文中期曾利III式に比定される破片出土。信濃毎日新聞社記者取材に来訪。
- 12月5日（土）晴 第2・3号住居址ピット完掘。カマドたち切り。第4号住居址壁追求。第5号住居址土手取りはずし。第6号住居址壁追求、遺物とりあげ、鉄器多し。本日をもって一般作業終了。あと測量、たち切りを行う予定。午後4時団長より今回調査の成果について話す。中日新聞記者取材に来訪。
- 12月6日（日）晴 I-2を中心とした後期土器出土地点拡張。第6号住居址測図、柱穴さがし。第2・3号住居址測図。第1号住居址柱穴さがし等の作業を行う。 笹賀4140大島伝作氏より既出遺物（縄文中期曾利II・III式比定）の寄贈を受く。
- 12月7日（月）晴 第2・3号住居址測図。第6号住居址掘り込み。芳川小学校6年生見学。
- 12月8日（火）晴 第1号住居址焼土たち切り。下より灰釉坏出土。第2号住居址カマド断面図とり、土師器とりあげ。第3号住居址測量完了。第4号住居址セクション図とり。土手掘りあげ。北側縄文後期土器出土状況測図、土器とりあげ。
- 12月9日（水）晴 全体測量。第6号住居址遺物とりあげ。
- 12月10日（木）晴 テント撤収。資材搬出。

（事務局）

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

1. 遺跡及び周辺の地形

本遺跡は、北流する奈良井川左岸のはん氷原上（沖積層）に位置し、現河床とは300mの至近距離にある。遺跡の東は、小段丘がいを経て現河床面に続く。この段丘がいはさらに北へ延び、中二子を経て下二子に至っている。中二子集落（中二子遺跡）や下二子集落（下二子遺跡）もこの段丘面上に載っていて、沖積はん氷原上にある遺跡として注目されてきた。遺跡の西は、起伏量の小さい平坦な面が広がり、鎮川扇状地の堆積面に接している。

奈良井川と鎮川の堆積層の接觸線については、まだ不明な点も多いが、本遺跡は堆積層、堆積の方向、傾斜などからみて、奈良井川のはん氷によるものと考えられる。上流の牛の川遺跡のように、西岸の河岸段丘に影響されることなく、奈良井川左岸へのはん氷の一般的方向NW（鎮川はNNE）を示した。広いはん氷原中の自然堤防状の堆積である。この状況は最近まで目撃できたもので、昭和35年印刷の国土地理院、二万五千分の一地形図（明治43年測量・昭和6年修正）に判読ができる。これによると、小俣橋より下流における両岸へのはん氷が顕著で、神戸橋以北では現河床と両岸との高度が同じである（戰後砂利採取や堤防の完成により、昭和49年改測では河床の低下が表現されている）。特に神戸橋以北は右岸地籍よりも低く、明らかにNW方向のはん氷を示している。

また遺跡の載る小段丘面の傾斜は0.8度、段丘下の面の傾斜は1度であって、明らかに現河床及び現河床に続く面と堆積期を異にしている。恐らく上記の牛の川遺跡、神戸遺跡とともに、その後のはん氷で被覆、破壊を受けているが、遺跡・遺物の存在からも、ある時期の共通性をもった堆積とみられる。従って後に現河床に近い河流によって、段丘化した可能性が強い。

2. 遺跡の堆積層とれき

はん氷原の堆積層は複雑で、自然流堆積層であったり、洪水性の堆積物であったりして、相互関係をきめることは難しい。本遺跡でも、B地区の自然流の堆積、A地区とB地区間のれき層、A地区内の砂質粘土層、土砂まじりれき層、あるいはこれらのはさみなど、80m程の間に極めて複雑な変化を見る。さらに細密に観察をすれば、その連続性さえも疑われる程である。

堆積層のれき種は、古生層起源の砂岩・硬砂岩・粘板岩・チャート（灰黒色）・けい質岩・輝綠岩・

う灰岩である。形状は円れき・亜円れきで、れき径は $25 \times 15, 20 \times 12, 10 \times 8$ cm 等が多数、いずれも大れきは硬い砂岩・硬砂岩・チャートである。砂層や粘土層に混入しているものは、 $3 \times 3.4 \times 3.6 \times 3$ 等の小れきで、砂岩・チャート・粘板岩である。

これらの堆積状況を、遺跡の表層である耕土(水田)およそ 35 cm を除いた地下面でみると、西から大体砂れき、砂、砂質粘土、砂れき〔B 地区〕。砂れき、砂質粘土、砂れき、砂質粘土(深)、砂れき(一部)〔A 地区〕—A・B 地区间の砂れきは連続する堆積一になっている。またこの堆積の方向を砂れき層によってみると、N $20^{\circ}W$ であって、B 地区で発見された自然流の方向とも一致し、流れの方向と考えられる。

次に地層(土層)の状態(第 1・2 図)をみると、耕土(水田)である表層は厚さ 35 cm 前後で、灰黒色のじゅう土である。その下部は灰色の溶脱層をもち、さらに 10~15 cm の黄褐色~褐色の鉄、マンガンの沈澱集積層となり、沈澱は土層の外一部の下部のれき層まで及んでいる。表層の下は、第 1 図にみるように、れき・砂・土砂まじりれき・砂質粘土等整合あるいははさみ状に、多様な堆積を示している。

B 地区についてみると、中央に N $20^{\circ}W$ の方向に淘汰のよい砂層が続き、その左右は粗粒の砂あるいはれきまじりの砂に変化したり、れきまじりの砂がレンズ状に、また、はさみ状に入りこんでいる。小れきはさんだ砂層は、次第に小れき層のはさみに変わり、やがてれき層(小れき→中れき)に移っていく。また A 地区との間には、大れきが多くみられ、A 地区の一部に及んでいるのは注目される。

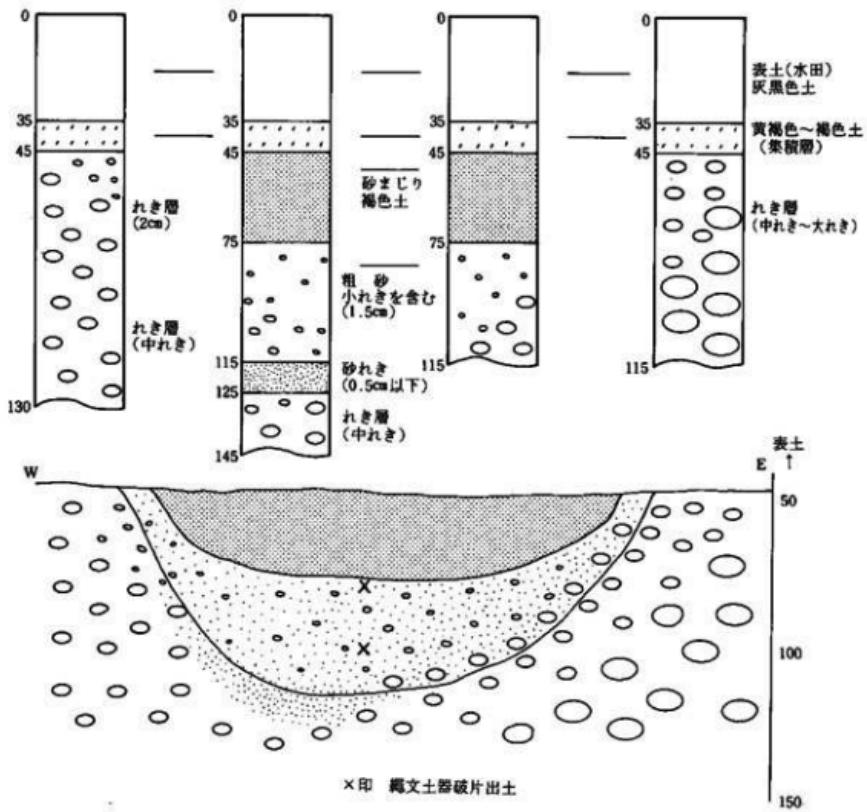
砂層の下底は約 80 cm で粗砂まじり小れき、さらに中れき層に変っている。川幅は 12~15 cm と思われる。これらの状況は明らかに自然流と考えられ、恐らく小中れきの堆積後、なお小流として存在したものであろう。

A 地区は先に述べたように、西側にれき層が厚く東へ行くに従い粘土層になるが、間に小中れきの砂れき層を経て、厚い粘土層に変わる。特に北東部の粘土層は 1 m を越えて厚い。段丘がい近くに一部れき層が現われるが、切れて続かない。現在、これらの堆積物は段丘がいで切れているが、さらに東へ広がっていたものである。

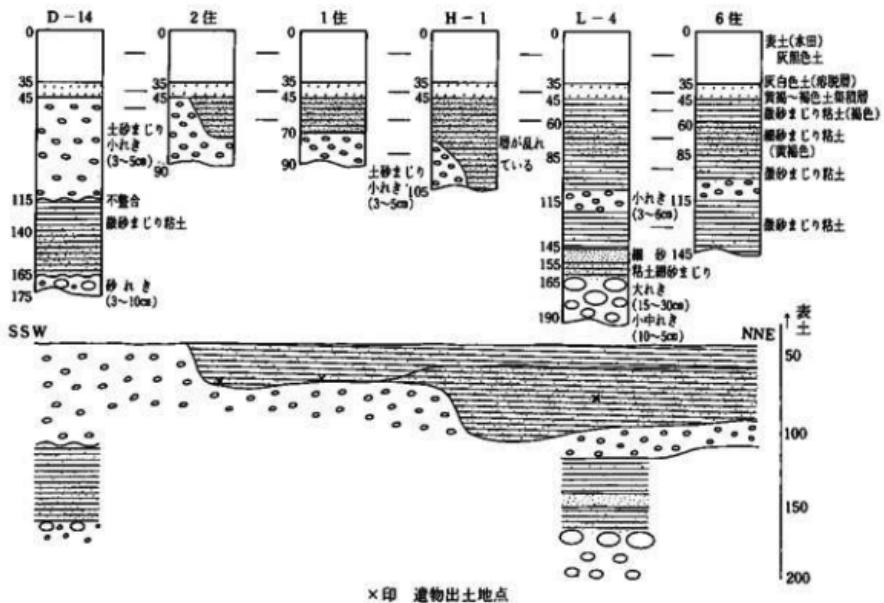
さらに地層の断面についてみると、D-14 と L-4 (第 2 図) の断面の状態からわかるように、A 地区の堆積層は上部層と下部層に分けられる。すなわち、D-14 の地下 115 cm にある不整合面は、L-4 の小れき層にあたり、河川堆積物であるが、明らかに上下二層に分かれ、その堆積時期を異にしている。また D-14 の厚いれき層は、土砂まじりの小れき層で、内部に土層を包含するなど、洪水性の堆積物とみられる。

これを堆積順に整理してみると、次のように考えられる。

- (1) 下部層の堆積
- (2) 上部層の堆積 B 地区と A、B 地区间の上部れき層の堆積。A 地区の粘土層は同時異相。B 地



第1図 B地区土層柱状図・断面概念図



第2図 A地区土層柱状図・断面概念図

区の小流が地形面に残る。

(3) (2)の地形面の安定、B地区の小流の消失

(4) A地区洪水性堆積物の侵入 土砂まじりの小れき、微砂・細砂まじり粘土層の堆積、A地区に広がる。

(5) (4)の地形面の安定

(6) 段丘の形成

なおこの地域は、奈良井川の本流に近く、先史、歴史時代とともに、はん氷が激しく、河流とはん氷原面とに高度に大差がなかった。従って、上記の外に浸食堆積を受けていると思われるが、現在の資料では判断できない。

本流とはん氷原面の高度とに大差がないとすれば、遺跡の面はさらに東へ広がっていたものとみられ、段丘の形成も現段丘以外に、小規模のものがたびたびつくられたであろう。

実際明治時代から現在まで、現段丘下へたびたび浸水していた事実から、最後の段丘形成は歴史時代であったといえよう。

3. 堆積層と遺物

本遺跡の住居址・遺物は、縄文期・土師期・平安期と考えられている。これらの出土層と堆積層を対比してみると、次のような関係がみられる。

縄文期 縄文期の生活面は、B地区の堆積中に遺物が存在することから、小河流の消滅した時期、すなわち上記(2)の地形面の安定した時期—(3)以後であろう。遺物や住居址が、B地区で地表下60~70cm、同時異相と考えられるA地区の粘土層で、60~70cm及び100cm(最深140cm)の微砂・細砂まじりの粘土層中に発見されている。これを周辺地域でみると、上二子の他の地蔵で60~80cm、神戸戸籍で80~140cmの褐色土中に発見されていて、はん氷原の中における、当時の生活面の位置の共通性は興味深い。

土師期 A地区的粘土層の上部には、層が乱れているところがある。また縄文期の住居址の一部が破壊されたり、流れに洗われたとみられるようなところもある。また縄文期の土器片に流されたものもみられるという。これらは洪水性堆積物中の縄文期遺物(土器片)とともに、縄文期後における地形の変化と考えられる。土師期はこの地形の変化の後の安定した面—(5)に生活面を広げたものとみる。すなわち土師期の住居址は(5)の地形面に切りこんだ形で存在することからも考えられる。

平安期 土師期から平安期、さらに現在までの地形変化を示す資料は、段丘形成のはか発見できない。恐らくははん氷の危険にたびたびさらされたと思われるが、大体安定した地形面だったと想像される。

4 L-4 地点の大れきについて

L-4 の下底（150cm）に発見された厚さ20cmのれき層である。2m×1mの面積（ピットの底面）に二層をなして堆積し、そのうちの第一層は26個の大れきが、表面を上に向けて比較的整った状態でならんでいた。第二層は周囲の遺構保存のため十分調査できなかったが、ほとんど同じ大れきで埋められていた。大れきの径は25×20×10~30×25×15cm位で、れき種は砂岩・粘板岩・チャートである。その下層は砂まじりの小中れき層、上層は厚さ5cm程の細砂まじりの粘土層で、その上は陶汰された細砂層と細砂まじりの粘土層（25cm）となっていた。分布の範囲はなお広がるものと思われるが、ピットの深さのためこれ以上の調査はできなかった。

この大れき層が自然流の堆積物であるか、人工の配置物であるかは、遺跡の解明にも関係をもち興味深いものであるが、現在の資料では次のことしか判断できない。

まず自然流の堆積物とみた場合、基底層（現在わかっている最下底層。D-14の最下底層とれき径・れき種・堆積層をおなじくするL-4地点の最下底層一下部層の基底）に、急な流れの変化が生まれ堆積したもので、第一層に砂れきを混じえない点は、よく洗われた表面に、後でゆるやかな流れに変化した時の砂層が堆積したと考えられる。

しかし、次のような問題点があげられる。

- (1) 急な流れの変化と考えた場合に基底層に乱れがない。
- (2) 大れきのならび方が比較的整然としていて、表面を上に向いている。洪水性の堆積物としては、やはり整然としていて薄い。
- (3) D-14の下部層の堆積からみると、大れき層は異相である。
- (4) 大れき層を包む砂れき層がない。
- (5) 牛の川遺跡の発掘の時にも、同様な状態のれきが発見された。時間切れで最終的な確認はできなかった。

以上を考察すると、人工配置物とも考えられるが、周辺の分布状態を確認しない限り速断はできない。

5 植生について

自然環境において、植生を考えることは大事なことである。上流の牛の川遺跡の場合、出土の炭化物の分析から、住居群の周りにナラとクリを中心とした、落葉広葉樹林の自然林が想定されたが、本遺跡では資料に乏しく分析にたえるものがなかった。しかし同様の想定が可能であろう。ただ、はん疊原の中心だったので、川原地、荒地、やぶ、樹林の景観だったにちがいない。

（太田 守夫）



第3図 くまのかわ道とその周辺遺跡

第2節 周辺遺跡

くまのかわ遺跡は奈良井川左岸の現河床に続く第三段丘の沖積地にあり、海拔約621mである。笛賀地区は南北に約8km、東西に約2kmと奈良井川に沿って細長く、遺跡は弥生時代を除き、縄文時代より近世に至るまで続いている。

笛賀地区内を時代別にみると、先土器時代遺物の出土はなく、縄文時代に入ると奈良井川左岸の第三段丘上に南北に遺跡が点在する。笛賀地区南端近くの標高約660m余りの今村遺跡では数ヶ所の道路、宅地より加曾利E式土器片や掘之内式土器片が出土しており、北へ約1.5km下ると牛の川遺跡があり、昭和54年の発掘調査では縄文中期中葉から後葉にわたる住居址10軒と平安時代の住居址1軒他を検出した。牛の川遺跡の北約1.2kmの神戸遺跡では直径約1kmにわたる広範囲に遺物が出土しており、昭和55年の発掘調査では平安時代の住居址2軒と20基程の墓址と共に少量の縄文時代の打製石斧が出土した。今回調査をした上二子でも大島伝作宅や大島修二宅で新築・増築の際に地下約1mより縄文中期後葉の土器片が出土し、この他の数ヶ所で遺物の出土をみている。下二子では大久保原工場団地造成の際に打製石斧を出土している。

弥生時代については現在のところ発見されておらず、古墳時代になると今村遺跡より約400m南の段丘中段の林内に柏木古墳があり既掘で蓋石を残している。牛の川遺跡近くの下小俣の平地に大塚古墳があり蓋石5枚が現存する。他に牛の川遺跡A地点で水田の下より古墳の石積み1段が残って検出されている。

奈良・平安時代についてみると圧倒的に平安時代後半が多く、牛の川遺跡、神戸遺跡、くまのかわ遺跡、中二子遺跡と点々として続く。地表下80~120cmの黒色又は黒褐色土層より土師器、灰釉陶器を主として出土し、一部出土地点ではそれに須恵器が加わる。下二子や大久保原工場団地遺跡西側の神林下神地区の中松原、中道、小原でも地表下1m余りより土師器の出土をみている。

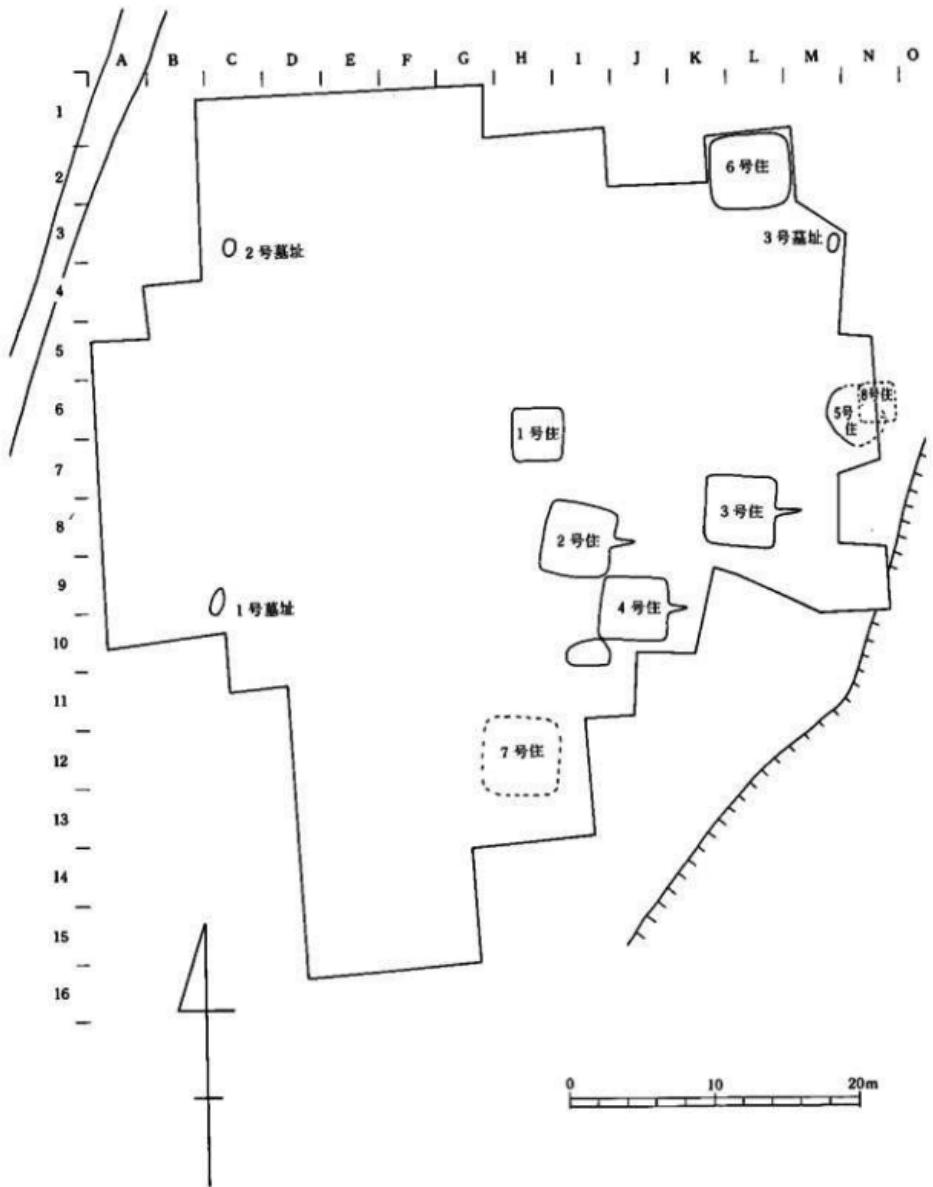
笛賀地区の西側に流れる鏡川流域についてみると、縄文時代早期押型文土器片と、環状集石を検出した今井地区のこぶし煙遺跡が右岸にあり、その南側集落には大月自動車工場遺跡があり縄文中期土器片が出土している。神林地区に入って、川西部落では部落南の開田作業で縄文中期中葉から後葉の土器片、土偶などが出土地で出土している。平安時代になると、今井北耕地、南耕地遺跡から土師器片などが出ており、神林川西部落内西側より土師片の出土をみている。和田太子堂、和田町から土師器、須恵器が出土している。

奈良井川の右岸では芳川小屋の段丘上で縄文中期の打製石斧が出土しており、平田本郷の河野武司宅地および周辺より、土師、須恵、灰釉陶器等が出土している。

これらを通してみると奈良井川の特に左岸では段丘上に縄文・平安時代の遺跡が分布しており、該期は左岸だけについて言えばかなり安定していたのではないかと推定したい。（神沢昌二郎）



第4図 発掘調査区 (1:3000)



第5図 A地区グリッド設定及び造構分布図

第3章 遺構

第1節 調査の概要

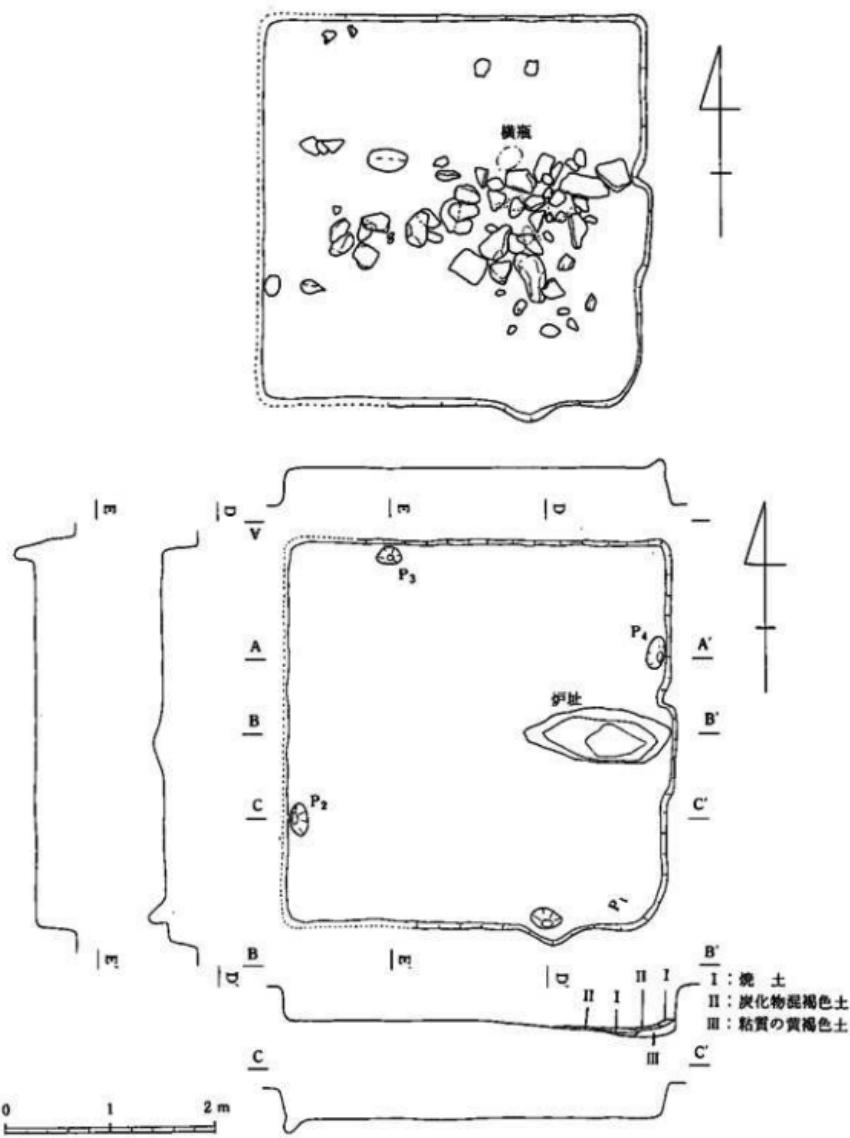
今回の発掘調査は上二子地区内にA・B地区と中二子地区に1ヶ所の計3地区を発掘調査したが、その主たるところはA地区であるのでそこを中心として記す。

A地区はやや北東に傾斜する水田でその耕作土を除去した後の削平作業により計8軒の住居址の検出をみたが、南西方面には河川の押し出しによる礫があって遺構の確認がむづかしかった。時代順にみると縄文中期中葉の住居址1軒と、同時期の遺物出土地点があり、後期初頭の遺物出土地点1ヶ所は耕作土下80cmあまりの深さに完形土器2個体を含めて3個体分の土器を検出している。縄文期を総じてみれば遺物出土量の差はあるがほぼ全域にわたり、集中出土区は3ヶ所である。奈良・平安時代になると住居址は7軒検出され、いずれもが3~6m四方の東側にカマドを持つ住居址で特に第1~3号住居址内出土の遺物は松本地方では類例の少い好資料を得たと言えよう。また第6号住居址では鍛造途中と思われる鉄製品の出土がありこれも特筆されるものの一つである。

第2節 A地区

1 第1号住居址（第6図）

本址はA地区のほぼ中央でH-6・7にあり東側が僅かにI-6・7にかかる。プランはほぼ正方形で東西3.76m、南北3.70mで、柱穴は4本あるがいずれも30×20cmあまりの楕円形で壁にむかってやや傾いてうがたれている。位置は4本ともコーナーより1mあまりずれており、特にP₁は他の柱穴に比べれば壁内にあたる位置にあり、この部分だけ壁が外へふくらむ。壁高は南側が30cm、一番深い北東側は40cmあまりである。床は南側は比較的しっかりしているが、西側では小砂利の層になりはっきりしない。そのため壁もこの部分でははっきりしなくなる。東壁寄り中央には1.4m×0.5mの東西に長い焼土と炭化物の層がありその厚さは5~6cmと薄かった。その下部には粘性のつよい黄褐色土層が壁にむかって厚さ8cm程で立ち上っている。破壊されたカマドの底かとも思われる。しかし最後に床面を掘り下げたところ東壁中央の4cm下部から小型甕の一括出土があり本址が数次にわたって使われたことを伺わせる。遺物は焼土の南側に第39図24の土師、須恵器片などが出土し、それとともに最大長径50cmあまりの河原石をはじめとする礫が50個あまりあり、その中に第40図27に示した横瓶の破片が散乱していた。



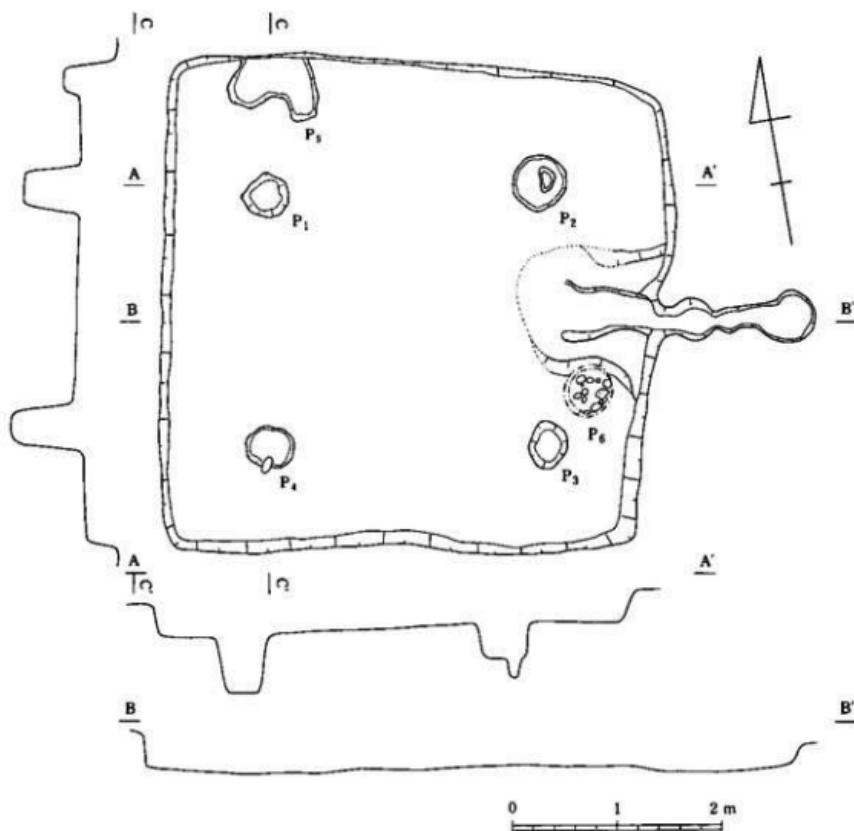
第6図 第1号住居址

これらのことから本址は小型甕の伴う平安中半以降としたいが、また覆土の礫中より出土した横瓶は明らかに奈良時代以前のものであり、層的には時代が逆転している。これについては、本址の廃絶後近くにあったであろう横瓶と甕を伴う前代の遺構を破壊して投入したのではないかと推定したい。

(神沢昌二郎)

2 第2号住居址（第7図）

第2号住居址は、H・I-8・9区に発見される。第1号住居址の南に隣接する場所であり、規模は東西約470cm、南北約480cmの方形の竪穴で、1号住居址より大型となる。壁高は検出面で南壁33cm、東壁35cm、北壁38cm、西壁35cmを記録し、総じて深い作りである。床面は平坦で堅



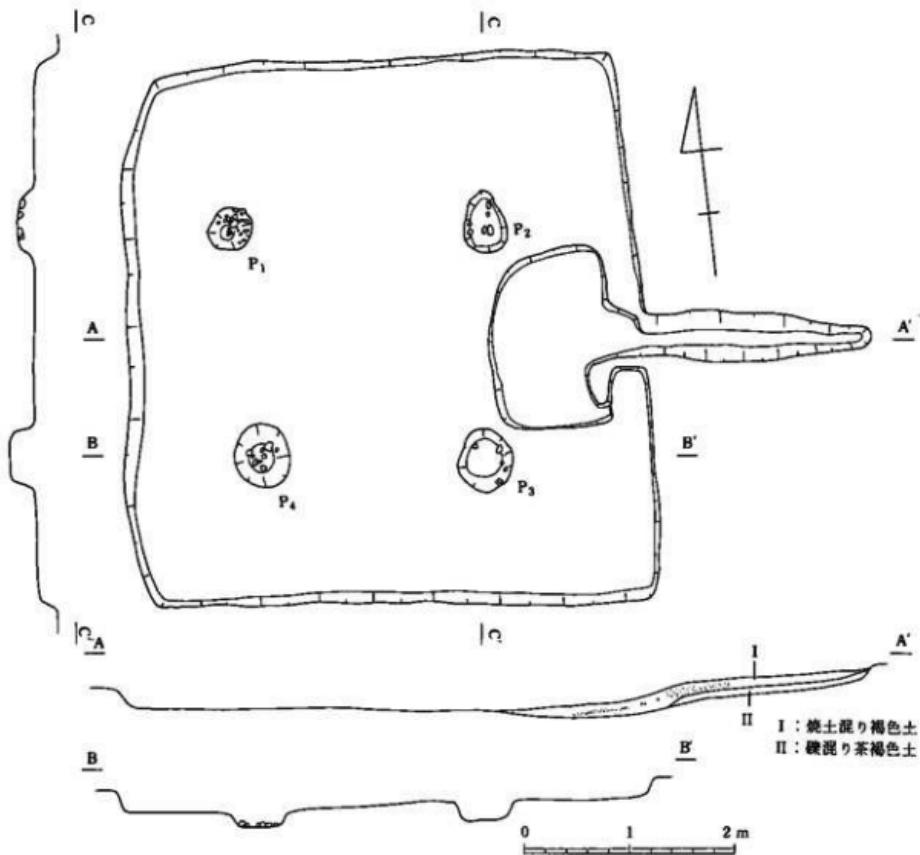
第7図 第2号住居址

繊な仕上げがなされており、西側の壁と床面の1部には礫層の堆積を掘り下げたために、礫まじりの部分が僅かにみられた。址内床面上に柱穴が4箇所に検出される。それぞれの規模は、P₁が43×46 cm、深さ55 cm。P₂が54×55 cm、深さは2段落しとなっており35~51 cm。P₃が46×38 cm、深さ55 cm。P₄が38×48 cm、深さ68 cmで、かなりどっしりした柱が建てられた感じである。又、柱穴の底部には、それぞれ礫数がみられ、木炭粉末が微量検出される。竈は東壁の中央部に煙道を東にとって構築されていた。粘土に微量の砂が混入された素材が使用されており、竈、煙道部共、石の併用は全く認められなかった。竈の内径は、ほぼ50 cm 円形、これを囲む竈の壁は約20~35 cm の厚さを示し、焚口は約50 cm 巾位であった。竈の中央部には、煮沸用の土器などをのせる支えの石が1個据えられていた。この支え石は、上面が10×15 cm 程の平面をもち、高さが約20 cm の角状を呈するもので、薪などを燃やすに支障のないように、打ちかきの加工がなされていた。竈の基部から煙道の出口までは、その全長が約270 cm で、適当な長さかと思われる。煙道の終端である煙出部分は、直径約50 cm の円形、深さ約20 cm 位の凹がつけられており、内部には焼土や煤などで変色した土が埋まっていた。又、煙道上の中間部に直径約25 cm、あるいは40 cm 円形の、煙出部と同じ様な落ち込みを認めたが、煙出部が再三にわたって移動したものなのか、判然とはしなかった。ただ煙道のたち割り調査の結果では、-20 cm の断面に第1回目の、-15 cm の断面に第2回目の煙道のはしりが認められ、煙道部の補修等がなされたことを物語っていた。竈内の支え石を中心として、その前面にかけ、個体のまとまった土師器が三個体分程発見される。これらの遺物は、竈内のたち割り調査で、微量の木炭化物を含む赤褐色の固い焼土に覆われていた。その焼土の厚さは約20 cm 程だった。発見された土器は、底部が木の葉底となる甕や、口縁と胴部の径がほぼ等しい長胴型丸底となる甕、あるいは口頸部が著しく屈曲する器形を示すものがあり、奈良期相当の土器であろうことが推察される。又、床面上の遺物も土師器が多く、須恵器片は2片認められたが、その中のひとつは杯の身の部分、他は杯蓋の部分で、他住居址に比して古さを感じさせた。竈の前面には、2ヶ所に焼土の分布堆積を認めたが、その1つは床面上に約40 cm 円形で、2 cm の堆積を示し、他の1つは床面上6 cm 浮上して、33×70 cm の分布で2 cm 程の堆積を示していた。又、P₆は竈の右横に接しており、上面径が約40 cm 前後、下面径が約50 cm 前後、深さは50~55 cm の袋状の貯蔵穴が発見された。このピットの底部には、こぶし大の礫が敷きつめられており、しかも礫の間隙には、小石の目詰めがなされていて、入念な仕上げとなっていた。内部には炭化物の粉末が微量発見された程度であったが、厨房施設としての機能を果したものと思われる。P₅は北西部の隅に近く発見される。規模は82×44~63 cm、深さ約15 cm の不整形のピットであった。遺物の出土はみられなかった。

(大久保知巳)

3 第3号住居址（第8図）

第3号住居址は、K・L-8・9区に発見される。規模は東西約510cm、南北520cmの方形プランの竪穴である。壁高は検出面で20~26cmの中位を示しており、柱穴は址内に4箇所検出される。それぞれの大きさは、P₁が40×45cm、深さ15cm、P₂が40×60cm、深さ15cm、P₃が60×55cm、深さ23cm、P₄が60×55cm、深さ15cmでいずれも浅く、底部にはそれぞれ礫がみられた。床面は小礫上に、うすい粘土のはり床により平坦につくられており、その様相は1号住居址によく似ていた。竈は東壁の中央部に、煙道部を東に向けてつくられていた。2号住居址と同様、煙道部共に粘土による構築である。竈より現存で確認できた煙道部の端までは、約3mと長いつくりであった。竈を中心にして、址内に約170cm半円状に焼土の分布が認められ、その堆積は中心部で約15cmで



第8図 第3号住居址

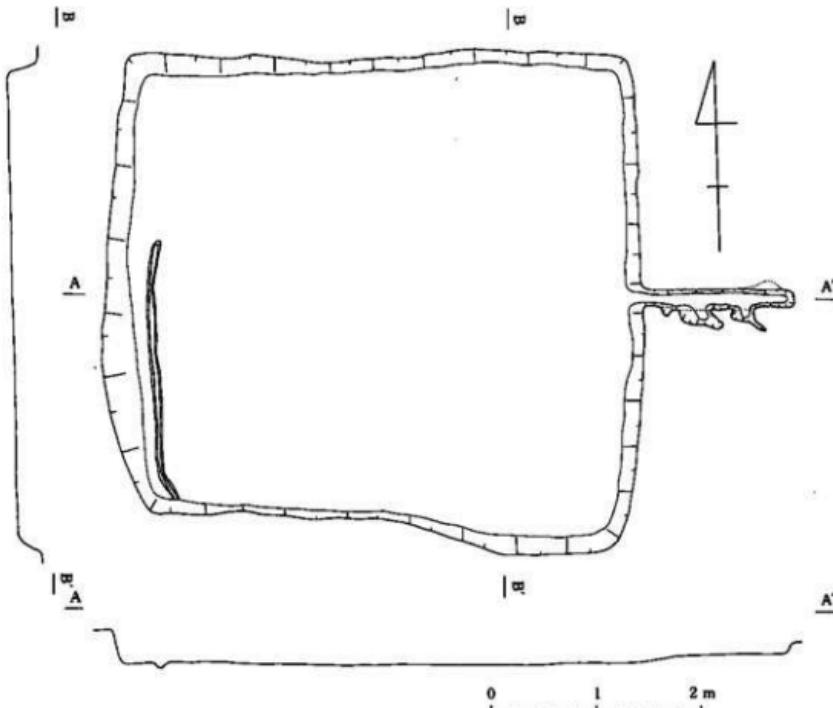
あった。竈の焼土内より土師器の杯の破片が3片程出土した。床面上約20cmまでの覆土中から発見された、主となる遺物としては、土師器、須恵器各破片と刀子と思われる鉄製品2本。それに縄文土器片微量、縄文中期の土偶1個、黒曜石フレイク等が検出される。これらは小砾まじりの覆土中からの出土で、他からの流れ込みを感じさせる。灰釉陶器を伴わず、土師器、須恵器主体の遺物、竈や煙道部の構築位置、素材等から、年代的には、2号住居址とはほぼ同年代に位置づけられよう。

(大久保知巳)

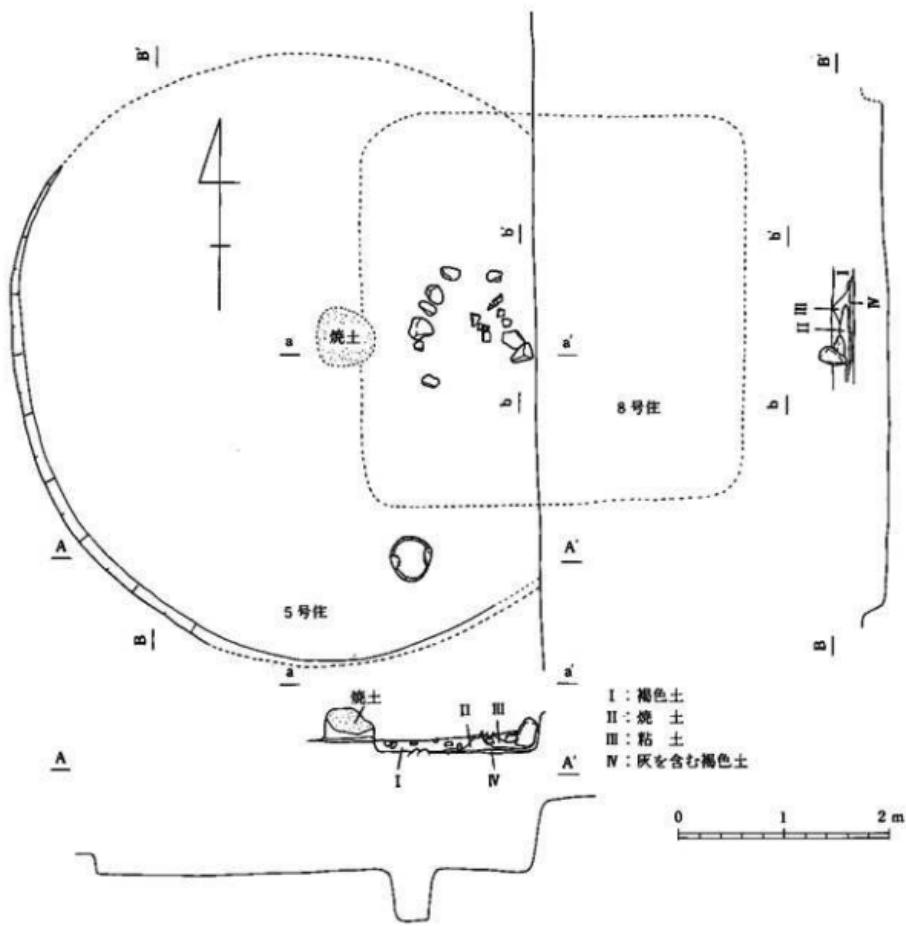
4 第4号住居址（第9図）

本址は第2号住居址に接して南東にありプランは東西5.2m、南北4.8mの四角形で、東壁中央に巾20cm、長さ1.5mあまりの煙道をもつものである。西壁にそって南半分に巾15cm、長さ2.5m、深さ6cmあまりの浅い溝が走る。壁高は西が40cm、東は20cm程で床面は部分的にはしっかりしていたが、西側がはっきりしなかった。柱穴はなく、覆土中では大砾が並んで倒れた状態にあり、48×150cmの範囲に焼土が見られたがこれはカマドの壊れたものではないかと推定する。煙道は何層にもなって赤褐色に焼けており長期にわたって使用されたことを伺わせる。

(神沢昌二郎)



第9図 第4号住居址

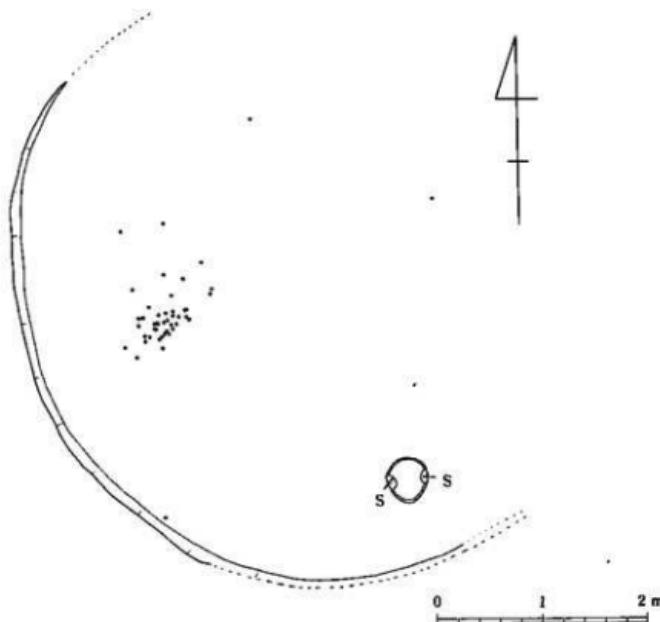


第10図 第5・8号住居址

5 第5号住居址（第10・11図）

第5号住居址はA地区の東端N-5を中心とした推定直径4.8mあまりの円形を呈するもので、東側は水田により削られて無い。本址南側で床面、壁が検出されたが全体でみれば1/4程度でしかない。検出部分の壁はしっかりとしており高さ15cmあまりであった。柱穴と思われるものはやや東南寄りに15cm大の礫をもつ40×45、-40cmあまりのものが1ヶあり、その中には縄文中期土器片が少量含まれていた。覆土には中央西寄りに黒曜石の集中出土がみられ、その数は49片あり、大きさは3cm内外である。この黒曜石集中出土の西南の壁の内側に大小の礫があった。北東部では床面がはっきりせず床面とほぼ同レベルに礫が散乱し、その中に石皿・打製石斧・磨石などが含まれていた。更に礫群よりやや高く別記の第8号住居址の土師長胴甕頸部と焼土があり、本址は第8号住居址により破壊されていることを伺わせる。

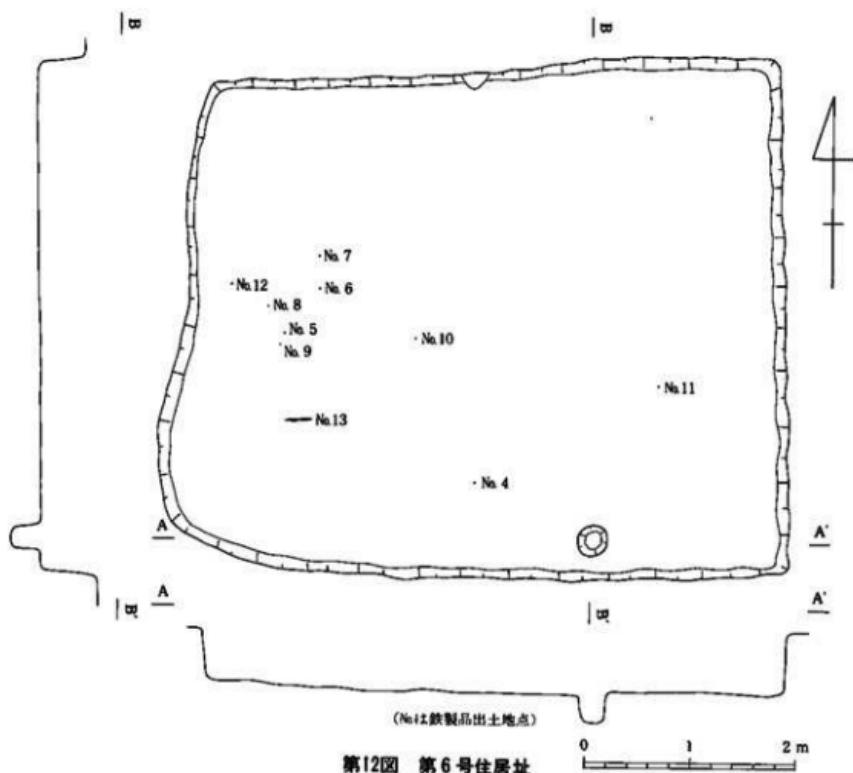
（神沢昌二郎）



第11図 第5号住居址覆土内黒曜石出土分布図

6 第6号住居址（第12図）

第6号住居址はA地区の北側のL-2を中心に東西6m、南北5mのほぼ長方形を呈するもので、西壁がやや弯曲するほかは直線的である。本址の床面は地表下約120cmと深く、床面は北西側の1/4あまりが歎かいほかはしっかりとした床であり、僅かに西側が低い。壁高も東壁が55cm、西壁が50cmあまりである。ピットは南東寄りに直径30cm、深さ30cmのものが1ヶあるのみである。本址床面より60cm上部では東壁寄り中央に長径20~50cm大の礫が散乱し、石組みのカマドが破壊されたものではないかと推定される。この礫を中心として直径1.5mあまりの円形状に厚く焼土と炭化物があり、その間に鉄釜（第41図50）や内黒土師坏、土師甕、須恵器坏片等があり、この面も生活面ではないかと思われる。本址床面より2~7cmあまり浮き上って長さ4~5cm内外の筒形の鉄製品（第48図1~11）があり、これが後述のように製作途中のものであったとすれば本址が鍛造に関わる遺跡とも考えられるが、施設・道具等の検出がなく断定は下せない。（神沢昌二郎）



7 第7号住居址（第13図）

この住居址は、G・H-12区に発見される。明確につかみ得たのは、石組の竈と煙道部分のみであった。南側に竈をおき、北に向けて煙道部をつけたもので、これらの施設が、方形をとるだろうと思われる住居址の、北壁に設けられていた。竈の基部より煙道部の端までの全長は約125cmであり、竈的最大巾は85cm、煙道部の横巾はほぼ45cmであった。多分、石組を主体に一部粘土併用による構築かと思われる。使用された現存の石は33個を数え、人頭大から $49 \times 25 \times 6$ cm程度の、かなり重量感のある石が使用されていた。これらの中、3分の1の11個が割石であった。この竈・煙道部分とその周辺からは、土師器の縦方向のカキ目痕をのこす甕類、糸切平底や、糸切後のつけ高台、内黒となるもの、ならないもの等の壊類、須恵器の壊や甕の大型破片などが出土し、又、木炭の粉沫などが目立って多くみられた。この住居址は河床疊上に構築されており、しかも後に土砂の流入を受けて攪乱埋没したため、周壁、床面、柱穴等を明瞭につかむことが不可能の状態であった。然し推定される住居址の周囲を囲繞するかの様に、1~2 m巾位に、こぶし大の礫を集めたらしい跡もうかがわれたが、住居を水害から守る、土居の様な施設があったのかも知れない。前記出土遺物、遺構等から、年代的には第6号住居址と、ほぼ同年代に位置するものと思われる。又、推定址内の覆土中より、縄文中期土器のかなり個体のまとまったものや、打製石斧、それに凹石が4個出土したり、同一個体の土偶が3片に割れて検出される。これらは、後世における人為的な廃棄によるものか、洪水流入等によるものなのか、明確にはしえなかつた。

（大久保知巳）



第13図 第7号住居址

8 第8号住居址（第10図）

第5号住居址を切って作られたもので、本址も第5号住居址と同様に東側は水田により削られていて不明である。しかし土手の断面には明らかに落込みがあり、その北壁は判然としているが南壁は不明である。地形は東北に低く、東側の水田は本址のある水田面より1.3m低く、耕作土下の第2層が南へゆくほど浅くなっているのでそのため南壁が不明なのかとも思われる。第5号住居址の項で述べたように本址の遺物は礫や縄文時代の石器より僅か3～5cm程高い位置に土師長胴甕上部があり、そのまわりには30～40cm大の礫があるので、これがカマドの破壊されたものではないかと思われ、その西側1mあまりのところにある粘土質の焼土はカマドの残部あるいは煙道部分ではないかとも推定される。

（神沢昌二郎）

9 墓址（第14図）

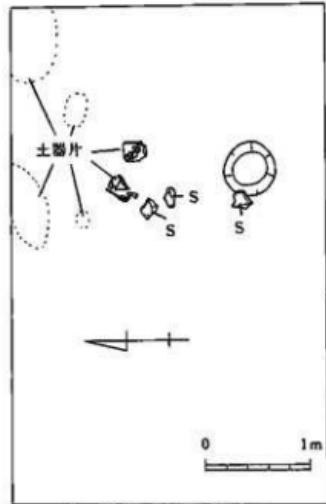
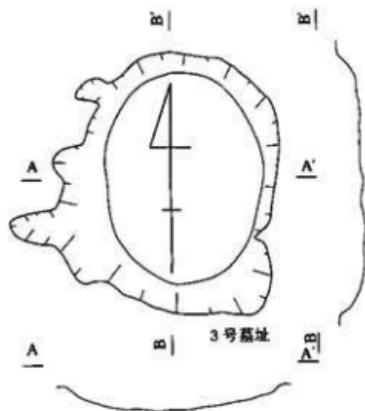
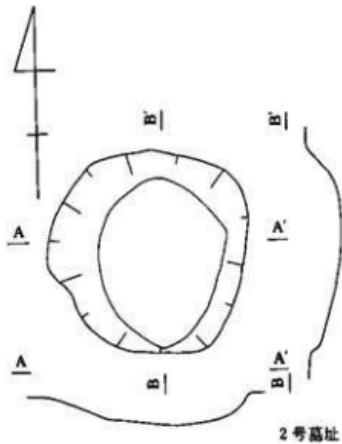
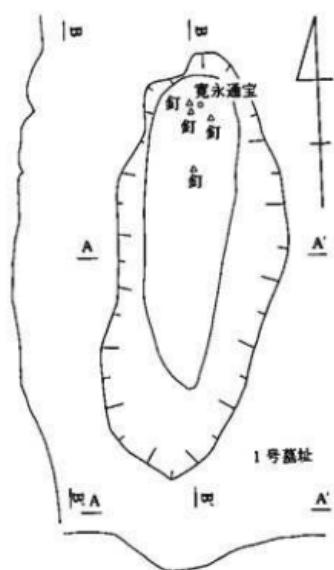
A地区に3基あり第1号墓址より順にC-9、C-3、M-3に所在する。それはあたかも四角形の3つの角にあたり、南東角が欠ける。第1号墓址と第2号墓址との間隔は24m、第2号墓址と第3号墓址との間隔は42mあまりである。

第1号墓址は主軸をほぼ真北にする長径2m、巾80cm、深さ15cmの浅い長梢円状を呈し、底は舟底形の落ち込みで南側が深い。その内部には焼土と炭化物が厚く堆積し、骨片と北枕の頭部辺と思われる辺よりより鋳造して間もないと思われる寛永通宝2枚が重ねられた状態で検出され、更に近くから角釘3本も発見された。これは棺桶の釘であろう。落ち込みの状態からして多分寝棺におさめられた後現場で火葬に付されたものと考えられる。

第2号墓址内も主軸を北にする直径95cmのほぼ円形で舟底形に窪む最も深い位置が-15cmである。やはり木炭化物と焼土に混って火焼骨や歯根が発見される。骨は総じて太くベッコウの櫛の焙解したものも検出される。この墓の場合は座棺を現場で火葬にしたものと思われる。

第3号墓址は1.2m×1mあまりの不整形で主軸を北にとっている。青灰色土中に黒味がかった土が入っており、その厚さは15cmあまりである。落ち込み内には小さい炭化物片と、僅かではあるが骨片が混っている。落ち込み底部はほとんど鍋底状である。

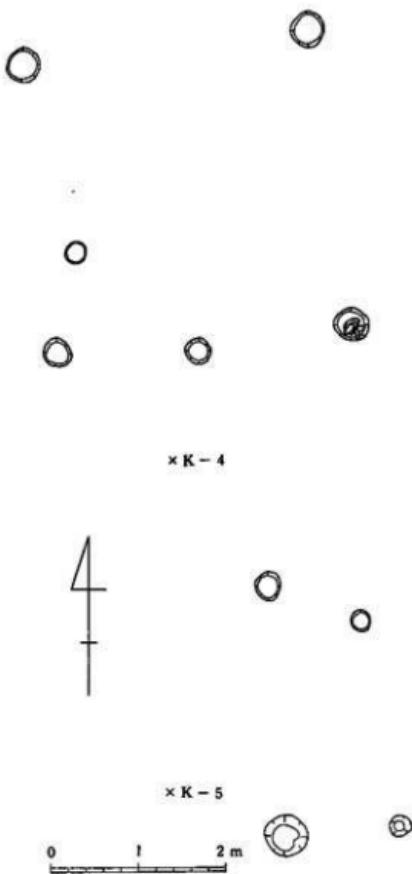
（大久保知巳）



第14図 墓 址 (1:30)

第15図 繩文後期初頭土器出土状況図

10 その他の遺構（第15・16図）



第16図 K～M-3～5 グリット周辺ピット

(1) D～F-12・13周辺部 A地区南部は浅く耕土下10cmあまりで一面に礫と小砂利があり、それらの間に土師、須恵、灰釉陶器片が点在し、また縄文中期土器片もかなりまとまって出土した。しかしこれらの遺物がどのような遺構に伴うのか、遺構については確定できなかった。それは河川の氾濫をうけて礫が入りこみ、土層が擾乱されていたためである。しかし縄文土器については大型破片や一括土器片のあることから、本地点に縄文時代の生活面のあったことは確実であろう。

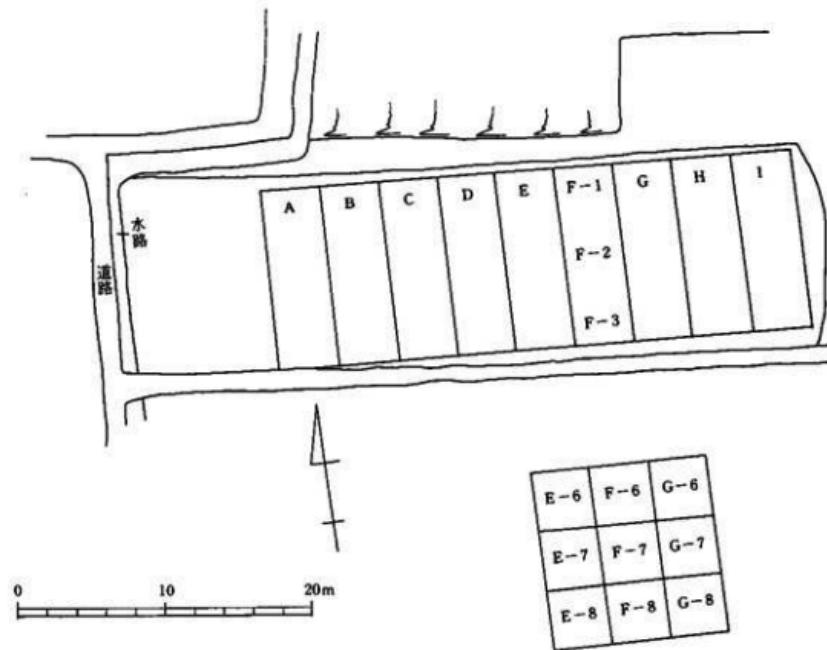
(2) I-2周辺部 A地区北辺で耕作土下80cmの深さに単独に縄文後期初頭の完形土器2個体が横たわって検出され、他に同時期の一括破片があった。本地点は、耕土下にあったので、それ以上の拡張調査は行えなかつたために遺構の確認はできなかった。ただ完形土器のあり様から土器検出面を本址の生活面と考えたいが、床面とするには土層の変化もとらえられず、心残りのする地点であった。

(3) A・B-5周辺部 耕作土除土後-10cmあまりより鉄分の固着した砂利層があり、ここより縄文中期から後期にわたる土器片の検出をみた。礫の多少や落ち込みの有無などにより、住居址の存在も考えたが確定するに至らなかった。遺物は石剣にも似た大型の石匙、磨石などの検出をみている。

(4) K～M-3～5周辺部 第6号住居址の南側に直径30cm内外のピットが10本検出された。覆土には少量ではあるが土師、須恵、

灰釉陶器片があり、本ピットもこの時期に伴うものと思われる。ピット内には礫の入っているものもあり、その位置が浅く - 8 cm 内外にあるので必ずしも根石とは言い得ないが、遺構としての性格付けを考えた場合には建物址としてみてみたい。なお南側ピット内よりは第43図18の有孔垂飾片が出土しているが、これは明らかに縄文期のものであり周辺に縄文土器片の出土もみているのでまぎれこんだものと思われる。

(5) A 地区 I-10 落ち込み 第4号住居址南西に長径 3 m、短径 2 m、深さ 20cm の落ち込みがあり、これが住居址との関係を追求したが解明できるものはなかった。覆土には土師器及び須恵器片等が散見しているので、隣接する第4号住居址と同時期のものと思われる。 (神沢昌二郎)



第17図 B地区グリッド設定図

第3節 B・C地区

1 B地区（第17図、第36図225～239）

遺構 B地区は今回発掘の中心ともなったA地区の西側10mの畑と水田で、東西の道路をはさんで北側にA-I-1～3、南側にE-G-6～8の計36グリットをあけた。しかし北側は遺物の出土が陶器片1片のみであり、礫層になったため、ブルドーザーの除土のみで終らせ、南側の9グリットを掘った。

しかし遺構はなく、中央F-7の地表下-65cm余りで数片の縄文中期土器の出土をみ、F-8の-80～95cm余りでも同様の土器片を検出したにとどまった。この地点の東側は耕土が浅く中礫の層がありF-8では-80cmあまりで砂層となり、明らかに河川の中であることを示している。

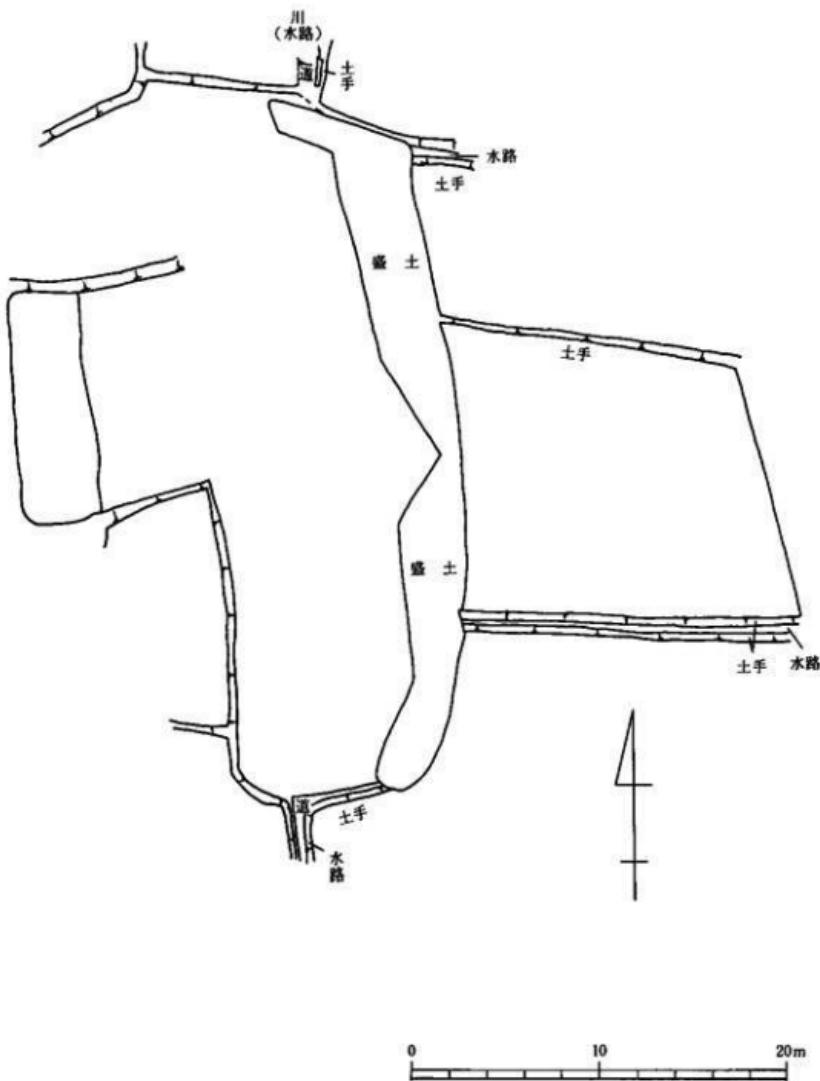
遺物 すべて縄文時代中期後葉の後半から終末にかけてのものである。唐草文の退化したものやワラビ手状の懸垂の間に、雑な沈線や縄文が施されるものが多い。235は沈線のかわりに櫛齒状工具による条線が用いられている。236・237は地文が無節の縄文と思われるが、他とやや趣が異なり注意を要する。

2 C地区（第18図、第37図240）

遺構 A地区より北へ600mの中二子地蔵の水路西側の微高地を掘った。ブルドーザーで除土したが、耕作土は20～40cmと浅く、特に褐鉄鉱を帯びた褐色の礫層であった。遺構は何もなく、僅かに須恵器片1と土師小破片1を検出したにすぎない。このため、ブルドーザーで除土したのみで終りとした。

遺物 第37図240は須恵器の壺の腹部破片である。外器面に平行タタキ目をもち、色調は赤灰色に焼き上がっている。

（神沢昌二郎）



第18図 C地区全体図

第4章 遺 物

第1節 遺物出土状況

今回の調査ではA地区全体に縄文土器、土師器、須恵器等の遺物の出土を見た。調査地区の中心は奈良時代から平安時代の住居址であり、出土遺物の内容も多量のものは縄文土器であるが遺構については5号住居址のみであった。他のほとんどが遺構を確認できず遺物の出土だけを見た。このため遺物の出土分布を調べることによりなんとか遺構の手がかりになりはしないかと考えたのである。図示した分布図は縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶磁器の5種でこの内土師器については内面黒色処理したものと、そうでないものとに分けた。基準は数量によった場合は、細片のみでも多数ならば多量に出土したものと誤認しやすいため出土重量によりスクリーントーンの濃淡で図示した。縄文は①1~200g、②201~500g、③501~1000g、④1001~2000g、⑤2001g以上の5段階で土師、須恵は①1~50g、②51~100g、③101~200g、④201g以上の4段階、灰釉、中世陶磁器については①1~20g、②21~40g、③41~60g、④61g以上の4段階で表示した。ここで扱った出土遺物はグリット内出土として取上げた遺物のみで、住居址等遺構出土でとらえられた遺物については第1表で詳記した。以下は出土分布の傾向と遺構の関係について述べてみたい。

1. 縄文土器の出土状況(19図)(1・2表)

出土遺物中もっとも多量で、出土グリットは合計で73あり①は33、②は16、③は6、④は5、⑤は13グリットである。分布はほぼ全体にわたっているが、集中部は3ヶ所ぐらいに把握される。まず北側のI-2と東側のK-6・7、L-5、M-9それに南側でD-G-12~14付近である。特に南側は多く集中している。この他にA-5、F-3、からも多量に出土した。

2. 須恵器の出土状況(20図)(1・2表)

出土グリットは合計で46あり、①は20、②は8、③は11、④は7グリットである。縄文にくらべると分布の範囲が小さくなっているが集中部は3ヶ所確認できる。北東側のJ-M-4~6と中央部から南側のG-12、13、H-8~13、I-7~10、J-10~11それに南側のD-14~15付近である。特に北東側に多い。

3. 土師器の出土状況(21・22図)(1・2表)

土師器は内面黒色処理されたものとされていないものとにわけた。全体としては処理されていないものの方が多い49グリットより出土した。①は29、②は4、③は6、④は10である。出土の傾向は、ほとんど須恵器と類似しており3ヶ所に集中部が把握できる。北東側のI-M-3~6を中心とした部分、中央部のH-I-6~10付近、それに南側のD-F-11~15付近である。特に中央部

は集中している。内面黒色処理されているものについても分布の傾向は同じであるが希薄である。出土グリットは35で①は28、②は5、③は3、④は1であり北東側、中央部、南側の3ヶ所に集中部が見られる。特に中央部から南側にかけては多く出土している。

4. 灰釉陶器及び中世陶磁器の出土状況（23・24図）（1・2表）

灰釉は数量、重量ともに多くなく分布もまばらである。出土グリットは17で①は10、②は2、③は4、④は1である。K～M-3～5付近に集中部がある。他はD-14が量的に多く出土している。中世陶磁器を出土したグリットは合計10で、①は6、②は1、③は2、④は1である。分布はまばらで集中部はJ-6・7である。

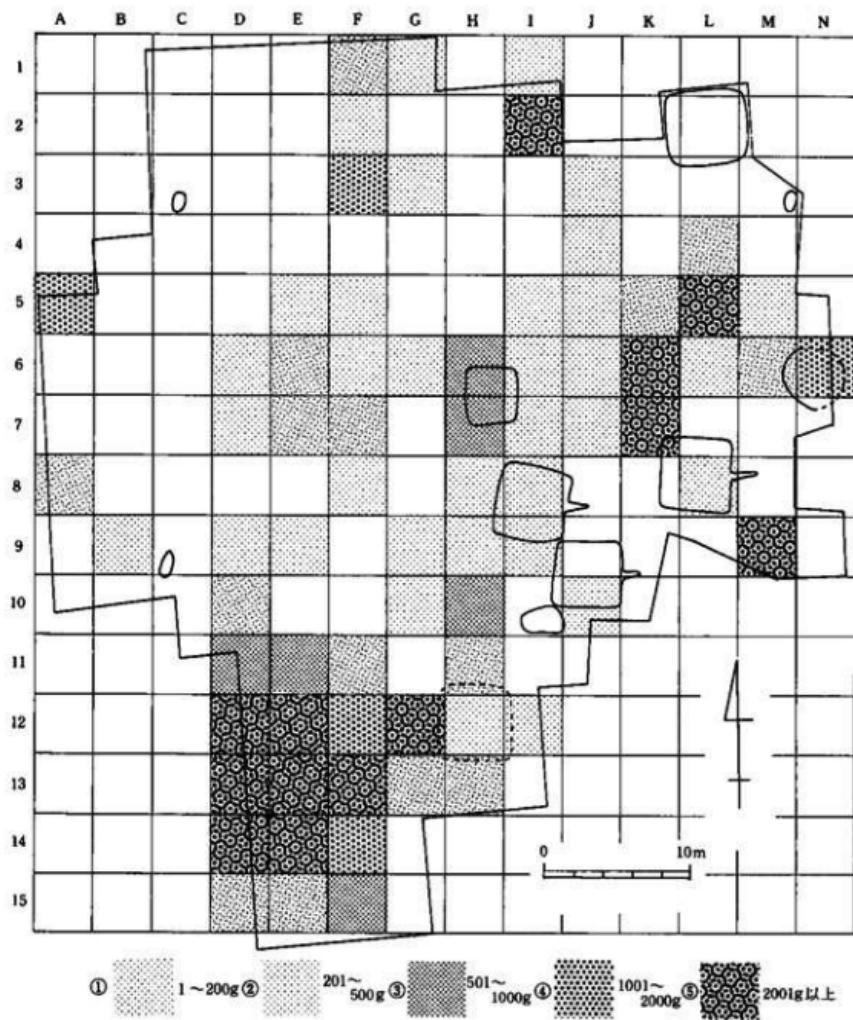
5. 分布の傾向と遺構の関係

縄文についてはI-2は耕作土下80cmで、2個体の土器を出土した。拡張して精査することができなかつたため遺構の確認はできなかつたが遺物出土量、状態からみてなんらかの遺構があるものと思われる。出土遺物は後期初頭と思われる。K-6・7、L-5、M-9は近くに5号住がある。5号住も8号住と切合っていたり調査区域外にかかっているためプランは明確に確認できなかつた。M-9に出土量が多いことも考えると区域外に住居址等遺構の存在をうかがわせる。出土遺物は5号住と同じく中期後半以降と思われる。D-G-12～15を中心とした南側はA地区内で最も多量に出土したが河川の氾濫による疊層内であるため遺構は確認されなかつた。出土した遺物は中期後半前と思われる。

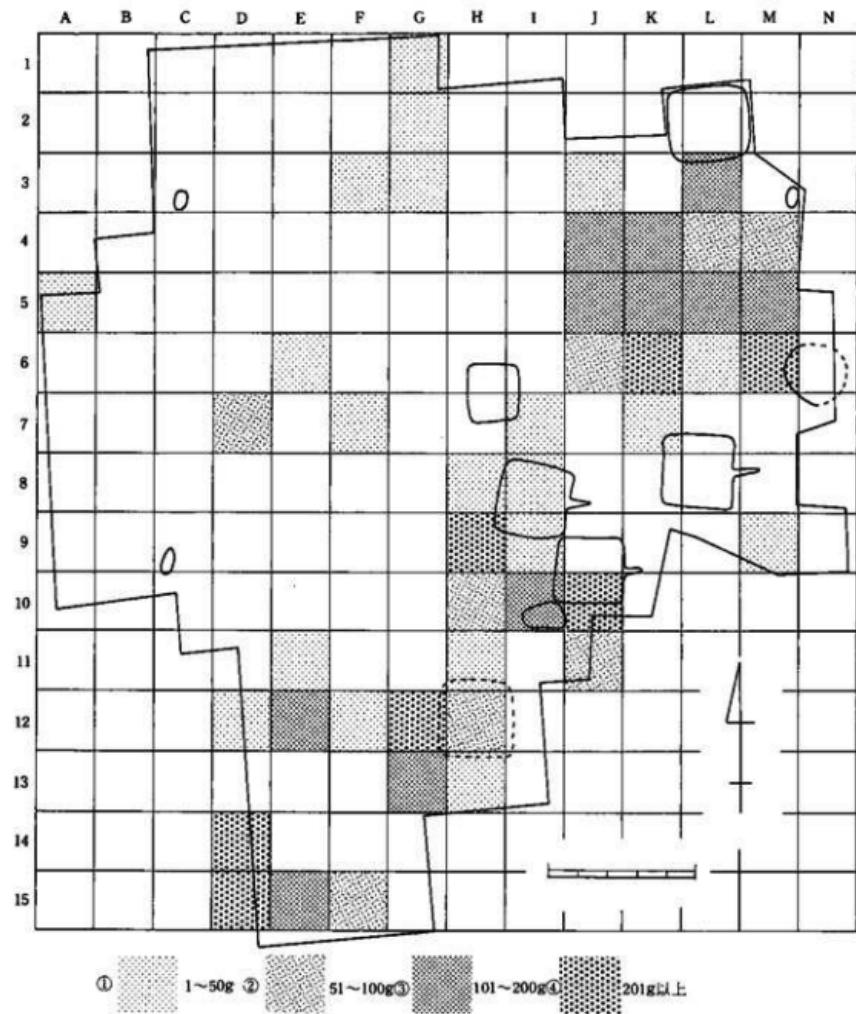
須恵器、土師器、灰釉陶器については、分布の濃淡はあるがほぼ同じ傾向を示した。J～M-4～6を中心とした北東側は、付近に6号住とL-5を中心に柱穴が確認され建物址であったと思われる。またC-2に分布の表示がないのは、かなり上面から住居址として確認されたため出土遺物は6号住出土として取上げられたためである。G-12・13、H-8～13、I-7～10、J-10・11の範囲は、2・4・7号住を覆っている。特に内面黒色処理をされていない土師器については住居址にかかるグリット内で多量の出土が目だつ。南側のD～F-14・15付近は疊層内であるためと調査区域外にかかる部分が多いため遺構の把握はできなかつたが付近には遺構の存在を思わせる。

中世陶磁器については、出土量が少なく分布も希薄のため遺構が存在するとは思われず、他からの混入であろう。

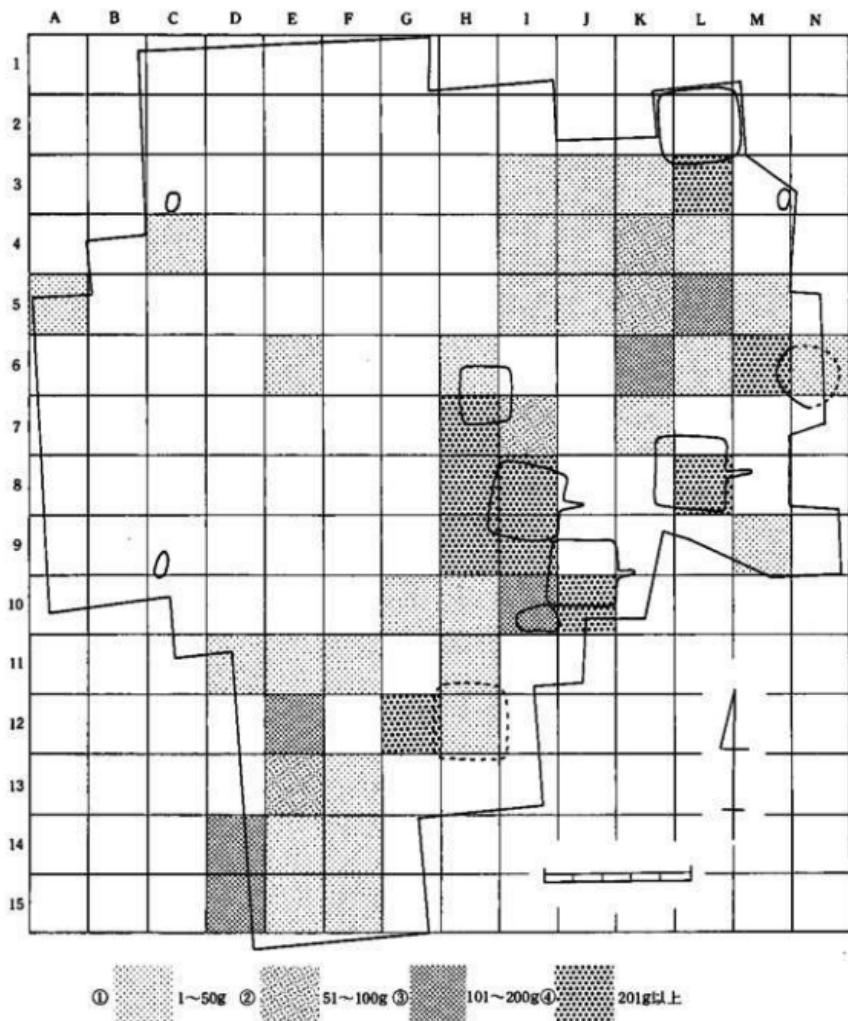
(熊谷康治)



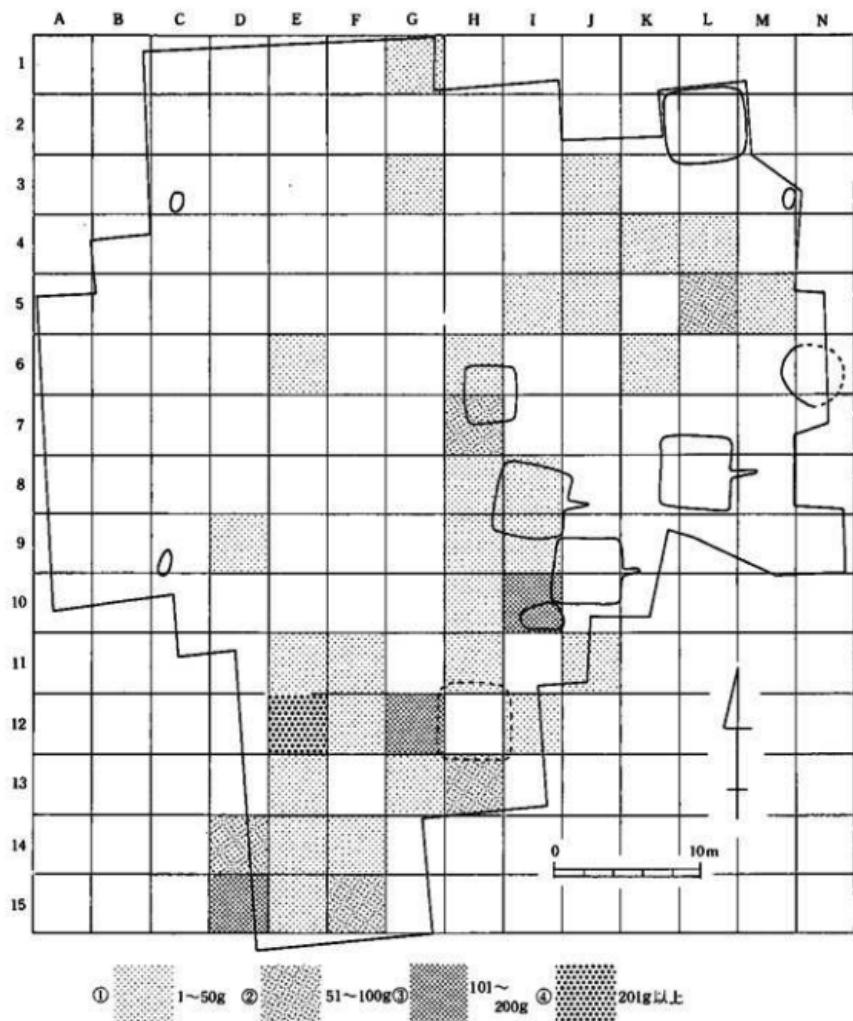
第19図 A地区縄文土器出土分布図



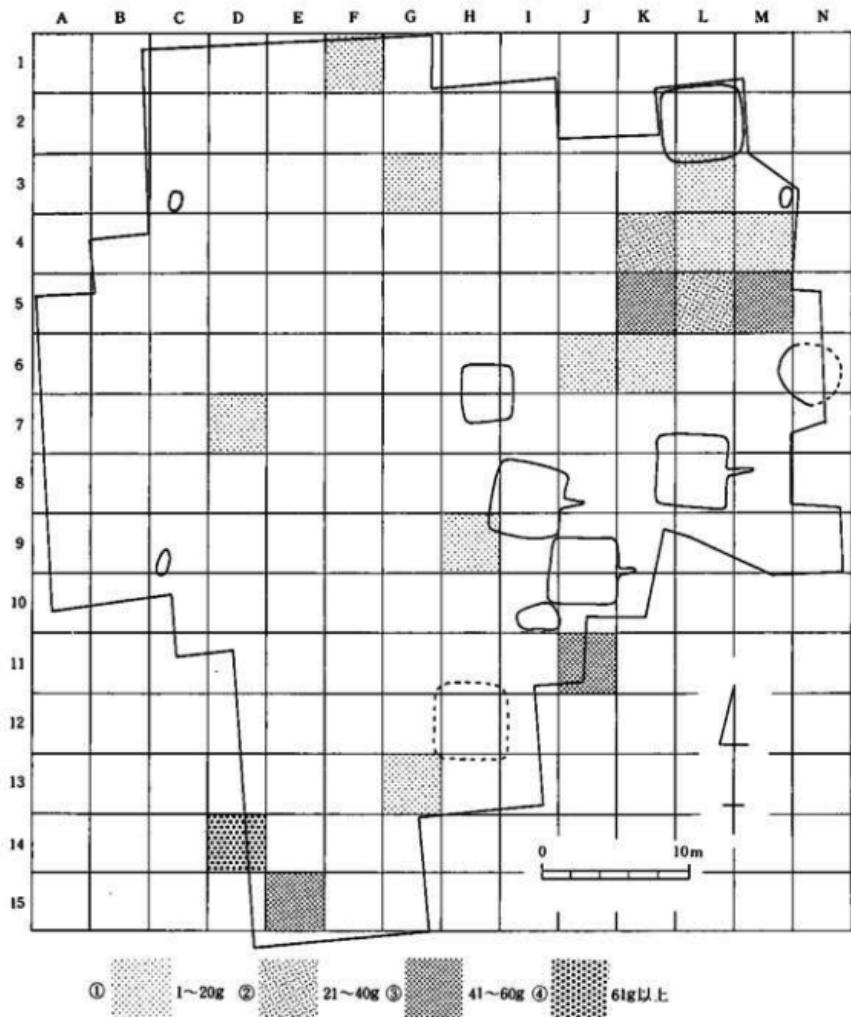
第20図 A地区須恵器出土分布図



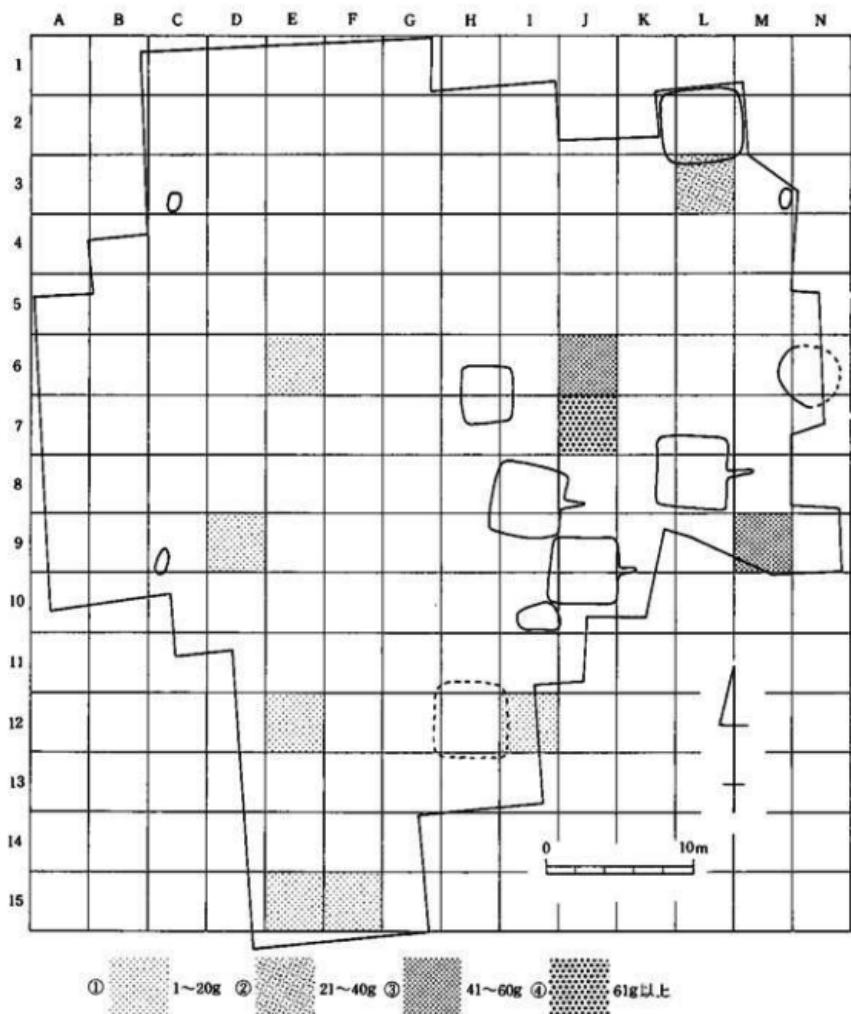
第21図 A地区土器器出土分布図



第22図 A地区土師器(内面黒色処理)出土分布図



第23図 A地区灰軸陶器出土分布図



第24図 A地区中世陶磁器出土分布図

第2節 土器・土製品

1 遺構出土の土器

1) 第1号住居址出土の土器（第39図8～26、第40図27）

種別で縄文土器、土師器、須恵器がある。縄文土器は本址に伴うものではなく、また、すべて小破片で図示し得なかった。土師器、須恵器の器種としては、壺・壇・甕・小形甕・壺・蓋・横瓶がある。図化提示したものは8～27の20点、内訳は土師器無台壺（8～15）、同有台壺（17～19・21・22）、同有台甕（20）、同小形甕（24・25）、須恵器無台壺（16）、同壺（23：長頸壺になると思われる）、同横瓶（27）、灰釉陶器壠（26）である。土師器の塊類はすべてロクロにより成形されたとみられ底面には回転糸切りによる切り離し痕をこしている。また内面にヘラミガキ、黒色処理を施されたものが多い。11の外面には、墨書きがある。須恵器の壺は同期の土師器無台壺を模した器形をとるものである。灰釉陶器の壠は高台の高い新しい時期のものであろう。横瓶は口頭部を欠いているが他の部分の形状がよくわかる一括品で、成形時の稜や平行タタキ目、両端部の円板状粘土板貼りつけ痕が明瞭に観察できる。ただし、本址の土器群に伴出するものとは今のところ考えられず、遺構の項で述べた様に解釈し理解している。出土土器からみた本址の時期は多少疑義も残るが平安時代中葉後半から後葉の頃に位置づけられると思われる。

2) 第2号住居址出土の土器（第38図1～7）

縄文土器、土師器、須恵器があるが、縄文土器は混入と思われる。器種としては土師器に壺・甕・小形甕、須恵器に壺・甕・蓋等がみられる。図化提示したものは1～7の7点、内訳は須恵器蓋（1）、無台壺（2）、土師器甕（3～7）である。蓋は頂部を欠くが、天井部が丸味をもって屈曲度の弱い、端部に至る器形をとる。壺はやや深めで、底面が手持ちヘラケズリを施され、体部と底面の境界が明瞭な稜をなさない。土師器の甕は長胴形になるもの（3・4・6・7）と口縁に向って大きく開く器形をとる丈の低いもの（5）の2種類がある。長胴形のものは6が外器面が継ぎのハケメ調整されて器壁が薄くなっている他は、概して厚手でナデ等の調整により成形時の凹凸が痕える。本址出土土器で特記すべきことは、カマド付近から一括出土した5～7の半完形の土師器甕でこれらは遺存状態も良く、本址の時期をほぼ決定するものであろう。厚手の7は古墳時代後半の長胴甕の影響がみられ、また縄のハケメをもつ6は平安時代に定形化するタイプの長胴甕の先駆的なものと考えており、この点から8世紀の年代を与えた方がいいかがであろうか。

3) 第3号住居址出土の土器

縄文土器、土師器、須恵器が出土している。量的にみると縄文土器が土師器、須恵器を凌駕するが、住居址プラン等からみると本址は明らかに歴史時代の遺構である。土師器、須恵器はすべて小破片で図化提示できるものはなかったが、器種としては壺・壺・甕・小型甕等がみられる。出土土器の時期については、最も多量に出土した土師器甕片から観察できる成形・調整痕が、第2号住居址出土の厚手の甕のものに類似する点から推測して、第2号住居址出土の土器群に併行するものと考えられる。

4) 第4号住居址出土の土器(第40図28~30)

縄文土器、土師器、須恵器が出土しているが量は概して少ない。歴史時代の遺構なので縄文土器は混入品である。器種としては、土師器は甕・小型甕・須恵器は無台壺・甕・壺がみられる。図化提示できたのは須恵器壺(28)、土師器小形甕(29)、土師器甕(30)の3点のみである。28はロクロ成形され底面に回転糸切り痕をのこしており、同期の土師器無台壺に類似する器形をとる。29は胴部外面に横走するハケメ(カキ目)、底面に回転糸切り痕をもつ。30は口頸部を強くヨコナデされ、頸部以下は横位のヘラケズリが施されて、かなり薄い器厚となっている。出土土器よりみた本址の時期は平安時代中葉以降に求められよう。

5) 第5号住居址出土の土器(第26・27図1~36)

縄文土器のみが出土しているがすべて小破片で図化提示できるものはなかった。拓影により提示できた資料は36点にすぎない。器形は全形が推定できるものがないのでよくわからないが、ほとんどが深鉢形になると考えられ、僅かに31~33が浅鉢形を呈すかと思われる程度である。文様では退化した唐草文とその間を埋める粗雑な沈線(1~10)、櫛齒状施文具によると思われるまばらな条線(14~17)、磨消縄文(19~28)などがみられる。時期的にみると1~7の様な縄文中期後葉の後半に比定できるもの、14~17・19~22等、中期終末から後期初頭に位置づけられると考えられるもの、31~33の後期前葉に比定できるものがあり、かなり広範である。出土土器から本址の時期を推定すると、量的にも中期後葉後半の資料が最もまとまっており、この時期をもってあてたいが若干の疑義も残る。

6) 第6号住居址出土の土器(第41図38~50)

縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。縄文土器は小破片がかなり多量に出土しているが、覆土への混入品であろう。器種として土師器では有台・無台の壺、甕、小型甕、飼釜、皿、須恵器では有台・無台の壺、甕、壺、それに灰釉陶器の壺がある。土師器の壺類はすべてロクロ成形され底面に回転糸切り痕をもって、内面はヘラミガキされ黒色処理を施されるものがほとん

どである。須恵器の壺類は有台のものと、同期の土師器無台壺類に似るもの2種があり、後者の方がやや量が多い。図化提示できたものは38~50の13点で、内訳は土師器無台壺(38~41)、須恵器無台壺(42~45)、土師器有台皿(46)、小型壺(47~49)、鉢釜(50)である。41の外面、45の底面には墨書きがある。

7) 第7号住居址出土の土器（第40図31~37）

縄文土器、土師器、須恵器が出土しているがいずれも量は少ない。縄文土器は本址に直接伴うものではなく、覆土へ混入したものであろう。図化提示できたものは、土師器と須恵器が7点あるのみである。土師器の壺類には無台と有台のものがあり、いずれも内面がヘラミガキされ黒色処理を施されている。37はカマド付近から出土した長胴形の壺で、全形がわかる一括品である。胴部外面は4段に継位のハケメで調整し、口頸部内面にも同様な工具で横走するハケメ（カキ目）を刻む。当地方の平安時代所産の壺の代表的なものであろう。35は壺形を呈すと思われる須恵器であるが、底面に高台をもたず、回転糸切り痕を残している点は珍しい。これらの図化提示した土器群には、一括して平安時代中葉以降という所産時期が与えられよう。

8) 第8号住居址出土の土器（第42図51・52）

縄文土器、土師器、須恵器が出土しているが、不明瞭ながらも本址が縄文時代のものと推定される第5号住居址と重複関係にあったため、縄文土器は第5号住居址に属するものとして扱った。土師器、須恵器の量は少なく、図化提示できたものは2点のみである。51は土師器の壺で、カマドと思われる石組みの付近から一括出土した。胴下部をくぐり、口頸部がラッパ状に開き、最大径が胴部上半部にあるという特徴的な器形をとり、口縁部はヨコナデ、胴部は下方から上方へヘラケズリが施される。52は环形の須恵器と考えているが、それにしては口径がやや大きめで、或いは盤などになるのかもしれない。底面に回転ヘラケズリが観察できる。これらの土器の属する年代は資料が少なく決めかねるが、第2号住居址に近似する可能性を考えている。

2 遺構外出土の土器

1) A-5グリット出土の縄文土器（第28図37~51）

本グリットからはかなりの量の縄文土器が出土し、特に同一個体と思われる破片が多数一括出土した。その中から文様の比較的良くわかるものを選び拓影で提示した。37~43は同一個体と思われる一群で、復元図化できなかったが、胴部中位から上方へ大きく外反し口縁部に至って急激に内弯して僅かに肥厚する口縁に続く器形をもつと考えられる。文様は、口縁端部下10cmくらいの間に隆起線をめぐらし、他は無節斜縄文の地文の上に継位の沈線を描いている。口唇上面に沈線が1本まわっている。橙色を呈す焼成の良い土器であるが、あまり類例を知り得ない。44と50、47と51も

同一個体と思われる。

2) D~F-12~14グリット出土の縄文土器 (第28~35図52~207)

E-14グリットを中心に、その周辺から極めて多量の縄文土器が出土しており、半完形、大破片の一括品も數点ある。時期的にみると縄文中期中葉から後期初頭までのものがみられるが、中期後葉の前半期に比定できるものが大部分をしめる。

中期中葉に位置づけられるものは、57・58・108等をみている。57は深鉢の口縁部周辺でミミズク把手をもち、胴部に隆起線で三角形の区画をつくっているのがわかる。

中期後葉前半の土器は全形を知り得るのは復元図化できた3個体(137~139)のみであるが、各種の器形と文様が窺える。137は深鉢形の胴部上半で、頸部に横位の区画帯をもち、胴部は4単位でそれぞれ縦位に配した隆起線の文様の間を、半截竹管を丁寧に重ねた籠目状の文様で埋めている。胴部中位が「く」の字状に張り、欠損している口縁部は直線的に外開するものと思われる。138は頸部に隆起線を重ねた横位の文様帯をつくり、胴部は3単位で抽象文風の隆帯が配され、間隙は半截竹管による縦位の長い沈線で埋められる。器形は胴部がやや丸く張って頸部でくびれる形をとり、欠損する口縁部は大きく外開したのち内弯して口縁端部に至る形態の無文のものが推定される。139は器高50cmを超える大形品で、横位4単位の文様帯構成になっている。特に第2段目は範形の隆起線を4単位で配し、それらの間は半截竹管による縦沈線と、図化部分には表れなかったが同じく爪形の刺突で埋めている。薄黄橙色を呈す厚手で焼成の良い土器である。以上の他に同時期と思われる土器片の器形と文様で特徴的なものは、143~146・189の粘土組を貼りつけた口縁が大きく内弯する重弧文系の土器、137に似た籠目様の地文をもつ土器(60・61・64・129・141・176)、138の地文と同じ半截竹管の縦沈線をもつ土器(101、102)や単なる縦沈線をもつ土器等が挙げられ、更に109、122の様な文様もみられる。

中期末から後期初頭の時期に比定できると思われるものは、70~80・185・203・204等がある。特に73~80は同一の文様構成をもち一括してD-14グリットから出土している点は注目される。

3) L-5グリット出土の縄文土器 (第36図208~214)

多量の縄文土器が出土している。時期別にみると概ね縄文中期後葉後半から後期前半にわたるようである。208、209は中期末の時期の深鉢の口縁ぎわに上がる突起で、208は把手状になる。210は台付土器の底部と台部で、非常に粗い胎土をもっている。211は後期前半に比定できる浅鉢で、器面はよく研磨され、磨消縄文をもっている。

4) I-2 グリット出土の縄文土器（第36図215～224）

縄文時代中期末から後期にかけての土器が出土している。特に220、221は完形に近い形で一括して出土した。220は口径19.1cm、底径7.5cm、器高22.6cmを測る深鉢形で、口縁部に横方向の無節の縄文を施文し、胴部は同様の縄文を施したのち棒状工具により逆「J」字状のU字文を3単位で配している。221は口径16.0cm、底径7.6cm、器高18.4cmを測り、器面は著しく荒れて棒状工具によると思われる沈線が僅かに観察できるのみである。底部が著しく厚い。

3 土製品（第37図241・242）

今回の調査では土製品は、土偶が2点出土したにとどまった。241は第3号住居址掘り下げ中にその覆土から発見されたもので、胸部以上と両脚を欠損している。渦巻文を中心とした文様が沈線で描かれ、正面はヘソの部分が僅かに盛り上がり、背面は臀部を逆ハート形で表現している。胸部に2孔、脚部に1孔ずつ穿孔されている。242は3片に割れて、別々にG-12グリットから出土した。やはり渦巻文を中心にして沈線で文様を描いているが、241に比してやや出尻である。脚が極度に短く、足が扁平で大きく安定性がある形態となっている。两者とも、縄文中期後葉の時期に比定されるものであろう。

（直井雅尚）

第3節 石器・石製品（第43～47図、第4表）

石器は17種92点を数える（註1）。内容は、使用痕ある小形剝片類が25点と一番多く、次いで打製石斧22、横刃型石器13、凹石・すり石10、敲打器5、スクレイバー、石鎌各3、石匙、石錐、石核状石器（註2）、ピエス・エスキュー、大型石匙、磨製石斧、石皿が各1点で他に砥石が1点である。個々については一覧表を参照願い、ここでは石製品の2点について触れ、簡単なまとめを述べる事とする。

18は孔部分で欠した石製品である。矢印側から孔を穿った為、一方の口がすぼまっている。又、穿孔具の回転痕も明瞭に残っている。19は連続して周縁を敲き、石斧の片刃状を呈する如くに調整されたものである。他の石器には含めがたく、特になんらの痕跡も見当らず、一応石製品として扱った。

石質は、小形石器のうちスクレイバー（7）と5点の使用痕のあるものがチャート製で、他に9点の剝片をも含めて好んで青色系のチャートを用いているようである。ほかは黒曜石である。大形石器は粘板岩、砂岩、頁岩類でその80パーセントを占め、打製石斧の一部、磨製石斧、石皿にやや異質な石材が用いられている。又、出土した約50点の大形の剝片類をみると、薄手で横長のものがかなり多く、小形のフレークと同様に横刃型石器や刃器類の役割の一部を果たしているものもかなりあろうと考える。

全体的に出土した地点と、共伴した土器より見て、限られた時期の石器組成とは把え難いが、器種、量とも均等なバラつきで、縄文時代中期後葉、ないし、後期初頭としては平均的な様相を示すものと考える。又、特に5号住居址覆土中より集中出土の黒曜石について若干述べておく。

これらは計49点、総重量827.8gをはかる。このうち石器は1点（11）のみである。その大きさは1.6g以下の小片が11を含め3点あり、他はすべて親指頭大、5.5g以上で直径3cm大、34gを最大としている。本遺跡からの石器を含む他のすべての黒曜石が67点、166.6gという事を考えるとこれらの大きさと量が分かる。もうすこし見ると、これらのうち13点は表面が自然剝離による風化した白濁を全面に見せ、他のものにも細かなダメージを残しているものはあるが、剝片を取ったという痕跡は見当らない。しかし、17は何らかの石器を目的としたものであろうか。この1点だけは長軸の一方を尖鋭化させている。

（高桑 俊雄）

註1 図化していないuf19点を含める。

註2 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 講習 その3」昭和49年度による。

第4節 鉄器・鉄製品（第48図、第5表）

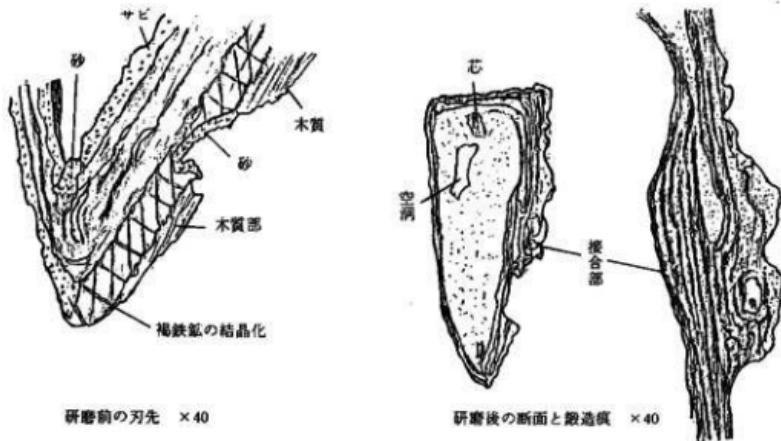
本址の出土の鉄器・鉄製品は14点あり、出土地点は第3号住居址2点、第6号住居址11点（L-3覆土出土の1点を含む）D-14出土1点である。その数値は5表にゆづるが、第6号住居址内出土の鉄製品は鋼片を筒状に丸めその中に芯鉄を入れている。これは後述のように鍛造による製品製作の一過程とみられ興味あるものである。他に刀子が2本出土しているが、第48図1の刀子は明らかに柄の木質部が残っており着柄された茎の様子を伺える良い例である。13は長さ25cmの棒状のものであり、紡錘車の軸ともみられるが、多數出土している芯鉄とも考え合わせ、芯鉄の長いものとみた。

（神沢昌二郎）

鉄製の遺物について

この鉄材は小型の利器を作るためのもので、幸い成品片が1点出土しているので、小鍛冶の利器を作る過程を知ることができこの地方としては大変参考になるものである。

第1に数回參炭鍛造してきた巾6cm、長さ6~7cm、厚さ3mm程の鋼片を丸めて径2cm程の円筒とする。第2にこの中に鍛造をしてない鉄（軟鉄？）を芯に入れる。以上の鉄材は他からもたらされたものか、現地で造られたものは不明ではあるが、この第1の鋼と第2の鉄とを組合せたものを一気に整形して利器とする。このようにして作った小型利器は実用利器であり、断面でみると第25図のように縫（す）が所々に見られ高級品とは言えない。しかし、參炭した鋼の部分が数層外側に見られ、実用の小型利器としては充分な働きを持っていたと推定される。先に角、この遺物により当地方の小型利器の製造行程を知ることができる点、貴重な遺物といえよう。（森義直）



第25図 鉄器詳細図 ×40

第5節 人骨

墓址は第1・2・3号と呼称される3箇所において確認された。第1号墓址は長径約180cm、幅径約70cmの長円形をなし、第2号墓址は径約90cmの円形、第3号墓址は一部が径約40cmと推測され、それぞれが下部のみを残す落ち込み状態で残存し、深さは各墓址ともほぼ共通で20~30cm程度であった。

人骨を含む墓址内部の状況も相似している。すなわち炭化材がブロック状となって部分的に集中し、全体に緻細な炭の散布がみられたが、特に墓址の形状に伴なう棺様の分布としては認められなかつた。これらの間に炭化したムシロ状のもの、陶器片、釘等の鉄製品、古錢などが検出された。またその周囲、底部には部分的に焼土の集塊や火熱を受けた小砾もみられた。第3号址のみは上部を既に大きく削除され、底辺のみが残存したものとみられ、炭化物や焼土も痕跡的であった。

人骨はこれら炭化物や焼土中に主として包埋されていた。いずれも極小の細片化したもので、すべてが白色を呈する火焼骨である。多くは1cm平方程度の剥離した緻密質部分で、細片ながら堅韌な骨質を有し、またすべての表面に細かな亀裂と、これに伴なう弯曲・変形を生じ、火焼骨通有の性状を示している。このため人骨本来の形質的な特徴の記述は全く不可能な状態であった。

第1号墓址出土の人骨がもっとも多量に遺存していた。頭骨の一部をなす板状の小片が3片、縦割された小管状骨がやや多く、他は肋骨の一部や不規則な形で残る細片のみであった。

第2号墓址のものは極めて少量で、ほとんどが微細な骨片として遺存する程度であった。ただし小白歯とみられる歯の歯根部分が1本のみ検出されている。

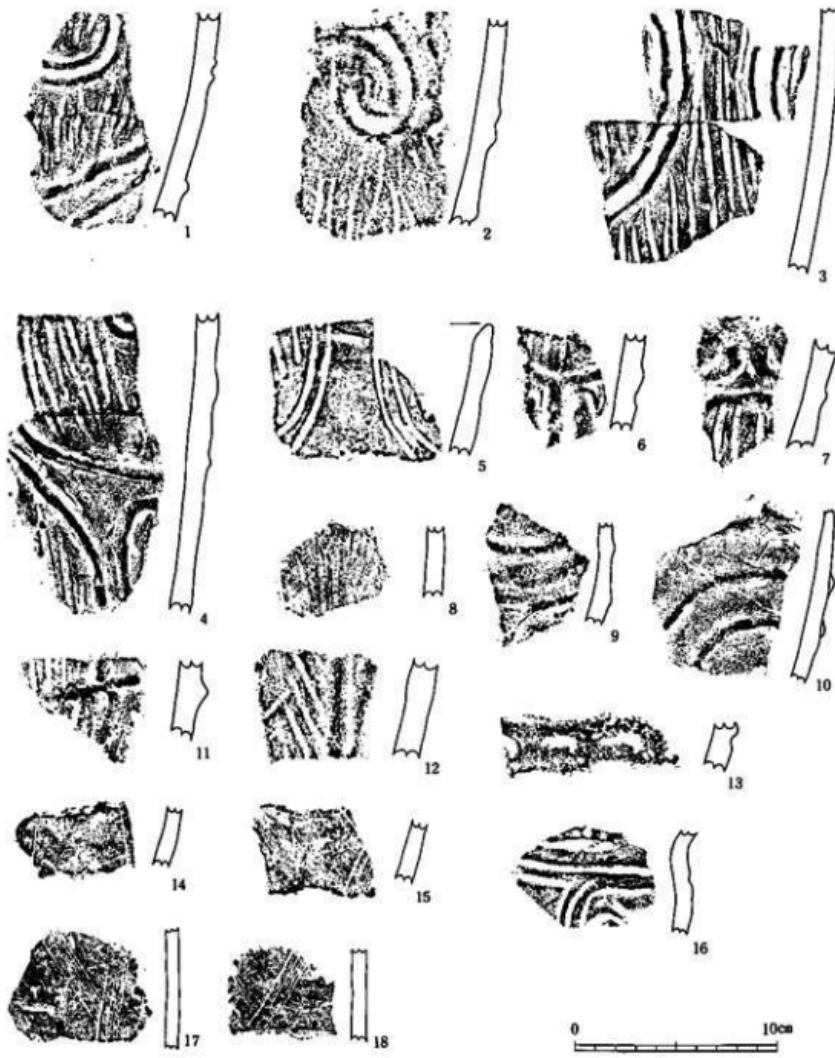
第3号墓址は発掘に際して、土中、殊に焼土中に骨粉状に混入している状態が観察された程度であった。なお上顎第2小白歯の根尖部分が1本第1号墓址より検出されている。(西沢 寿晃)

第6節 その他

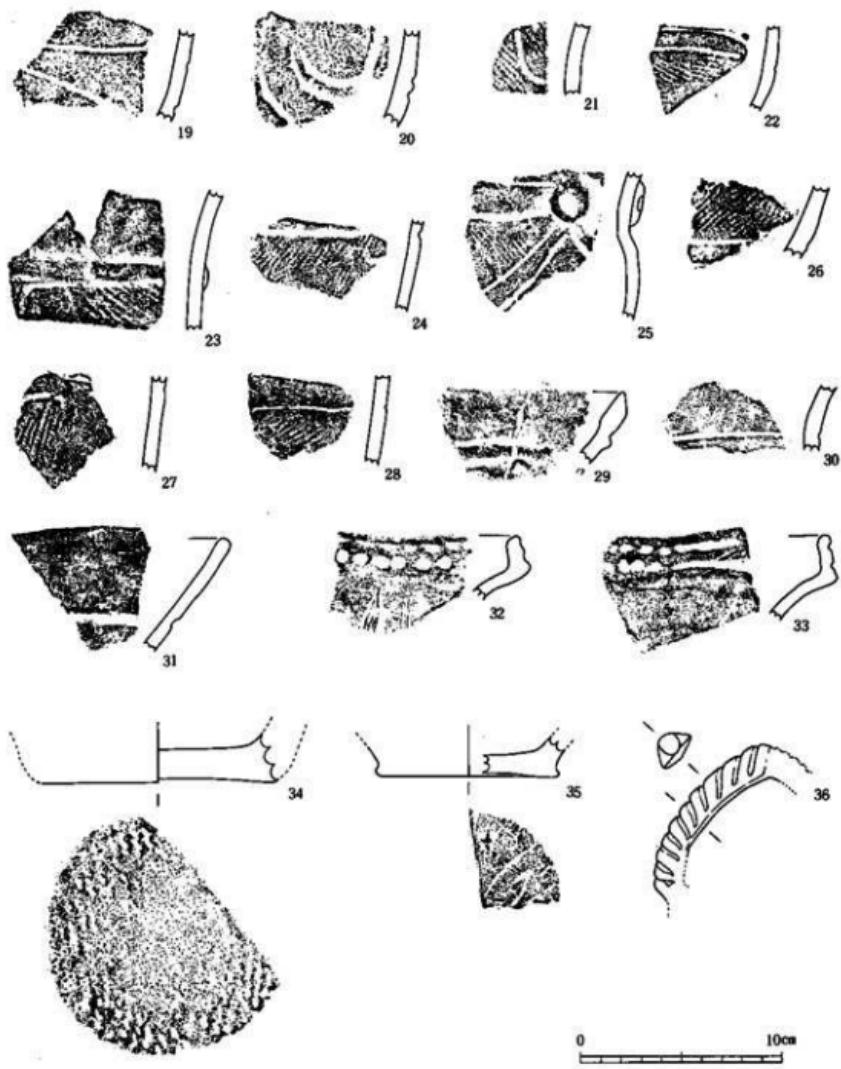
植物について僅かではあるが記しておきたい。前記第48図1の刀子の柄に使われている木材はアカマツであり、第1号墓址より検出された木炭化物もアカマツで樹脂道がでている。多分寝棺の板材として用いられたものではないかと思われる。

(神沢昌二郎)

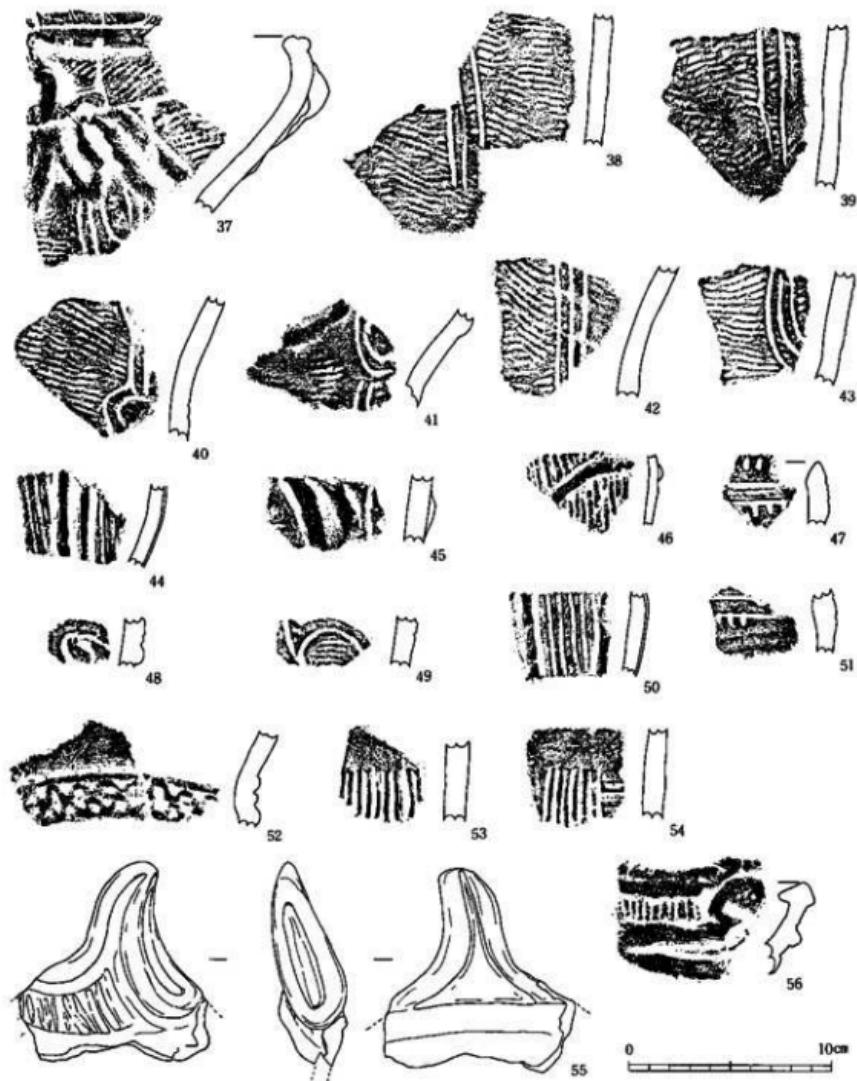
この項については全面的に大町高校森義直氏の表示によるものであることを付記しておく。



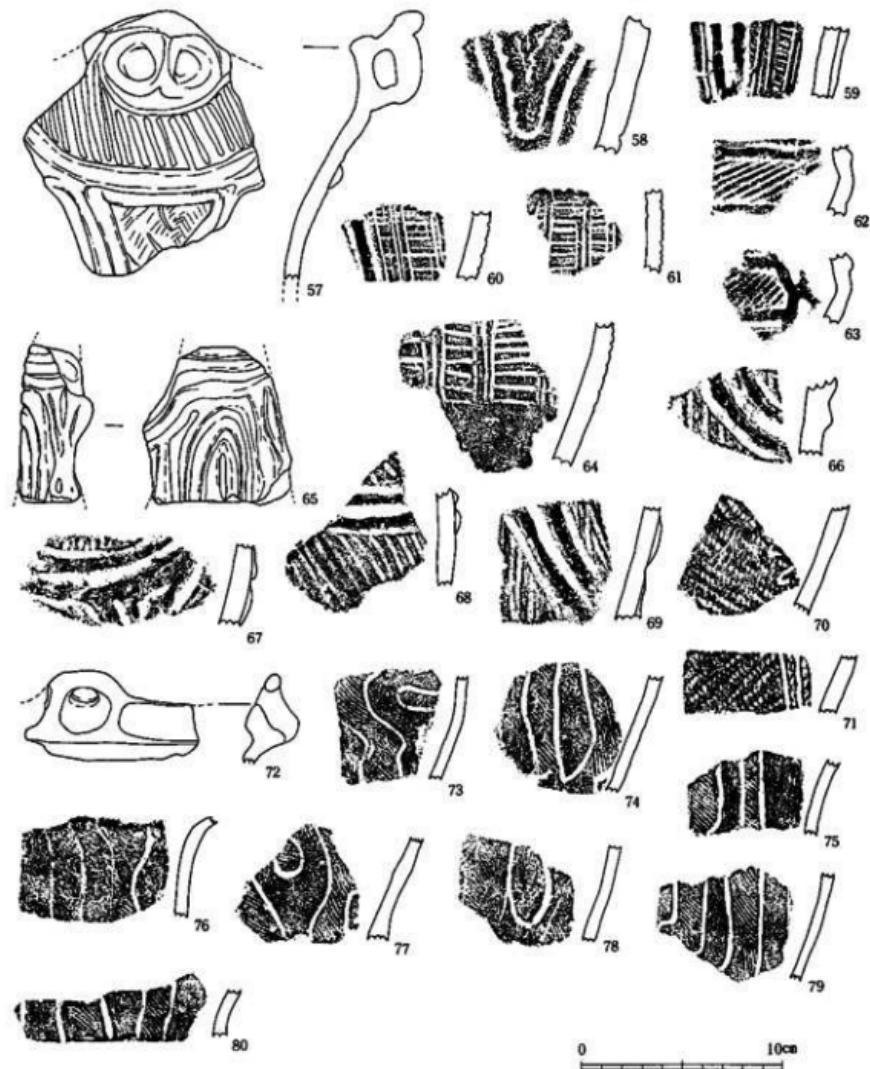
第26圖 第5號住居址出土土器(1)



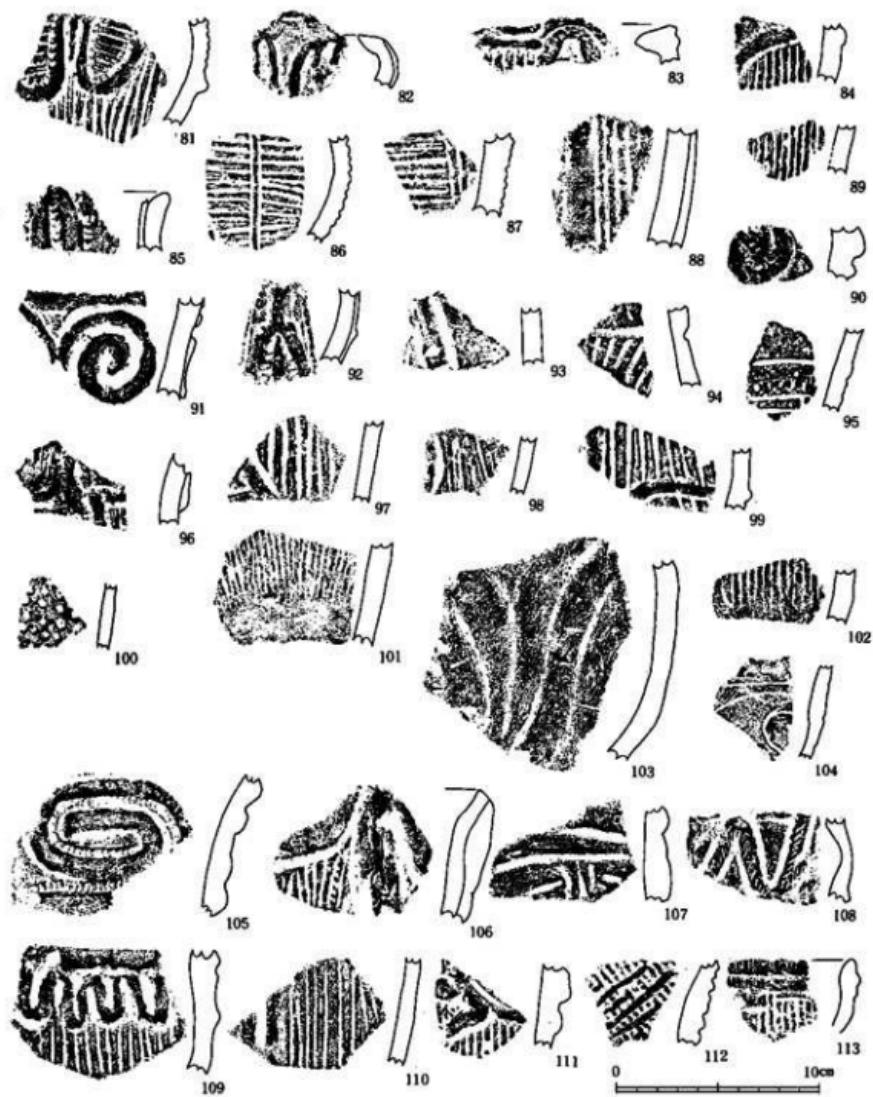
第27図 第5号住居址出土土器(2)



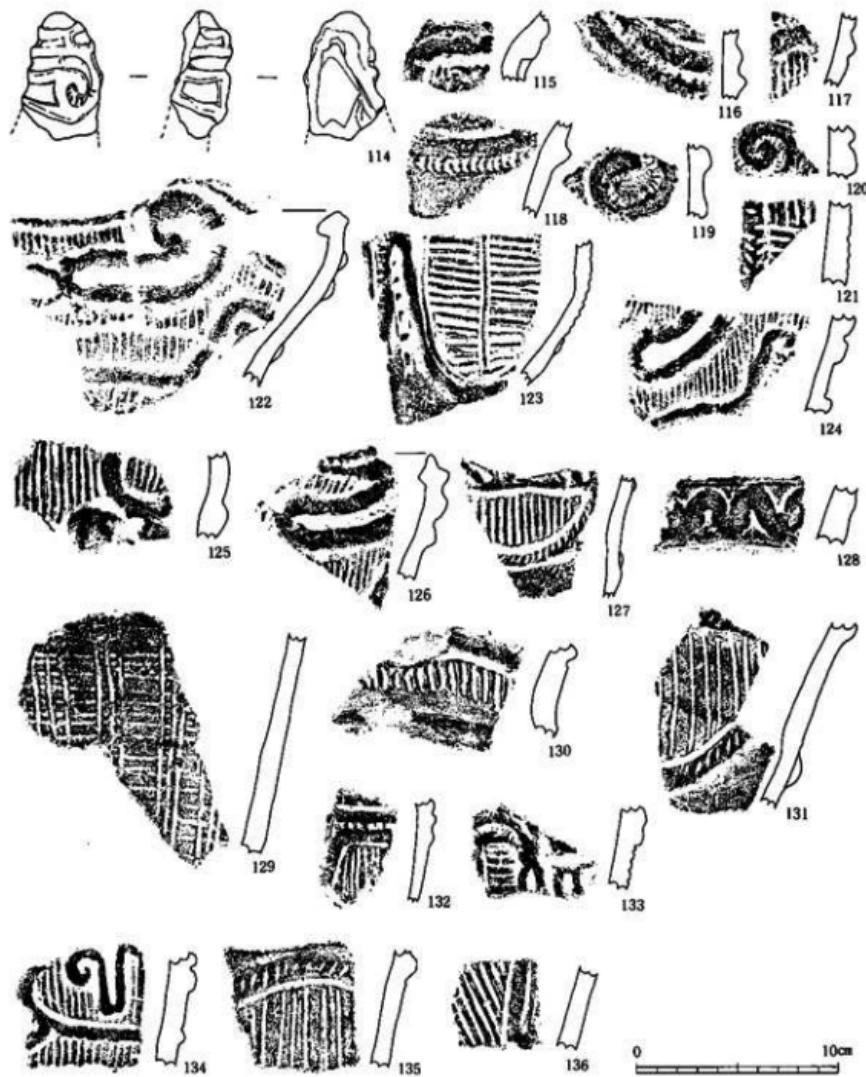
第28図 造橋外出土の縄文土器(1) (A-5:37~51, D-12:55, D-13:52~54, D-15:56)



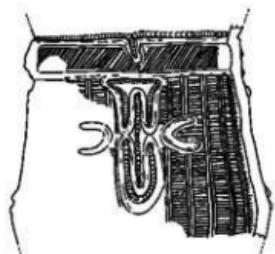
第29図 遺構外出土の縄文土器(2) (D-14)



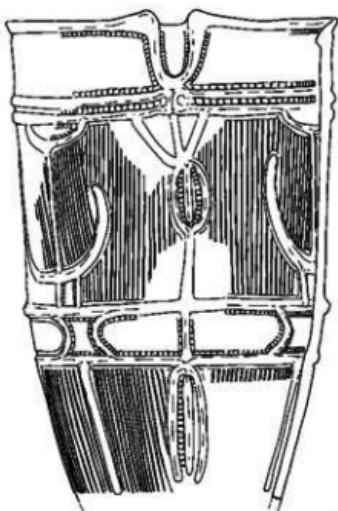
第30図 造構外出土の縄文土器(3) (E-12: 81~104, E-13: 105~113)



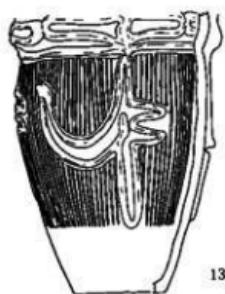
第31図 造構外出土の縄文土器(4) (E-14)



137



139



138



140



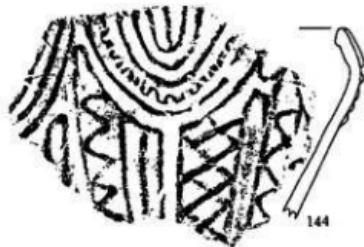
141



142



143



144



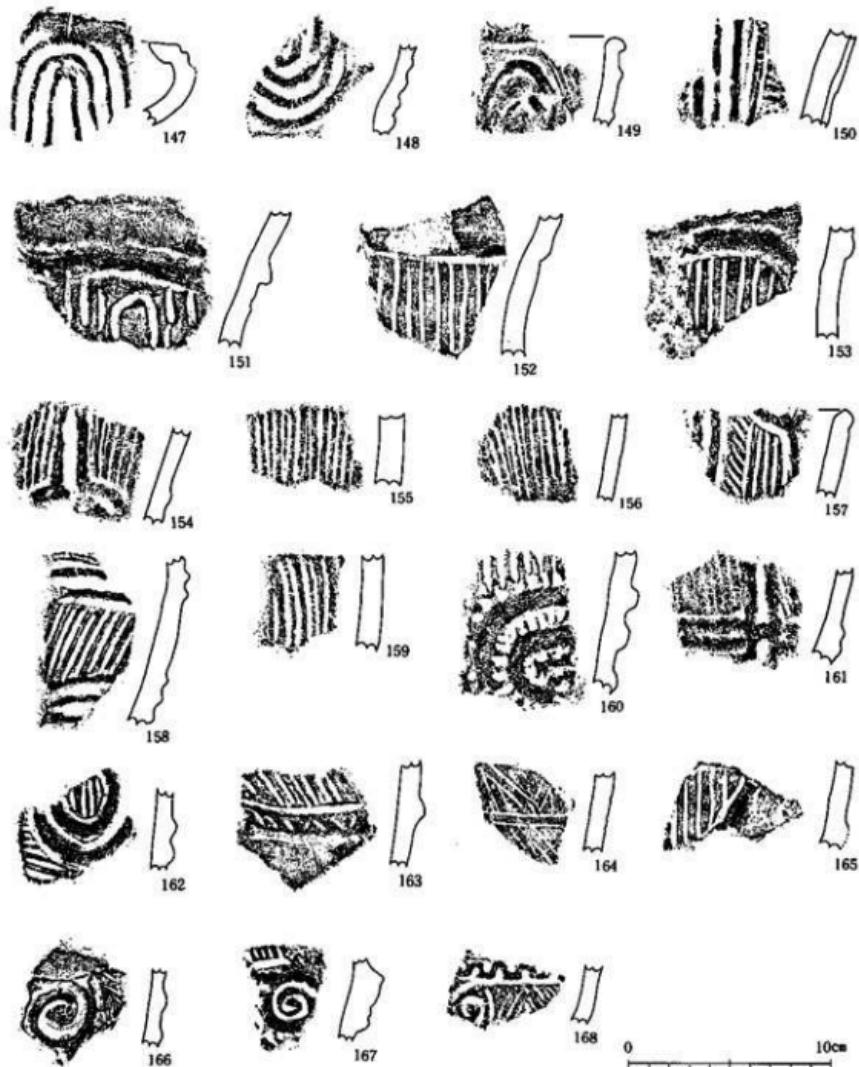
145



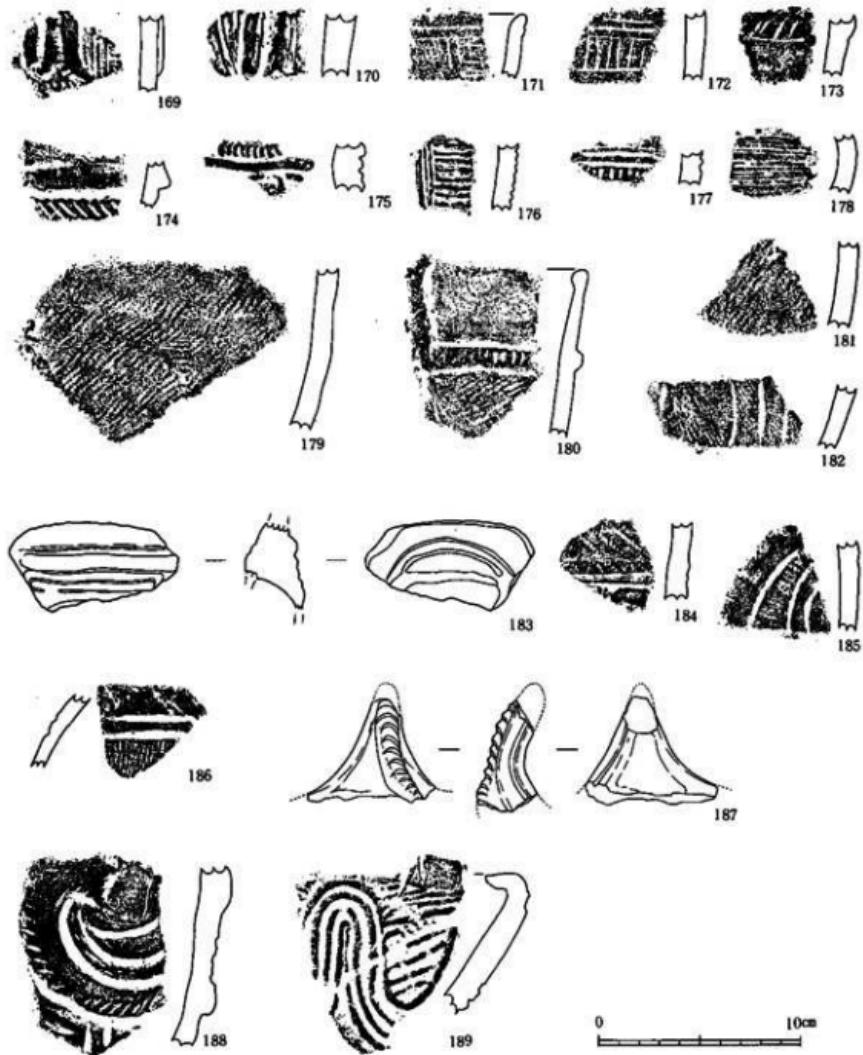
146

0 10cm

第32図 造構外出土の縄文土器(5) (E-14)



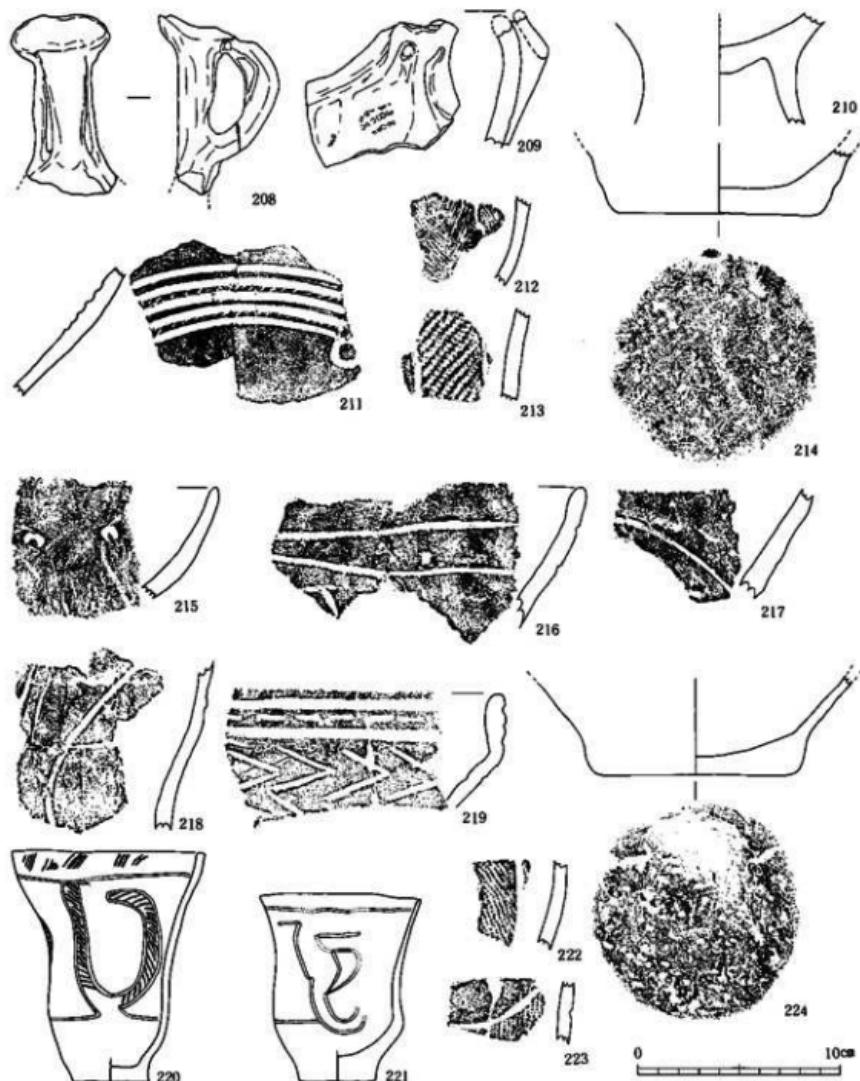
第33図 造構外出土の縄文土器(6) (E-14)



第34図 造構外出土の縄文土器(7) (E-14: 169~185, F-13: 186~189)



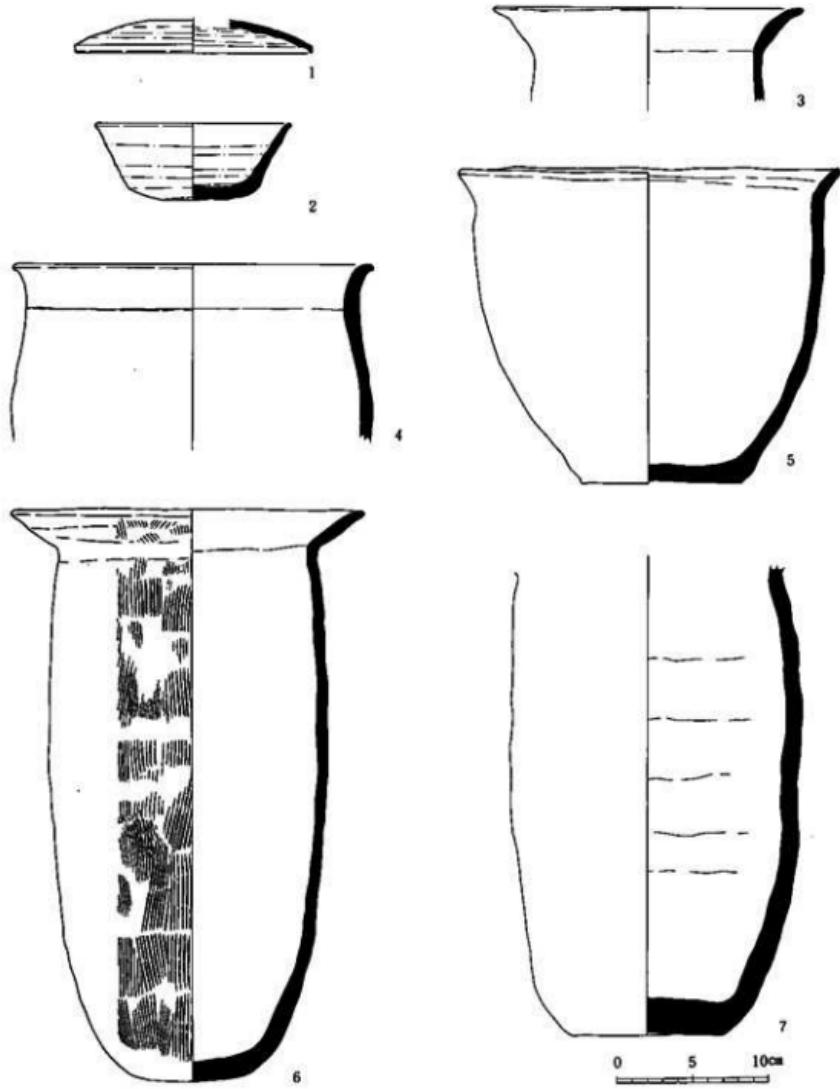
第35図 遺構外出土の縄文土器(8) (F-13)



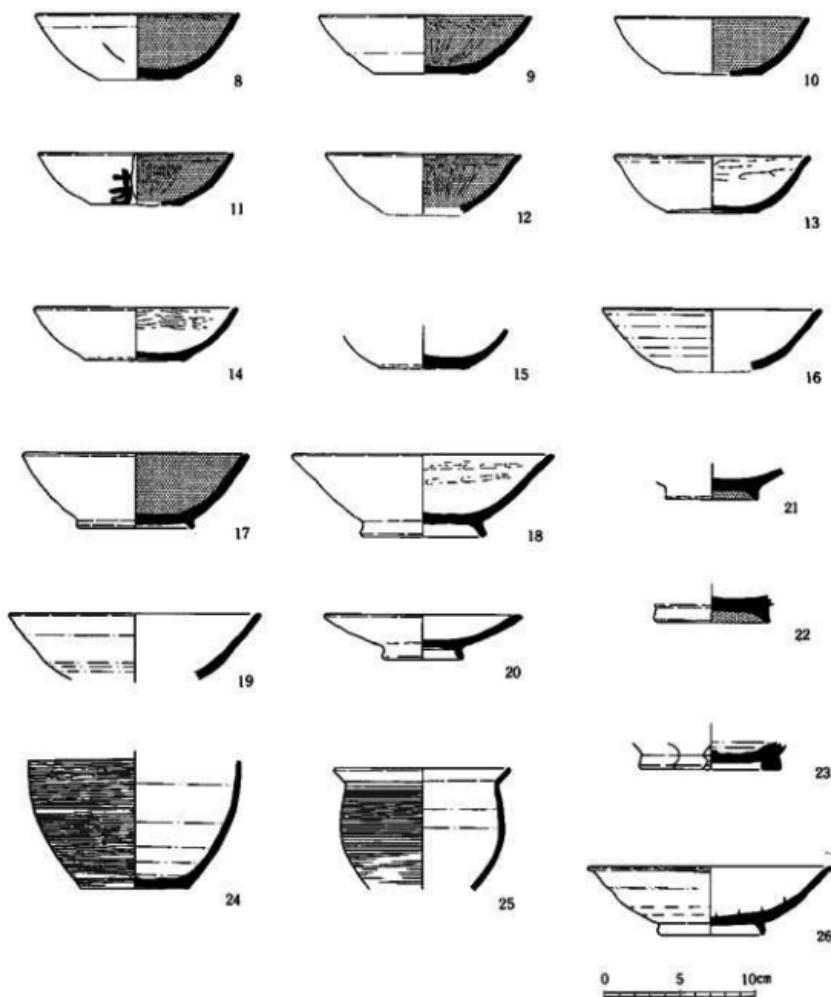
第36図 造構外出土の縄文土器(9) (L-5: 208~214, I-2: 215~224)



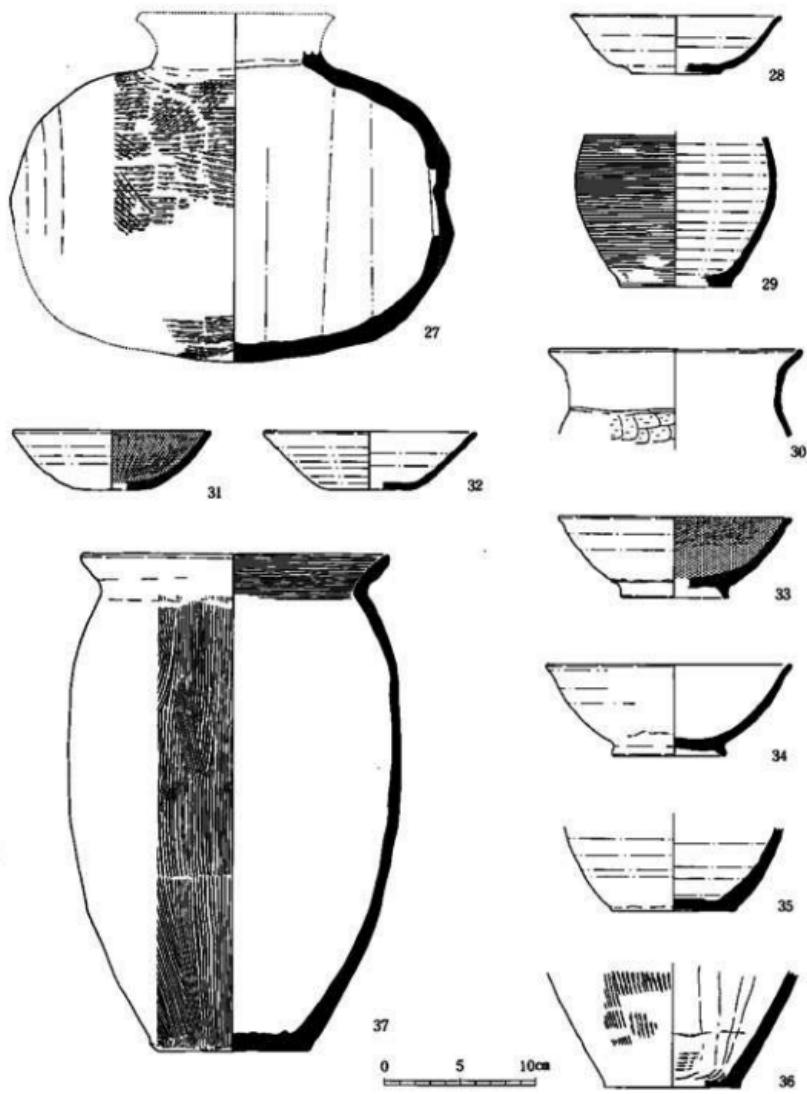
第37図 造構外出土の土器・土製品 (B地区: 225~239, C地区: 240, G-12: 241, 242)



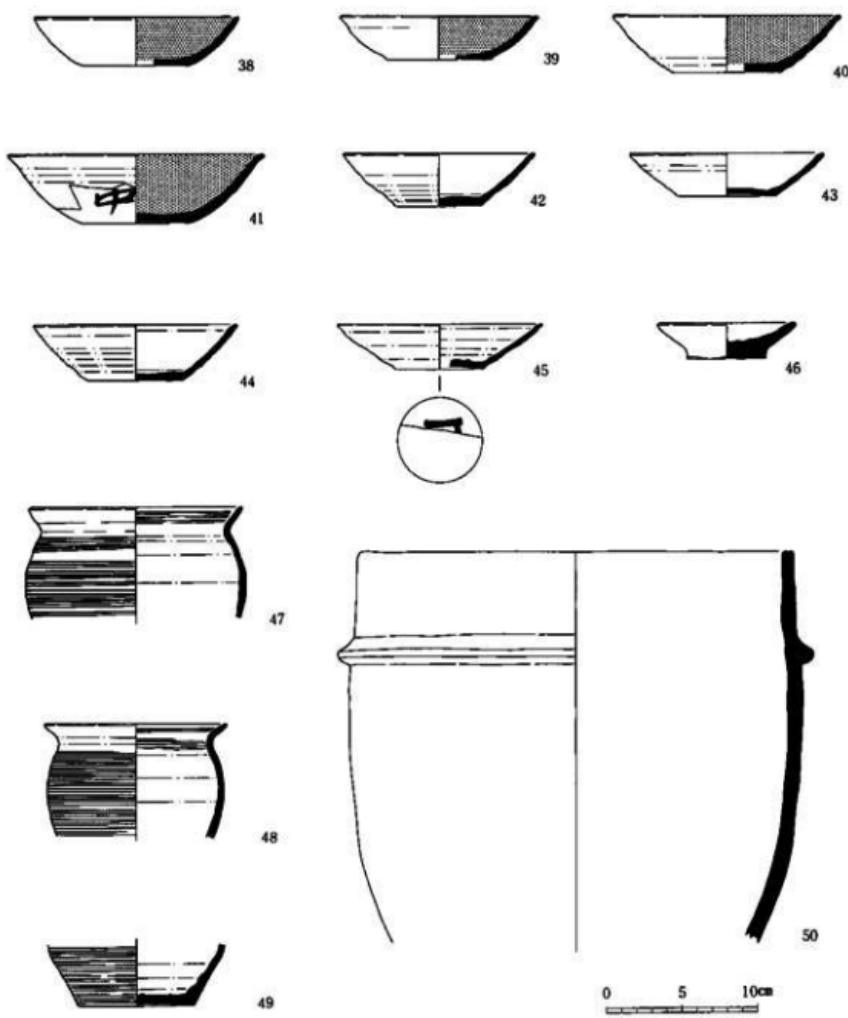
第38図 第2号住居址出土土器



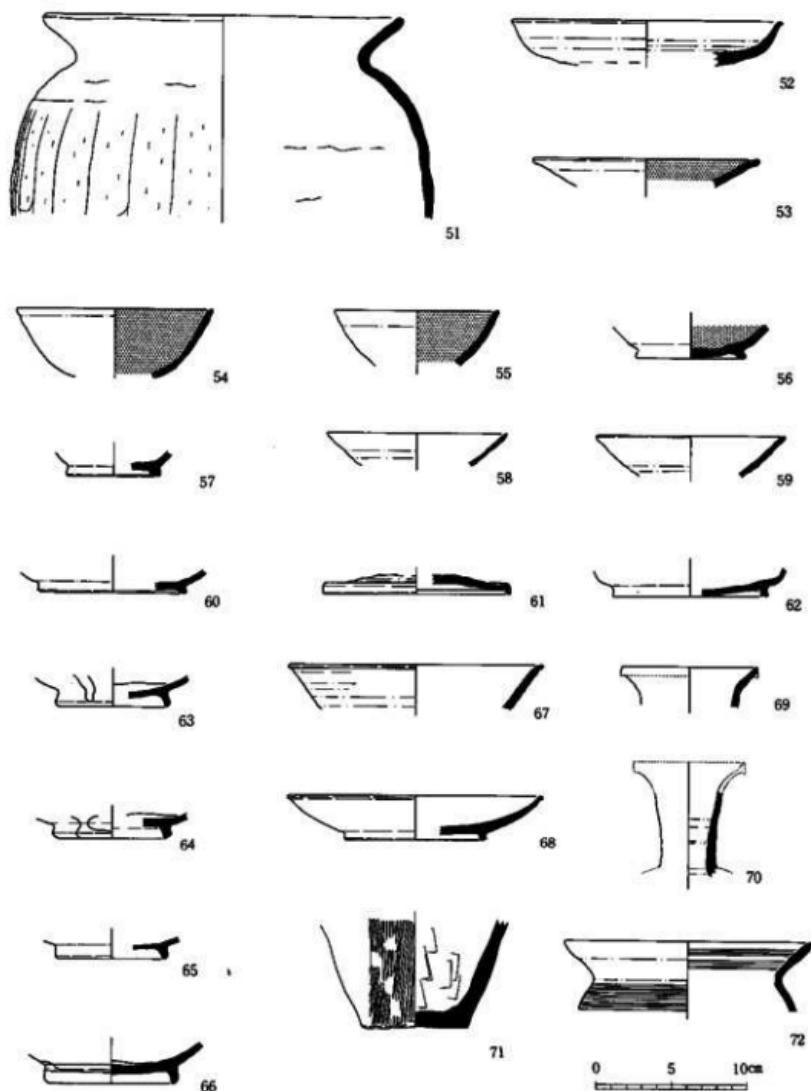
第39図 第1号住居址出土土器



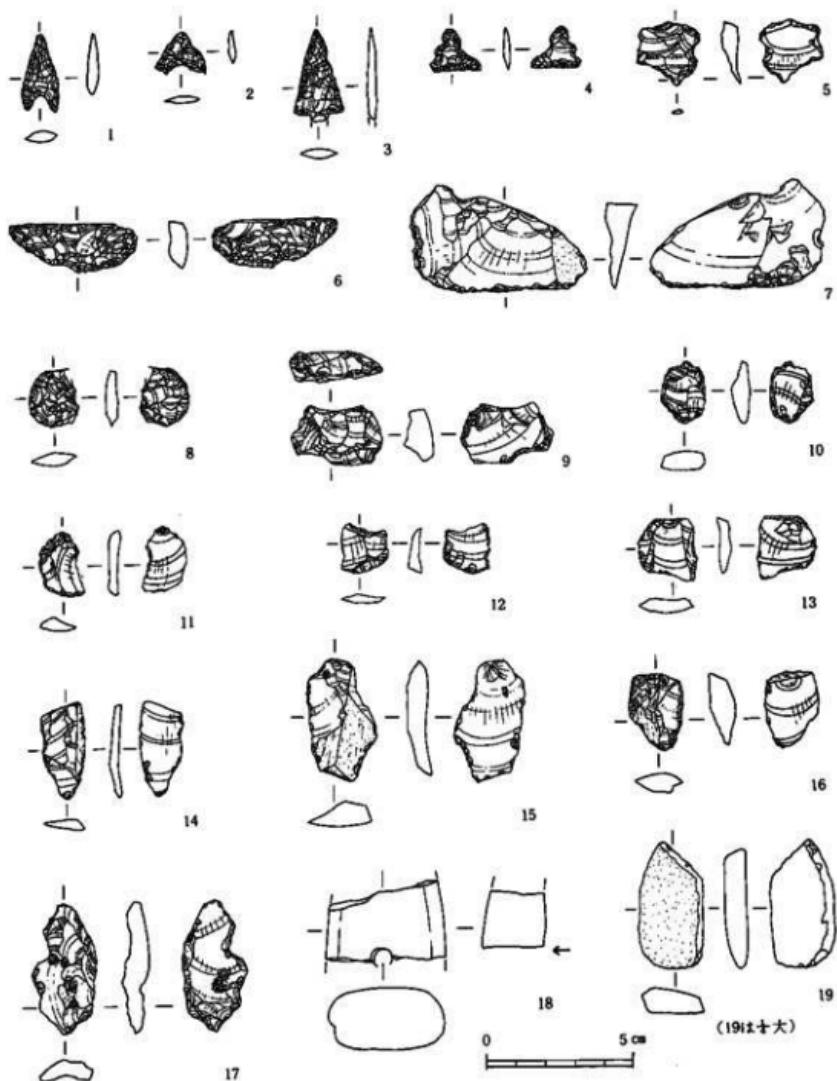
第40図 第1 · 4 · 7号住居址出土土器



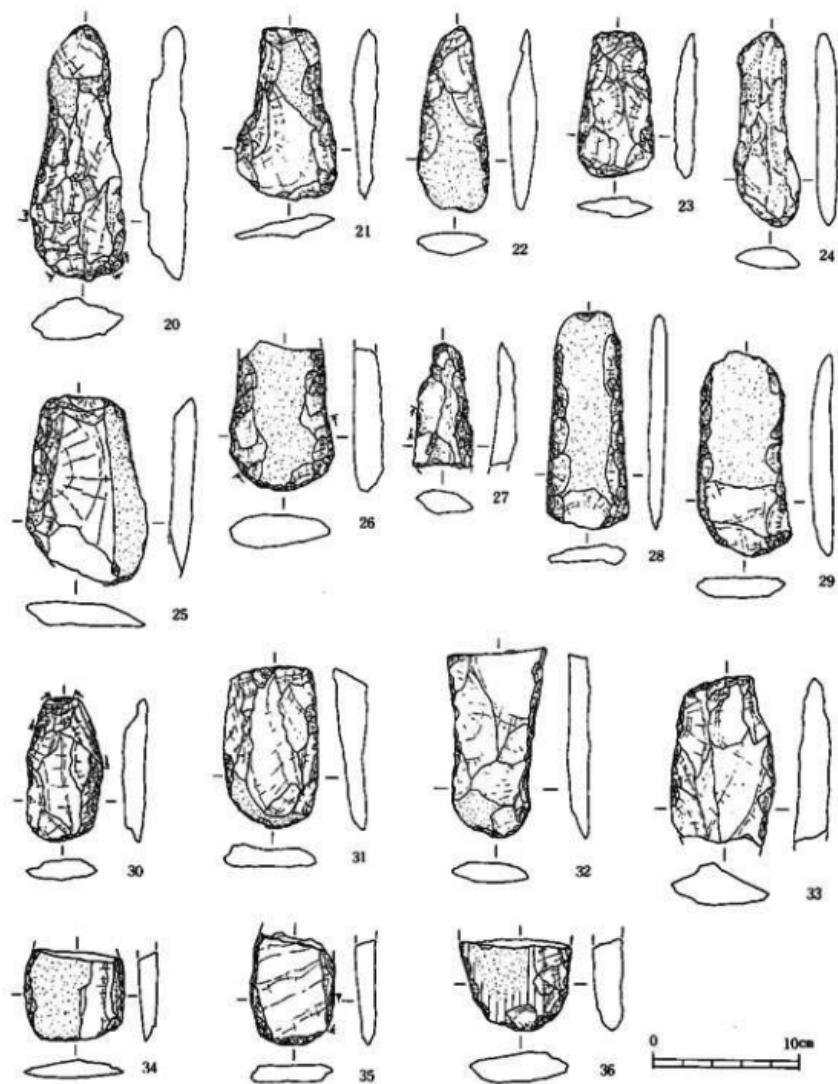
第41圖 第6號住居址出土土器



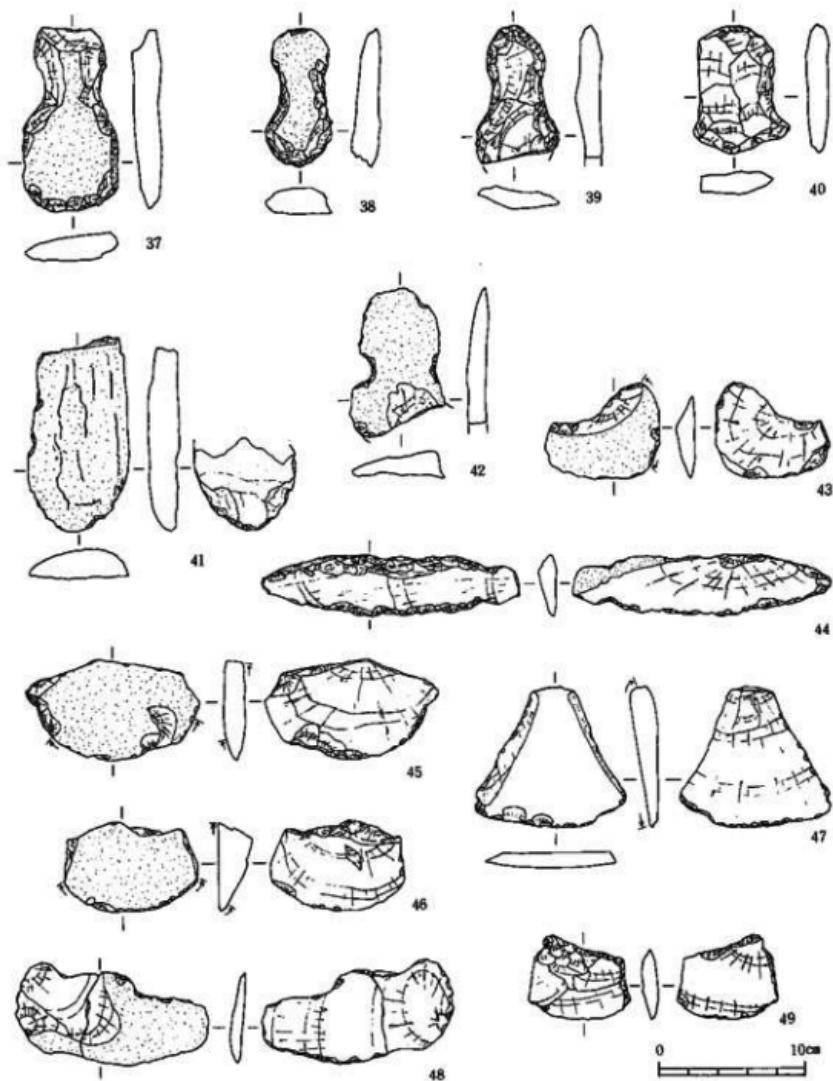
第42図 造構外出土の歴史時代土器



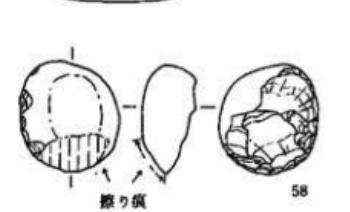
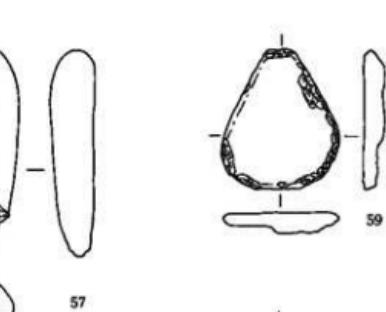
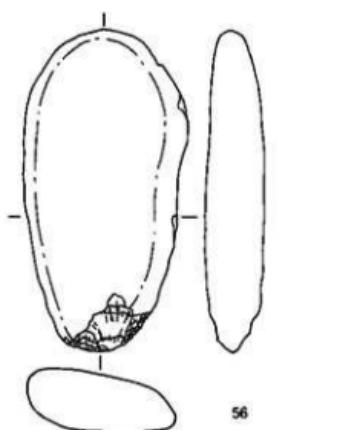
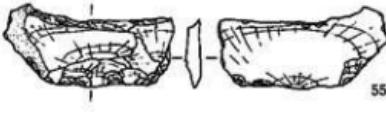
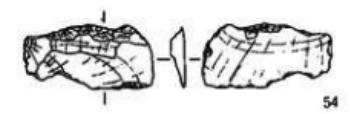
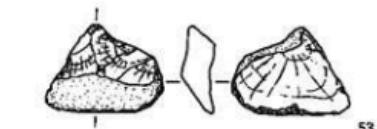
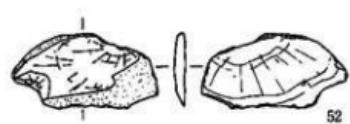
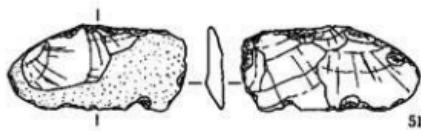
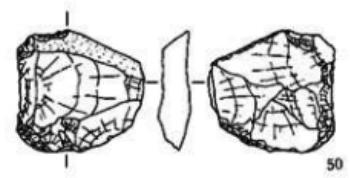
第43図 出土石器(1)・石製品



第44図 出土石器(2)



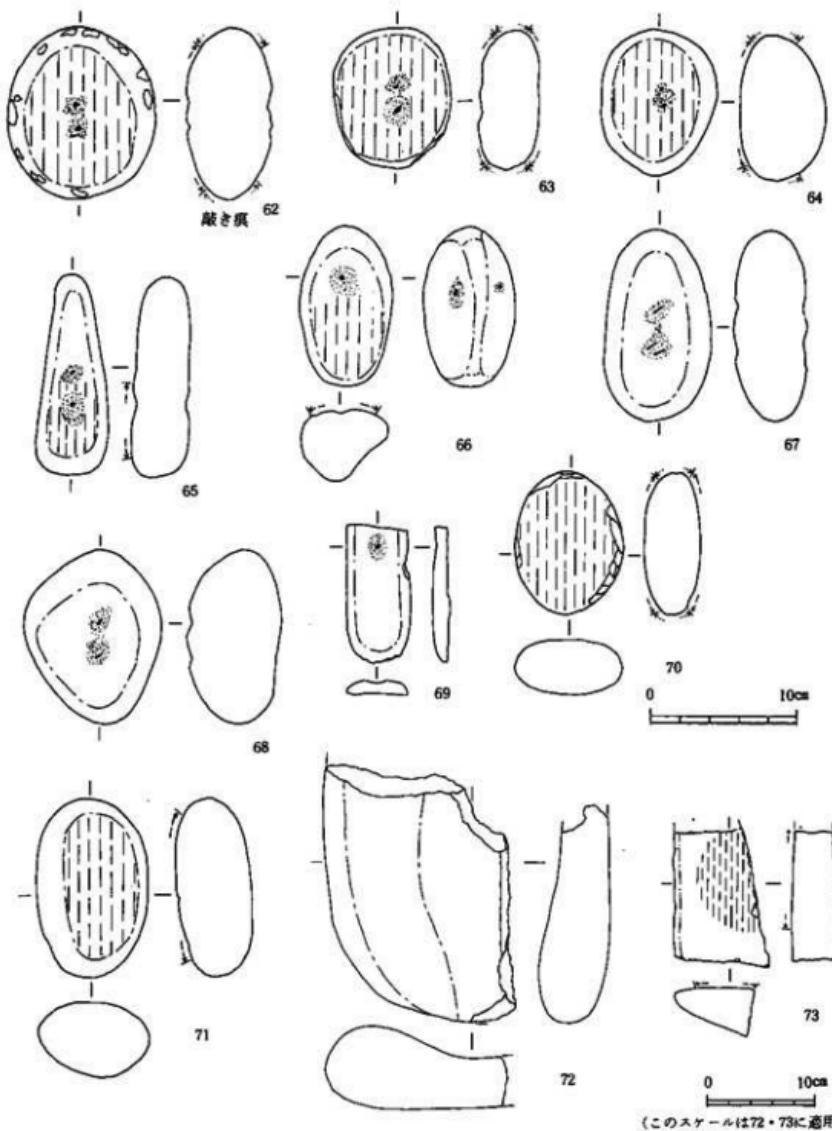
第45図 出土石器(3)



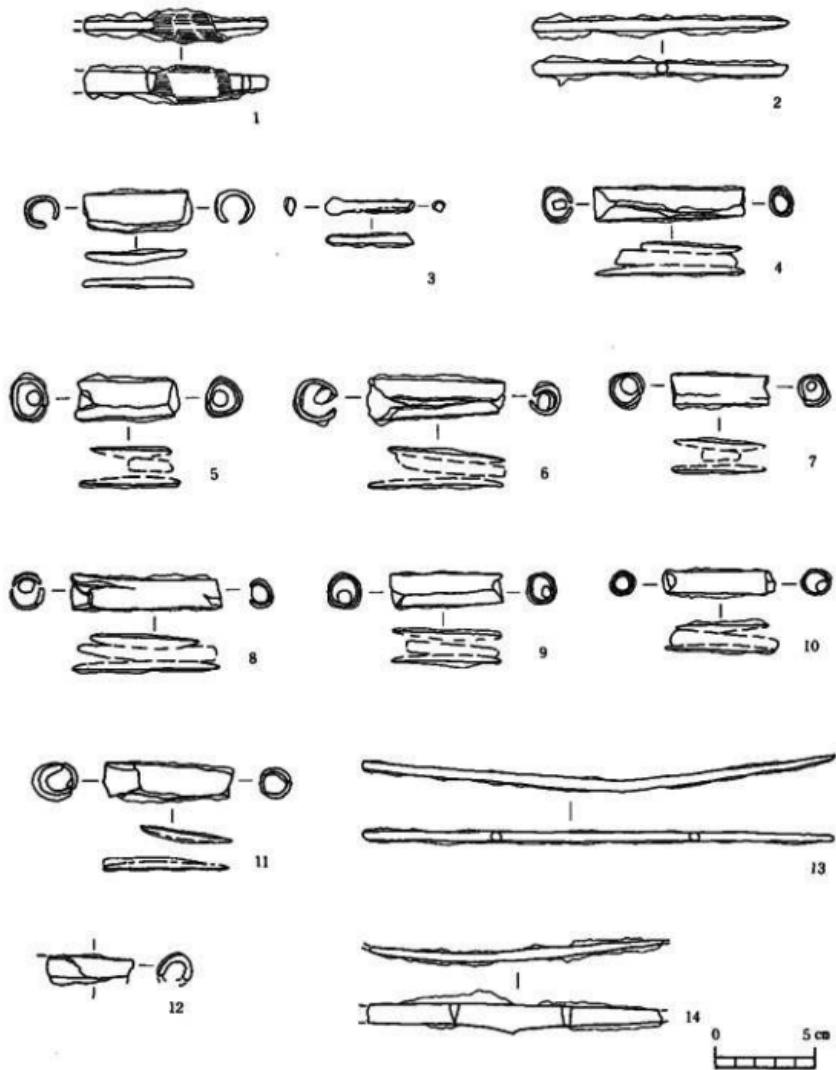
0 10cm

擦り痕

第46図 出土石器(4)



第47図 出土石器(5)



第48図 出土鉄製品

| | | | | | | |
|--------|--------|-------|-------|-------|-------|----|
| E - 6 | 20 | 1 | (1) | 3 | 1 | 1 |
| E - 6 | 370 | | | | | |
| E - 7 | 6 | | | | | |
| E - 7 | 960 | | | | | |
| E - 9 | 5 | | | | | |
| E - 9 | 50 | | | | | |
| E - 11 | 56 | 1 | (1) | (2) | (1) | 2 |
| E - 11 | 824.7 | 15.7 | (2.8) | (1.5) | (1.1) | 20 |
| E - 12 | 211 | 1 | (1) | (2) | (1) | |
| E - 12 | 3,760 | 9.7 | 3 | (2) | (1) | |
| E - 12 | 220 | 114.2 | 2 | (1) | (1) | |
| E - 13 | 152 | | 220 | (80) | (40) | |
| E - 13 | 2,900 | | | (5.5) | (3.5) | |
| E - 14 | 1,098 | | | (1.5) | (1.5) | |
| E - 14 | 21,620 | | | (1.1) | (1.1) | |
| E - 15 | 23 | | | (1.1) | (1.1) | |
| E - 15 | 400 | 2 | (1) | (1) | (1) | |
| E - 15 | 9.7 | 3 | (1) | (1) | (1) | |
| E - 15 | 120 | 20 | (1.1) | (1.1) | (1.1) | |
| P - 1 | 20 | | | | | |
| P - 1 | 500 | | | | | |
| P - 2 | 23 | | | | | |
| P - 2 | 250 | | | | | |
| P - 3 | 83 | 1 | | | | |
| P - 3 | 1,200 | | | | | |
| P - 5 | 1 | | | | | |
| P - 5 | 60 | | | | | |
| P - 6 | 2 | | | | | |
| P - 6 | 40 | | | | | |
| P - 7 | 14 | | | | | |
| P - 7 | 480 | 1 | | | | |
| P - 8 | 2 | | | | | |
| P - 8 | 40 | | | | | |
| P - 11 | 24 | | | | | |
| P - 11 | 390 | | | | | |
| P - 12 | 91 | 1 | | | | |
| P - 12 | 1,700 | 33.1 | | | | |

第4表 石器・石製品一覧表

| No | 出土地点 | 器種 | 長さmm | 幅mm | 厚さ (mm) | 重量(g) | 石質 | 欠損状況 | 備考 |
|----|------|------------|-------|------|------------|--------|-------|------|---------------|
| 1 | H-13 | 石 鋸 | 27 | 12 | 8 | 1.04 | 黒曜石 | 完 | |
| 2 | J-10 | 〃 | (14) | (19) | 2 | 0.44 | 〃 | 片脚端 | |
| 3 | J-2 | 〃 | (31) | 17 | 8 | 1.25 | 〃 | 茎部 | |
| 4 | J-10 | 石 豹 | 14 | 17 | 2 | 0.46 | 〃 | 完 | |
| 5 | H-7 | 石 鋸 | 22 | 21 | 5.5 | 2.05 | 〃 | 〃 | 片面に縦条痕多い |
| 6 | L-6 | スクレイパー | 16 | 43 | 9 | 6.44 | 〃 | 〃 | |
| 7 | L-4 | 〃 | 36 | 60 | 10.5 | 17.87 | チャート | 〃 | |
| 8 | — | 〃 | (20) | 17 | 4.5 | 1.46 | 黒曜石 | 一部欠 | |
| 9 | J-5 | 石核状石器 | 20 | 32 | 9 | 6.78 | 〃 | 完 | 片面に縦条痕多い |
| 10 | S 住 | ピエス・エスクォーリ | 21 | 15 | 6 | 2.08 | 〃 | 〃 | |
| 11 | S 住 | uf | 22 | 15 | 4.5 | 1.85 | 〃 | 〃 | 片面に縦条痕多い |
| 12 | S 住 | 〃 | 16 | 16 | 5 | 1.18 | 〃 | 〃 | |
| 13 | M-9 | 〃 | 21 | 20 | 8.5 | 1.96 | 〃 | 〃 | |
| 14 | K-7 | 〃 | 33 | 15 | 3.5 | 1.62 | 〃 | 〃 | |
| 15 | M-9 | 〃 | 42 | 24 | 11 | 7.18 | 〃 | 〃 | |
| 16 | S 住 | 〃 | 26 | 24 | 9 | 8.92 | 〃 | 〃 | |
| 17 | S 住 | 〃 | 44 | 22 | 9.5 | 7.28 | 〃 | — | 未製品か |
| 18 | K-6 | 有孔石製品 | (28) | (41) | 21.5 | 35.79 | 長石 | 両端欠 | |
| 19 | — | 石製品? | 84 | 45 | 18 | 100.70 | 閃輝岩 | 完 | |
| 20 | K-3 | 打製石斧 | 170 | 65 | 82 | 360.0 | 粘板岩 | 〃 | |
| 21 | G-12 | 〃 | 114 | 70 | 18 | 180.7 | 泥質片岩 | 〃 | |
| 22 | N-6 | 〃 | 185 | 48 | 19 | 115.8 | 〃 | 〃 | 先端部破損後もそのまま使用 |
| 23 | C-5 | 〃 | 98 | 52 | 14 | 80.2 | 〃 | 〃 | |
| 24 | B-6 | 〃 | 180 | 45 | 17 | 111.6 | 片麻岩 | 〃 | |
| 25 | L-8 | 〃 | (127) | 83 | 18 | 234.5 | 粘板岩 | 刃端部 | |
| 26 | S 住 | 〃 | (100) | 72 | 24 | 210.7 | 硬砂岩 | 頭~肩部 | |
| 27 | E-14 | 〃 | (88) | 40 | 15 | 180.2 | 粘板岩 | 刃部 | 片側刃側磨耗 |
| 28 | F-12 | 〃 | 145 | 56 | 10 | 146.5 | 砂質岩 | 光 | |
| 29 | G-3 | 〃 | 187 | 64 | 15 | 180.2 | 砂質頁岩 | 〃 | |
| 30 | F-3 | 〃 | 98 | 52 | 15 | 98.8 | 砂質頁岩 | 〃 | 頭側刃部磨耗 |
| 31 | E-12 | 〃 | 109 | 71 | 29 | 199.5 | 砂岩 | 〃 | |
| 32 | — | 〃 | 128 | 67 | 15 | 168.6 | 粘板岩 | 〃 | |
| 33 | E-15 | 〃 | (115) | 71 | 28 | 143.4 | 〃 | 刃部 | |
| 34 | D-11 | 〃 | (60) | 68 | 18 | 682.0 | 砂質粘板岩 | 頭~肩部 | |
| 35 | D-13 | 〃 | (75) | 57 | 14 | 96.1 | 〃 | 〃 | |
| 36 | H-11 | 〃 | (61) | (76) | 18 | 124.9 | 砂岩 | 〃 | |
| 37 | E-14 | 〃 | 138 | 64 | 20 | 189.2 | 硬砂岩 | 完 | |
| 38 | I-6 | 〃 | 98 | 45 | 19 | 89.7 | 粘板岩 | 〃 | |
| 39 | L-4 | 〃 | (92) | 57 | 15 | 94.7 | 砂質粘板岩 | 頭~刃部 | |
| 40 | H-6 | 〃 | 87 | 66 | 16 | 117.0 | 粘板岩 | 完 | 大型石底を再加工か |
| 41 | I-9 | 〃 | 132 | 69 | 21 | 277.5 | 凝灰岩 | — | 未製品か |
| 42 | L-5 | 大型石斧 | (99) | (64) | 17 | 99.4 | 砂岩 | 刃部 | |
| 43 | S 住 | 横刃櫻石器 | 64 | 78 | 18 | 99.7 | 〃 | 完 | |
| 44 | B-5 | 〃 | 42 | 176 | 12.5 | 100.7 | 泥質頁岩 | 〃 | 小さな抉りあり |
| 45 | K-L? | 〃 | 68 | 118 | 15 | 151.4 | 硬砂岩 | 〃 | 片面磨耗らしい |

第5章 結語

松本市佐賀地区では昭和54年度より地区内の県営圃場整備事業がはじめられ、同年は小戸地籍内が、翌55年度には神戸地籍内が、そして56年度には二子地籍内49ヘクタールの田畠が対象となって実施される。ところで二子地籍内には、かつて地元考古学者の小松慶氏によって、古代以前に遡る遺物出土地点が10余箇所確認されており、圃場整備事業着手に先だって、緊急発掘調査がなされることとなった。10月9日、二子地籍は資金なす実り豊かな稻穂が刈りとられずに所在したが、この日、地区内の現地踏査が関係者の中で行われ、敵地形的に最も有望と判断された、くまのかわ地籍が発掘地として選定される。

調査は実質的には11月1日より12月10日にわたり、1ヶ月余にわたって実施された。その結果当初予測された資料を大きく上まわる遺構・遺物に恵まれ、ために責任発掘面積の、約3.4倍の2700平方メートルを発掘することになる。あきらかにされた遺構・遺物等をその上限からあげると下記の如くであった。

先ず縄文中期の住居址が1例ではあるが検出される。ここでは良質の黒曜石片が約50個まとまって出土したことが注目される。これらの黒曜石片は長さ3cm前後を示し、いずれも粒ぞろいで、石器の工房跡とも考えられたが、他に特別な施設や裏付け資料を欠いた。しかしあまり事例ではなく、注目される遺物であった。その他縄文期の遺物出土については出土分布図でふれているので割愛するが、B地区をも含めて本址が縄文期には河川の縁辺にあり、本址より南西寄りの現集落にかけての広範囲にわたって、点々と居住していたのではないかと推定される。なおA地区北側の縄文後期初頭の遺物出土地点であるが、この時期の破片は中期破片と同様の浅い砾中からも出土しているので、この時期には河川が東寄りに振ったため今までの低地が乾き、居住に適するようになったと考えたい。

縄文期より古代に入ると大別して奈良期相当のものと、平安期相当のものに分類が可能である。まず奈良期相当の遺構としては住居址として第1～3号住居址があげられる。特に第2号住居址は遺構と遺物の遺存状態を非常によくし、他の模式的な資料ともなったが、遺物面では竈内出土の3個体分の土師器は、鬼高期相当の特色を備えるものであり、又床面上の出土遺物も灰釉陶器を含まず、土師器と須恵器のみで、両者の比率も土師器片が主体をしめており、須恵器片も古い特徴をもつ、环や环蓋の破片等であった。第4号住居址は複雑な切り合い関係がみられ、2回位活用された跡を残すものの、明確を期することが難しかった。時代的には前記第1～3号住居址より若干下降するものと考えられた。

平安期相当の住居址としては、第6～8号住居址があげられる。第6号住居址の場合も2回位の

活用が考えられ、石組甌が東壁にあり発見時には崩れた感じであった。上層では土師器の坏（内面黒色の坏もあり）、強いカキ目痕をのこす甌、銅釜、須恵器の坏、叩目痕のある甌の破片等の出土があり、更に西南部に集中して、管状に加工した鉄製品が10個出土している。下層の床面までの覆土中には、土師器の坏、甌、須恵器の坏の他、鉄薄數個が発見される。年代的には上層の生活面と時間的な差異をあまり感じさせなかつたし、鉄製品や鉄薄の出土は、鍛冶屋場施設が周辺近くに存在したのではないかと想像させる。遺物、遺構等からこの住居址の所属年代を推定すると、まず銅釜は平安中期初頭の10世紀の後半では口縁部が「く」の字形に屈曲しているか、6号住居址出土品は、口縁部が直立するかたちをとり、平安中期末の11世紀前半の器形を示していること、又、甌は平安時代初頭では、壁の中央部から一方に片寄りはじめ、粘土甌が姿を消す時期にあたっており、又土器の組合せをみても、土師器の坏、甌、銅釜、須恵器の坏、甌以外に灰釉陶器の出土は全くみられなかつた。この灰釉陶器が信濃に急増をみるのは、11世紀中葉以降12世紀中葉にかけてと思われる所以、以上諸条件を考察する中で、11世紀前半代に位置づけるのが妥当の様におもえる。第7号住居址も土砂の流入等による搅乱をうけているので遺構としてはとらえにくいが、出土遺物から第6号住居址とほぼ同年代と推測される。

その他第6号住居址の南側に接して建物址とみられる柱穴があり、その4本の間隔は約3.5mの正方形で結ばれる。

中世では僅かに陶磁器片が散見したのみである。又近世では3ヶ所に墓地が検出され、その場で火葬に付された様相を示している。これらの墓地の設営年代はこの地がいまだ開発されない原野だった時代のことであり、慶安4年検地の折には「熊のかは」地名として記録されているので、慶安4年以前であることは間違いない、第1号墓址からは寛永通宝が副葬されているところから、寛永期までの設営ではないかと推察される。

以上が今回調査された、くまのかわ遺跡の主なる遺物・遺構である。調査結果から成果として主なる事項をあげれば、1、今まで全く知られなかった1地域の古代以前に遡る歴史を明らかにし得たこと。2、平地部における縄文時代の遺跡の分布を追求する上で資料が得られたこと。3、古代の遺跡として平安期相当のものは松本地方でも発掘事例は多いが奈良期相当のものはあまり事例もなく今後によい資料を提供するところとなつたことなどである。

終りに終始発掘調査に従事された調査員各位をはじめ、多くの作業協力者に対し、ここに深い感謝の意を表する。

（大久保知巳）

発掘見学記

芳川小6年生

お礼の手紙

先日は、遺跡の見学をさせていただきありがとうございました。

おかげで、いい勉強になりました。

一学期で遺跡の勉強をしましたが、そのまとめと復習になりました。

遺跡や発くつされた土器などは、何回も見たことはあります。しかし、今回のようなものは見たことはありません。特に、きれいなコクヨウ石の矢じりなどです。

こんな身近な所にも遺跡があるとは知りませんでした。

今度行った時にはよろしくおねがいします。

(坂野 秀樹)

☆

発掘していたおじさん、おばさん、ありがとうございます。

とてもいい勉強になりました。

いろいろな時代の勉強はしましたが、発掘している所、土器、住居あとなどを見れるなんてうれしかった。

そして、復元した家の柱は、てっきりめちゃくちゃにたてたと思っていた。だが、そんなことはないと、はじめてしました。

このほかに、しらなかったことはいっぱいあったが、だいたい分かりました。

よい復習の勉強になりました。

どうもありがとうございました。

(伊藤 完次)

☆

このあいだは、おじさんたちの発くつを見学させていただいてありがとうございました。とてもいい社会の勉強になりました。

なら時代やじょうもん時代のじゅうきょあとや土器などいろいろなことがわかりました。そして今までのふくしゅうにもなりました。

これからもがんばって仕事をしてもらいたいです。がんばって下さい。 (清水 千治)

☆

7日は発くつ調査の見学をさせていただきました。

大変勉強になりました。

住居跡などはよく分かって本当によかったです。私は住居あとなど見たことがなかったのですごく心に残りました。

特に土器はいろいろなことが分かりました。

矢じりに先につけるものが黒よう石だとか石のはうちょうとかです。

たいへんよく分かりました。

本当にありがとうございました。

(中川 周子)

☆

先日はおいそがしいところをおじゃまして、すみませんでした。

縄文時代のあたりのところは、文字面だけでおぼえてしまっていて、本物をまだ見たことがありませんでした。それなのでとても勉強になりました。

それから、土器の本物や、矢じり、石おのなどにもさわられて、とても勉強になった思います。ぼくは、歴史に興味があるので、おじさんたちみたいな仕事ができたら、どんなにいいだ

ろうかと思いました。

これからも、いい発掘などをして下さい。

(竹内 信)

☆

この間は、お忙しい所を私達のために見せて下さってありがとうございました。

昔の人達の住んでいた、住居跡のようす。

昔の人達が作って使っていた、土器などのかくら。特に良かったのは、黒曜石でできていたやじりです。

このような勉強は、だいぶ前にやりましたが、実家に見てみると、いっそうよく分かりました。本当に、いい勉強になりました。

(北原 芳恵)

☆

月曜日の日は、どうもありがとうございました。おかげで学習した所に、新しいことを学びました。

私も、前は、どこでもはればきっとなにかが出ると信じて、庭をほんの少しほったことがありました。でもやたらにほってもむだだとわかり、ほるのをやめました。

でも、見学して、身近な所にも出るんだなということがわきました。

毎日たいへんだけれども、健康には気をつけで働いて下さい。

ほんとうにありがとうございました。

(藤原 寿栄)

☆

先日はどうもありがとうございました。

前にも社会で遺跡の勉強をしましたが、本物の土器などは初めて見ました。おじさん達の話をよく聞いてメモにしました。

土器を見る時も、僕はいっしょうけんめいにメモをした。この見学は今までの復習という形でメモをした。わからなかったことも、おじさんの話を聞くとよくわかった。

土器のことや家の形などもわかりました。むかしの家ははしらがその家によってちがうということもわかりました。

ノートにぎっしりメモをして帰りました。

(中村 齊仁)

☆

先日は、発掘調査を見学させていただきありがとうございました。

住居あとの事や発くつされた土器や道具の事を説明までしてもらい大変勉強になりました。

柱穴とかの見分け方なんかは学校で教わらないから初めて知りました。

また、発くつされた場所の名前も「熊の皮遺跡」なんて面白いと思います。

それに近くに「熊の皮遺せき」なんてのがあるなんてよけい面白くなってしまいました。

みなさんは、冬でとても寒いのにあんな所で一日中ほっているというのだから大変でしょう。体に気をつけて、カゼをひかないよう元気に遺せきをほって下さい。

どうも。

(高井 則之)

☆

このあいだは、どうもありがとうございました。

社会の授業の時、縄文時代のことなどを教わりましたが、実物を見たり、さわったり、お話を聞いたりして、とてもいい勉強になりました。私は、一番心に残ったことは、土器などにさわってみたり、やじりのことでとてもびっくり

りしました。それで、矢じりは、こくよう石で出来ているなんてしらなかつたけれども、このくまの川遺跡を見学して分かりました。

とてもよい勉強になりました。

どうもありがとうございました。

(松尾 光子)

☆

わかりやすく説明してくれて、本当にありがとうございました。
(古町 幸恵)

この間は、どうもありがとうございました。
とっても勉強になりました。

私はこの見学でぎ間だったことが、とけました。
それははくつの仕方です。

どうやってやるんだろう、とぎもんでした。
それが、この見学に来て、やり方や、いろいろの調べ方などが分かってぎ間がとけました。
本当にありがとうございました。

これからますます寒くなりますが、お体に気をつけて、がんばって下さい。

(太郎良 奈己)

☆

この間は、私達のために良い見学をさせていただき、どうもありがとうございました。

教科書を見て学習するのとちがって、実際に見学できて、たいへん役に立ちました。

家のあとなどが、とっても良かったです。そして、こんな近くにも遺跡があるとは知りませんでした。

土の色のちがいなど、よくわかるなあと感心しました。

私が一番おどろいたのは、矢じりです。あんなにきれいな物とは知りませんでした。すきとおっていて、ガラスよりも、とってもきれいでした。他にもいろいろありました。

土器でも、おかまなんかは初めて見ました。

この前は、とてもわかりやすく、くわしく説明してくれて、ありがとうございました。

一番びっくりしたのは、あんなかすかな土の色のちがいで、よく分かるなあと思いました。
それから、かまどのあとが、しっかりのこっていることでした。

それに、昔の人もあんがい頭がいいなと思いました。それはどうしてかというと、えんどうを、風のあたらない方角に作るからでした。ブレハブの所で見た土器の中で、いちばんすごいと思ったのは、薬をぬって光っているのでした。やじりはとてもすごいと思いました。

とにかく、いろいろおしえてくれてありがとうございました。
(宮坂 寿美雄)

この間は、いろいろな物をみてくださいってありがとうございました。

おかげで、いろいろな事もわかり、とっても参考になりました。

たて穴式住居のあとは、はじめてみました。
ほんとうに目の前に昔の生活が、見えてくるようでした。それに、一番おどろいた事は、昔にも、人形があるということです。

ハートドグウというのです。それには、とってもびっくりしました。

それに、石ぼうちょうとか、おかまのかけらとか見ました。昔も、おかまがあったんだなあということがわかりました。

本当にありがとうございました。

発掘調査のみなさんへ

昨日は、発掘の見学をさせていただいて、どうもありがとうございます。

私達は、とても勉強になりました。

社会では、もう勉強してきましたが、それが、さらにくわしく分かりました。

それに発掘する時の苦労もよく分かってよかったです。

発掘するとき、あんなにていねいにやっていくなんて知りませんでした。本当に、社会科の勉強のためになりました。

どうもありがとうございました。

発掘調査、がんばって下さい。

では、さようなら (芦久保 歩美)

☆

この前はどうもありがとうございました。

とてもいい勉強になり、縄文時代以後のことの復習になりました。

私は、初めて、土器、住居のあとを見ました。想像では、柱が6本ぐらいあると思ったら、4本しかありませんね。それに、田んぼの下にあるなんて不思議に思いました。

土器も、きれいな模様のがたくさんあり、おかまなどたくさんありました。

土器を見たり、さわれたりして、とてもうれしかったです。

毎日、寒い所、大変ですが、頑張って下さい。

私たちは、勉強の方で頑張ります。

本当に、ありがとうございました。

(高橋 佳代子)

☆

このあいだは、見学させていただいて、本当にありがとうございました。

とてもわかりやすく、くわしく説明してくれたので、とてもよく分かりました。

とくに土器のところは、とてもよく分かったし、楽しかったです。

メモもしっかりできました。

みなさんは寒い中を大へんですね。でも、みなさんみたいな人がいるから、昔のことが分かっているんだと思います。

見学させていただいたものはちゃんとまとめをして、これから学習に役立てたいと思います。

これから寒さがきびしくなりますが、かぜをひかないように、しっかり発掘をやって下さい。

本当にありがとうございました。

(滝沢 龍一)

☆

昨日は、色々と昔の様子について説明して下さって、どうもありがとうございました。

社会科でじょう文時代のことは一応学習しましたが、実際に見て学習したのではありませんのでよく理解できませんでした。

でも、昨日、実際にじょう文時代の様子を見ていただき、とてもよい学習になりました。

特に、心に残っているのは、「えんどう」と「とう明な土器」です。とう明な土器はとても美しかったです。

本当によい学習になりました。

ありがとうございました。

お体に気を付けてがんばって下さい。

(市川 ふゆみ)

☆

去、12月7日はたいへんおせわになりました。前に勉強したことの復習になったと思います。

土器などもあんなになくさんみせていただき、住居あとも手にとるようにして分かるように教えていただきました。

予想以外のことは、かまどのけむりを出す所のえんどうの所のことです。屋根の上から出すのだと思っていましたが、土の中を通ってけむりを出すことも分かり、たいへん勉強になりました。去、工作祭の時も、本物にだいたいまねて作った立て穴式住居でしたが、見せていただいた物のようにはいきませんでした。

そして、どこがちがったかという所でも勉強になりました。仕事をしている所を、時間をさいて私達のために、いろいろ教えて下さり、とても感謝しております。いろいろありがとうございます。くまのかわ遺跡が完成する頃、頗っておりました。

(山岸 春江)

☆

先日は、どうもありがとうございました。

おかげで、今までの復習のようなかたちで大変よかったです。

特に、わたしは、前々から、なぜ長方形のような形ではるのかな、などの疑問が、説明を聞いてよくわかったし、今まで縄文時代や、弥生時代のころの家は、全部円形だと思っていたけれど、四角形のようなほり方の家があったとは全々知らず、説明を聞いてはじめて知りました。

わたしたちは、なかなか実物や、実際の場所へ行ってみるというきかいができず、見たいといふねがいだけで終ってしまうことがよくあります。

そんな面でも、実際の所で発掘したものがみてよかったです。

どうか、これからも、がんばっていろいろな

物を発掘して下さい。

(上條 知佳)

☆

ぼくは、歴史でいろいろ勉強をやっています。大和時代のことも勉強しました。

遺跡は、前に見たことがあります。

もう一回見たいと思っていたら、池沢君のお母さんのおかげで見られました。

見ると、遺跡を出すのは大変みたいでした。

それでいろいろな事を教えてくれて良かったです。

遺跡を見せてくれて説明してくれたりしてとても参考になりました。

いろいろな物を見せてくれてありがとうございました。

また、がんばって下さい。 (古畑 利夫)

☆

私達は、あんな近くで発掘調査をしているとは知りませんでした。

あの日急に行く事になり、みんな心をうきうきさせて見学させていただきました。

縄文式土器など、何千年前の人が、使い、さわった物を、じかにさわって、見て昔の人がくらしている様子が、目にうかんでくるようです。土の色、かたさなどで、ここには何があったか、何年前の物かわかつてしまうなんて私は、びっくりしてしまいました。

社会科の大好きな私は、とても良い経験をしたと思います。

また何かめずらしい物など見つかったらすぐに芳川小学校六年三組に知らせて下さい。

どうもありがとうございました。

(田中 ゆかり)

図 版



A地区遠景
(南より)



同上
発掘状況



中二子地区遠景
(東より)

図版1 発掘調査地遠景



穢散状況
(東より)



第1号住居址
(西より)



第2号住居址上面

図版2 第1・2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第5号住居址

図版3 第3～5号住居址



第6号住居址
鉄器出土箇所

3 12 8



第7号住居址
カマド破壊状況

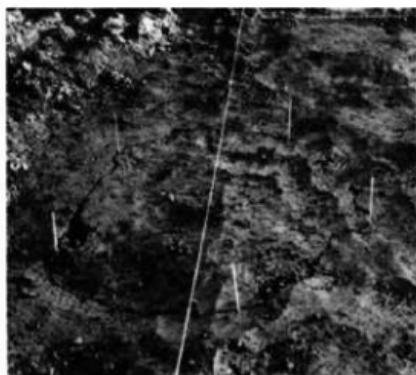


第8号住居址
カマド部分

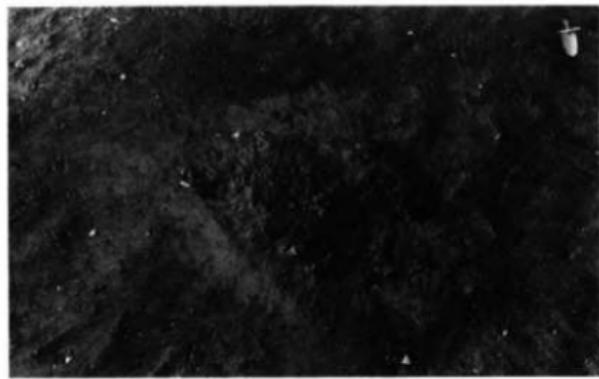
図版4 第6～8号住居址



第1号墓址



第3号墓址



第2号墓址

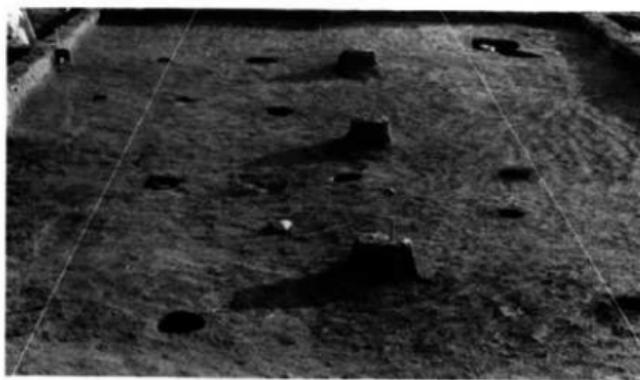
圖版5 第1~3号墓址



D～F-12
縄文土器出土状況



I-2
縄文後期土器
出土状況



K～M-3～5
ピット群
(北より)

図版 6 その他の遺構



第1号住居址出土横瓶



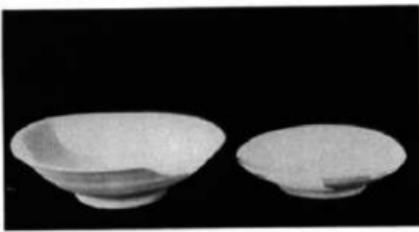
第6号住居址出土罐釜



第7号住居址出土土师器罐



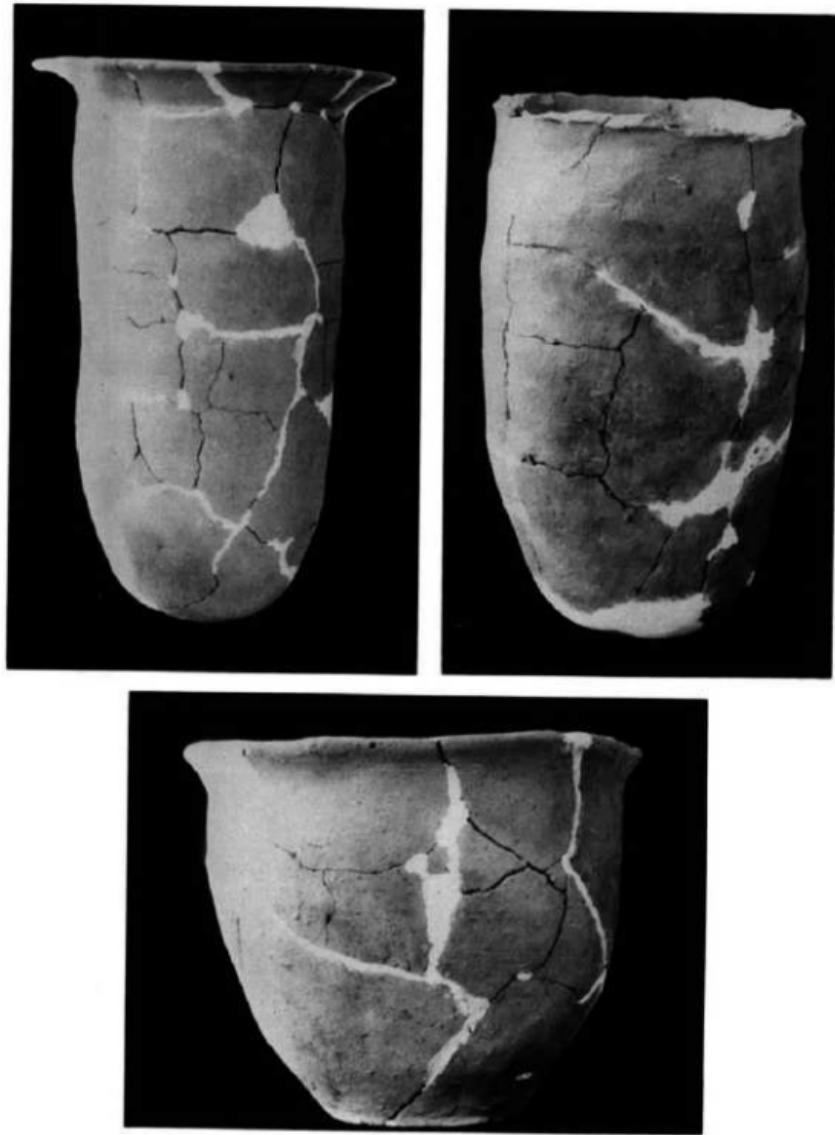
第6号住居址出土土师器罐 第2号住居址出土须唇器环



第1号住居址出土灰釉陶器碗

E-11出土灰釉陶器皿

图版7 土器(1)



3点とも第2号住居址出土土器甕

図版8 土器(2)



E - 14出土



E - 14出土

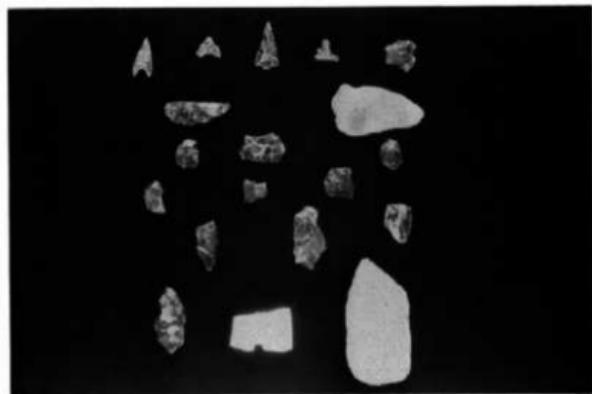


I - 2 出土



I - 2 出土

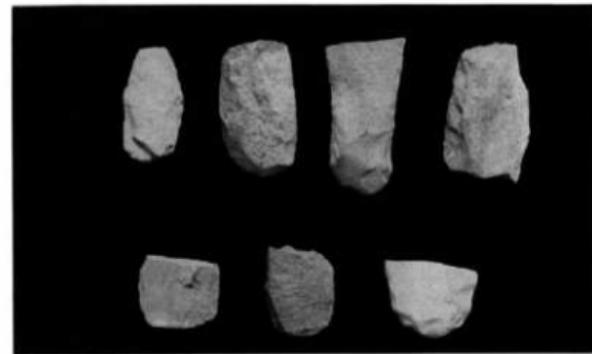
图版 9 土 器 (3)



1~19



20~29

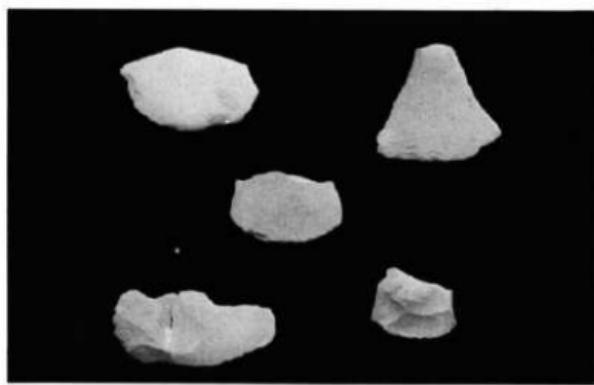


30~36

図版10 石器(1)



37~44

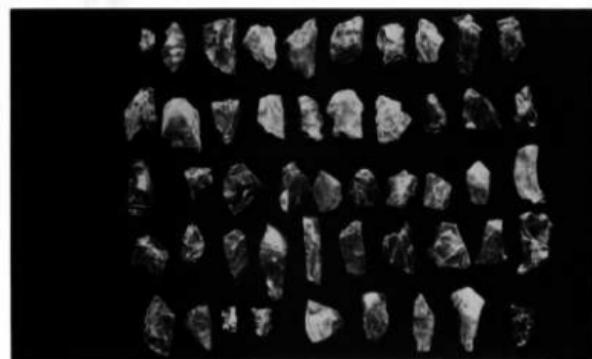
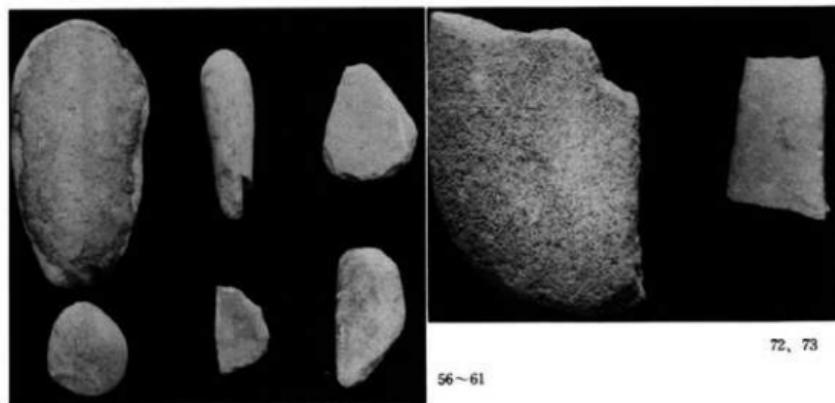


45~49



50~55

図版11 石器(2)



第5号住居址覆土出土
黒曜石
(左上段2点は
使用痕あり)

図版12 石器(3)・黒曜石

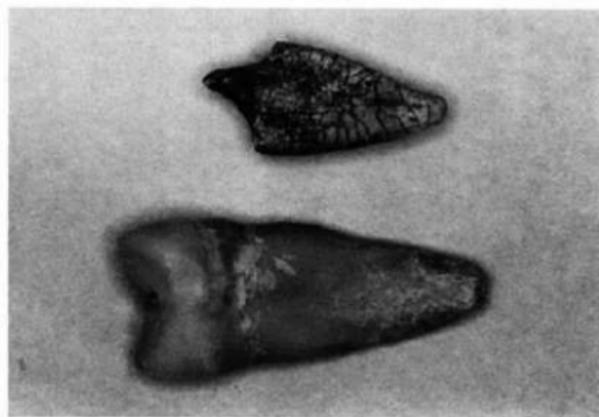


土偶

左 第3号住居址覆土出土
右 G-12出土



鐵器



第1号墓址出土
齒（下段は
現代の歯）

図版13 土偶・鐵器・齒



図版14 記念撮影

松本市文化財調査報告No.24

—松本市笠置くまのかわ遺跡緊急発掘調査報告書—

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 電算印刷株式会社

